仲　村　廃　寺

～ 旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書 ～

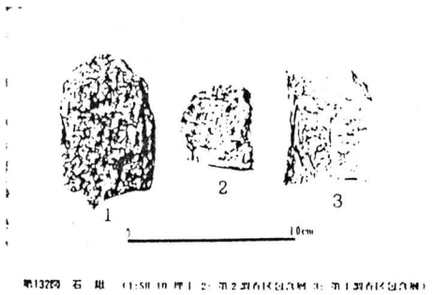
笹川蔵書

1989 年 3 月

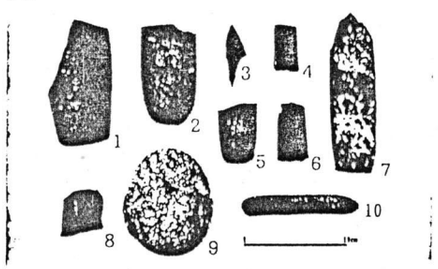
善通寺市教育委員会

訂正表

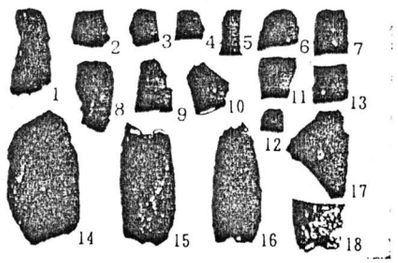
※図版中第132図～第135図・第138図～第140図・第144図～第147図において、資料写真中の番号が欠落していますので訂正表を参考にして下さい。



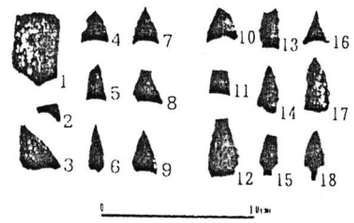
第132図　石　鏃　(1:SH-10 覆土　2:第2調査区包含層　3:第1調査区包含層)



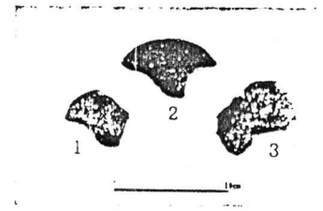
第133図　扁平石斧・凹石・敲石・磨石　(1,3,8:第3調査区包含層　2,6,9:第2調査区包含層　4:SH-06　5:SH-19覆土　7:SH-13　10:SD-08覆土)



第134図　石包丁・刃器
(1,7:SH-30覆土　2,4～6,10～12,14,17,18:第1調査区包含層　3,13,16:第1調査区包含層　8:SH-17覆土　9:SH-05覆土　15:SD-07埋土)

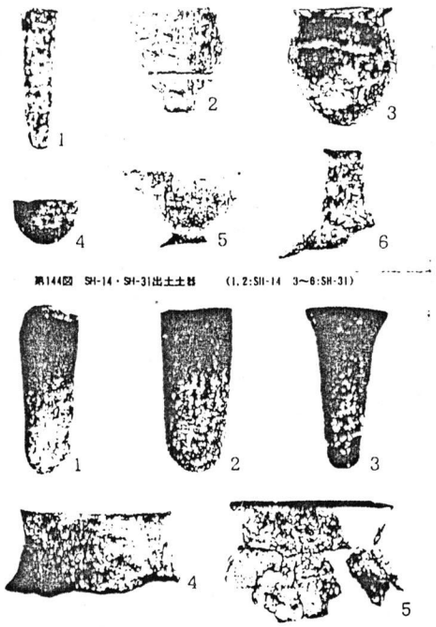


第135図　石鏃・刃器
(1～8:SH-31　9:SH-11　10,11,17:第1調査区包含層　12:SK-06　13,18:第2調査区包含層　15:SH-02覆土　16:SH-26覆土　17:第3調査区包含層)



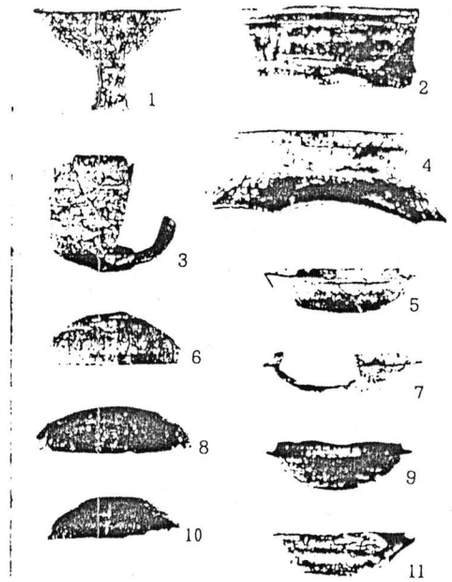
第139図　紡錘(1:第2調査区III層　2:第1調査区III層)

第140図　分銅型土製品(1:第1調査区III層　2,3:第3調査区III層)

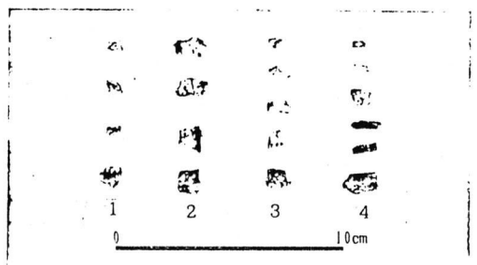


第144図　SH-14・SH-31出土土器　(1,2:SH-14　3～6:SH-31)

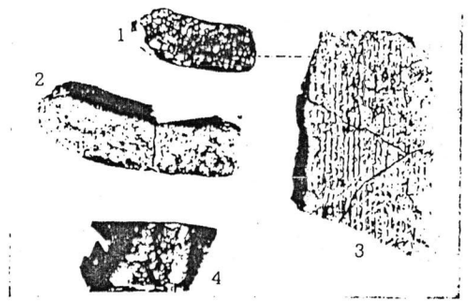
第145図　住居内埋出土支柱・土師器　(1:SH-18　2:SH-26　3:SH-28　4:SH-17　5:SH-18)



第146図　竪穴住居跡等出土遺物
(1:SH-18　2:SH-17　3:SH-16　4:SD-09　5:SH-26　6:SH-16　7:SH-17　8:SH-07　9:SH-18覆　10:SH-20　11:SH-04覆)



第138図　竪穴住居内埋中炭化物層出土魚骨・獣骨
(魚骨…1:SH-06　獣骨…2:SH-16　3:SH-26　4:SH-28)



第147図　神付廃寺跡遺構出土遺物　(1,2:第2調査区IV層　3,4:SD-05)

刊行にあたって

この報告書は、善通寺市教育委員会が昭和63年11月７日から平成元年３月31日まで実施した、旧練兵場遺跡における仲村廃寺遺構確認調査の記録であります。

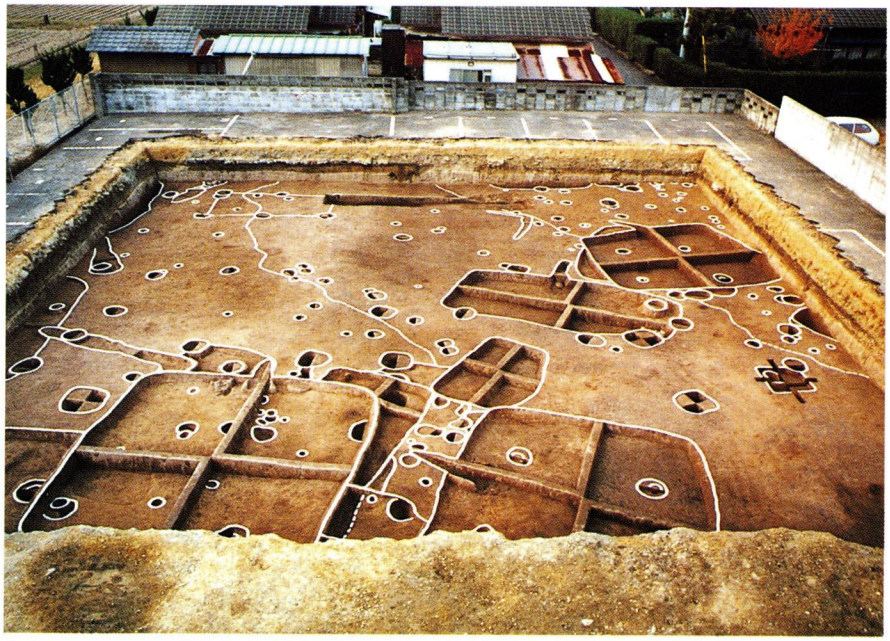
善通寺市街地から北側に広がる旧練兵場遺跡は、香川県下を代表する中枢的な集落遺跡として有名ですが、昭和59年の彼ノ宗地区・昭和60年の仙遊地区の発掘調査に続いて、仲村廃寺周辺の確認調査が実施され、これまでに予想もされなかったような事実が多数判明しています。

市内では他にも「王墓山古墳」「九頭神遺跡」「稲木遺跡」など数多くの発掘調査が実施され、貴重な文化財も多数発見されております。これらの報告書を通して埋蔵文化財に対するご理解を深めていただき、今後の学術文化の向上、本市文化財行政に少しでも役立てて参りたいと存じます。

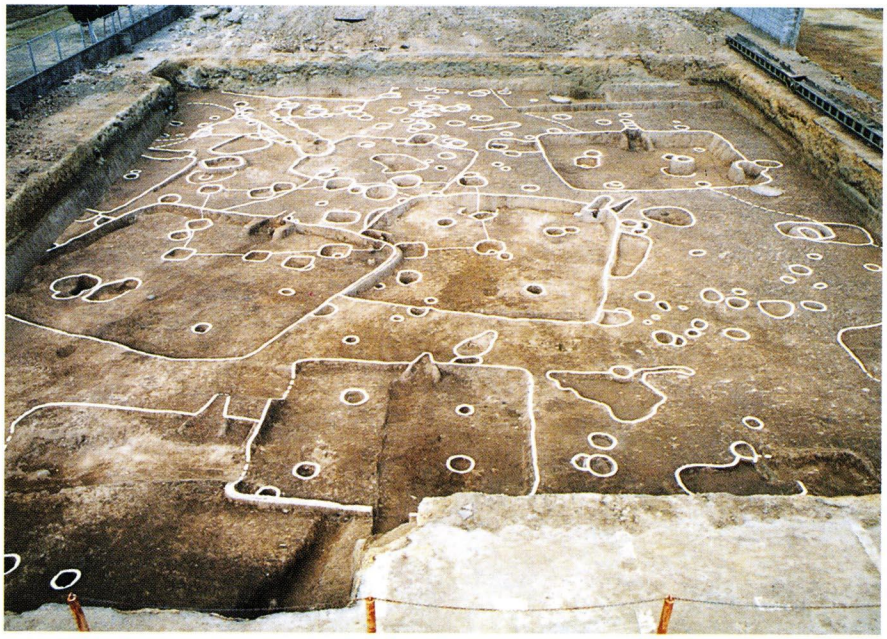
これまで，発掘調査にご協力いただきました地元の皆様をはじめ、関係各位に対して心から感謝申し上げ、今後とも一層のご支援とご協力をお願い申し上げる次第であります。

平成元年　３月31日

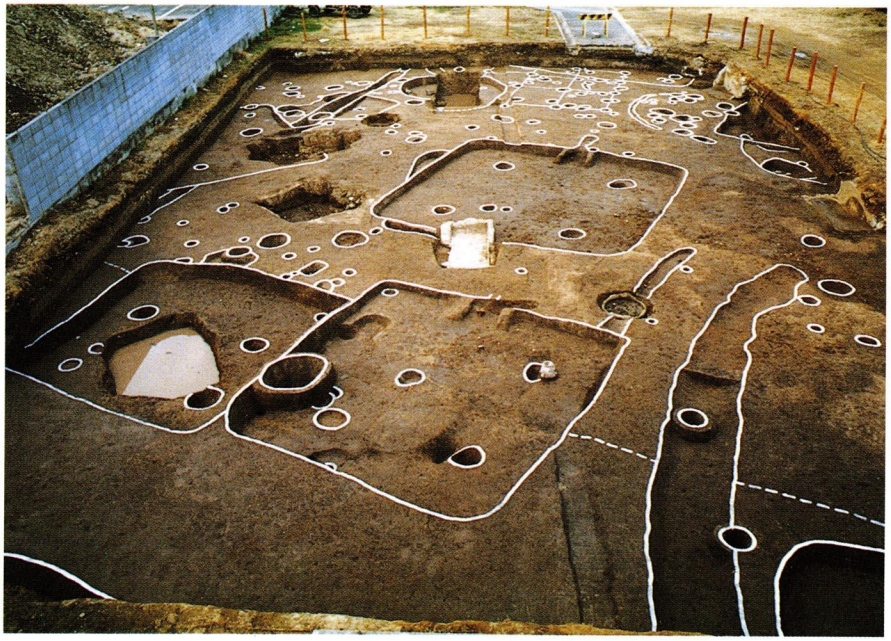
善通寺市教育長　勝　田　英　樹



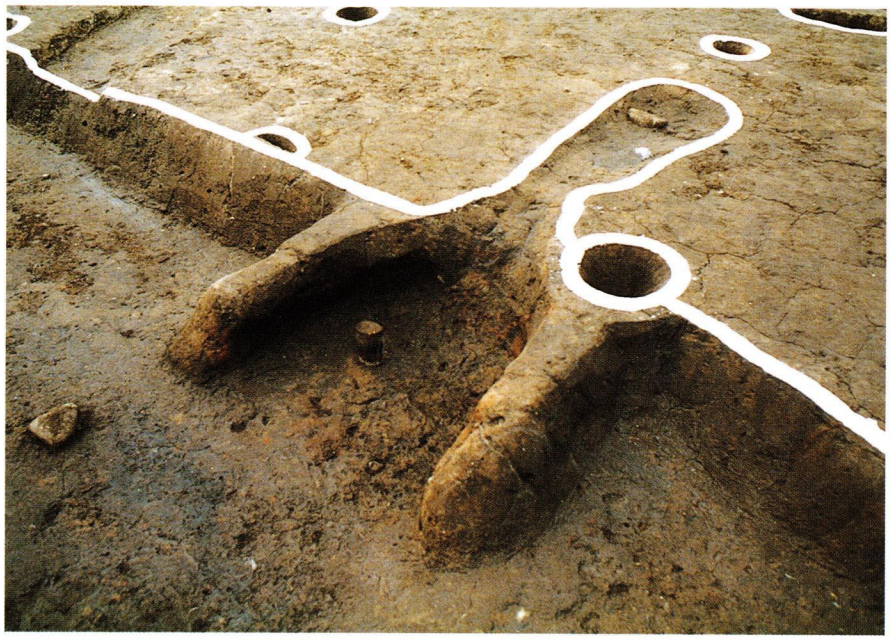
第 1 調査区遺構検出状況(南から望む)



第 2 調査区遺構検出状況(南から望む)



第 3 調査区遺構検出状況(南から望む)



竈の検出状況・SH-26(南東から望む)

例　　言

1．本書は旧練兵場遺跡東端部に所在する、仲村廃寺の遺構確認調査報告書である。

2．本遺跡は伝導寺跡との呼称もあるが、「香川県史」「香川叢書」では仲村廃寺とされており、本報告書ではこれに統一する。

3．発掘調査は善通寺市仙遊町一丁目230-4・1303-1・1303-2において、昭和63年11月７日から平成　元年２月23日まで行い、平成元年３月31日まで市立郷土館において整理作業を実施した。

4．調査は善通寺市教育委員会文化振興室が実施した。組織は下記のとおりである。

総　括	教育長	勝田　英樹	庶　務	主　事　佐藤　知子
	室　長	饗庭　　健	調査担当	主　事　笹川　龍一
	副主幹	山下　義則		
	係　長	片山美代子	調査補助	四国学院大学

5．本書の執筆は調査担当者である笹川龍一が行い、遺物の実測については四国学院大学学生他の協力を得た。

6．遺構については、SH(竪穴住居)・SK(土坑)・SP(柱穴)・SD(溝)・SB(堀立柱建物)・SR(自然河川)・SX(不明遺構)で表示した。また遺構実測図中の矢印は全て磁北を指す。

目　　次

刊行にあたって・グラビア・例　言・目　次

第一章　遺跡周辺の地理と歴史 …… 1

第二章　調査に至る過程 …… 7

第三章　調査の概要 …… 9

各調査区の遺構と遺物　①仲村廃寺関連遺構 …… 10

②第１調査区 …… 13

③第２調査区 …… 28

④第３調査区 …… 45

第四章　ま　と　め …… 63

図　　版 …… 64

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺遠景 …… 1

第２図　調査地と周辺の主要遺跡 …… 4

第３図　調査地及び調査区配置図 …… 8

第４図　灰褐色砂質土層出土遺物実測図及び拓影 …… 9

第５図　SD－04・05実測図 …… 10

第６図　第２調査区西壁土層実測図 …… 11

第７図　SD－05出土遺物実測図 …… 11

第８図　SD－05出土古瓦実測図及び拓影 …… 12

第９図　SB－02実測図 …… 13

第10図　第１～３調査区Ⅷ層出土遺物実測図－① …… 13

第11図　第１調査区遺構配置図 …… 14

第12図　第１～３調査区Ⅷ層出土遺物実測図－② …… 15

第13図　SH－01実測図 …… 16

第14図　SH－02・03実測図 …… 17

第15図　SH－02・03出土遺物実測図 …… 18

第16図　SH－04出土遺物実測図 …… 18

第17図　SH－04実測図 …… 19

第18図　SH－05実測図 …… 20

第19図　SH－05出土遺物実測図 …… 21

第20図　SH－06出土遺物実測図 …… 21

第21図　SH－06実測図 …… 22

第22図　SH－07実測図 …… 23

第23図　SH－07出土遺物実測図 …… 24

第24図　SH－08実測図 …… 25

第25図　SH－09実測図 …… 25

第26図　SH－10出土遺物実測図 …… 25

第27図　SH－10実測図 …… 26

第28図　SB－01実測図 …… 27

第29図　SX－01実測図 …… 27

第30図　SX－01出土遺物実測図 …… 27

第31図　SK－06出土遺物実測図 …… 28

第32図　SK－06実測図 …… 28

第33図　第２調査区遺構配置図 …… 29

第34図　SH－11実測図 …… 30

第35図　SH－12・13実測図 …… 30

第36図　SH－14実測図 …… 31

第37図　SH－14出土遺物実測図 …… 31

第38図　SH－15出土遺物実測図 …… 31

第39図　SH－15実測図 …… 32

第40図　SH－16実測図 …… 33

第41図　SH－16出土遺物実測図 …… 34

第42図　SH－16竈出土遺物実測図 …… 34

第43図　SH－17実測図 …… 35

第44図　SH－17Ⅱ層出土遺物実測図 …… 36

第45図　SH－17竈（Ⅲ層）出土遺物実測図 …… 37

第46図　SH－18Ⅰ層出土遺物実測図 …… 37

第47図　SH－18実測図 …… 38

第48図　SH－18竈及び床面直上出土遺物実測図 …… 39

第49図　SH－19実測図 …… 40

第50図　SH－19出土遺物実測図 …… 40

第51図　SH－20実測図 …… 41

第52図　SH－20出土遺物実測図 …… 42

第53図　第２調査区土坑群出土遺物実測図 …… 43

第54図　第３調査区遺構配置図 …… 44

第55図　SH－21実測図 …… 45

第56図　SH－21出土遺物実測図 …… 46

第57図　SH－22実測図 …… 46

第58図　SH－22出土遺物実測図 …… 47

第59図　SH－23中土坑（SK-30）出土遺物実測図 …… 47

第60図　SH－23実測図 …… 48

第61図　SH－24及び遺物出土状況実測図 …… 49

第62図　SH－24出土遺物実測図－① …… 50

第63図　SH－24出土遺物実測図－②　……　51
第64図　SH－24出土遺物実測図－③　……　52
第65図　SH－25実測図　……　53
第66図　SH－26・SH－27実測図　……　54
第67図　SH－26出土遺物実測図　……　55
第68図　SH－26床面出土滑石製紡錘車実測図　…　55
第69図　SH－28実測図　……　56
第70図　SH－28出土遺物実測図　……　57
第71図　SH－29・SH－30実測図　……　58
第72図　SH－29・SH－30出土遺物実測図……　58
第73図　SH－31実測図　……　59
第74図　SH－31出土遺物実測図　……　60
第75図　SH－32実測図　……　60
第76図　SB－03実測図　……　61
第77図　第３調査区各遺構出土遺物実測図　……　62

図　版　目　次

第78図　伝導寺墓地に残る礎石　……　66
第79図　調査地全景　……　66
第80図　SD－04・SD－05検出状況　……　67
第81図　SD－04・SD－05土層堆積状況……　67
第82図　SB－02検出状況　……　68
第83図　SH－01検出状況　……　68
第84図　SH－02・SH－03検出状況　……　69
第85図　SH－02竈検出状況　……　69
第86図　SH－04検出状況　……　70
第87図　SH－04竈検出状況　……　70
第88図　SH－05検出状況　……　71
第89図　SH－05竈検出状況　……　71
第90図　SH－06検出状況　……　72
第91図　SH－07検出状況　……　72
第92図　SH－08検出状況　……　73
第93図　SH－09検出状況　……　73
第94図　SH－10検出状況　……　74
第95図　SB－01検出状況　……　74
第96図　SX－01竈の羽口出土状況　……　75
第97図　SK－13遺物出土状況　……　75
第98図　SH－11検出状況　……　76
第99図　SH－12・13・14検出状況　……　76
第100図　SH－15検出状況　……　77
第101図　SH－16検出状況　……　77
第102図　SH－16竈中の土層の堆積と土製鏡模造品出土状況…　78
第103図　SH－16竈検出状況　……　78
第104図　SH－16床面に残された掘り具先端の痕跡　…　79
第105図　SH－17検出状況　……　79
第106図　SH－17竈の検出及び遺物の出土状況　…　80
第107図　SH－18検出状況　……　80
第108図　SH－18竈検出前の状況　……　81
第109図　SH－18竈の検出及び遺物の出土状況　…　81
第110図　SH－19検出状況　……　82
第111図　SH－19竈検出状況　……　82
第112図　SH－20検出状況　……　83
第113図　SH－20竈検出状況　……　83
第114図　SH－21検出及び遺物出土状況　……　84
第115図　SH－22検出状況　……　84
第116図　SH－23検出状況　……　85
第117図　SH－24検出及び遺物出土状況　……　85
第118図　SH－24遺物出土状況　……　86
第119図　SH－25検出状況　……　86
第120図　SH－26・SH－27検出状況　……　87
第121図　SH－26床面遺物出土状況　……　87
第122図　SH－26竈検出前の状況　……　88
第123図　SH－26竈検出状況　……　88
第124図　SH－28検出状況　……　89
第125図　SH－28竈の検出及び遺物の出土状況　…　89
第126図　SH－29検出状況　……　90
第127図　SH－30検出状況　……　90
第128図　SH－31検出状況　……　91
第129図　SH－31北西隅柱穴遺物出土状況　……　91
第130図　SH－32検出状況　……　92
第131図　SB－03検出状況　……　92
第132図　石鏃　……　93
第133図　磨製石斧・凹石・敲石・砥石　……　93
第134図　石包丁・刃器　……　94
第135図　石鏃・刃器　……　94
第136図　SH－16出土土製鏡模造品　……　95
第137図　SH－26出土滑石製紡錘車　……　95
第138図　竪穴住居内竈中炭化物層出土魚骨・獣骨…　95
第139図　蛸壺　……　96
第140図　分銅型土製品　……　96
第141図　SX－01出土竈の羽口　……　96
第142図　SH－29埋土出土紡錘車　……　96
第143図　SH－24出土土器　……　97
第144図　SH－14・SH－31出土土器　……　98
第145図　住居竈出土支脚・土師器　……　98
第146図　竪穴住居跡等出土遺物　……　99
第147図　仲村廃寺関連遺構出土遺物　……　100

第一章　遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70～80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が包含されていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山。西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ケ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

第１図　調査地周辺遠景（左から大麻山・香色山・甲山・筆の山・我拝師山・中山・火上山）

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器については、幾内第１様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は２～３㎞を計るが、当時の復元海岸線が現在の標高５ｍあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約3,000年前まで遡ることができる。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稲木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりか、弥生時代前期かち後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られていた。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの河道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに実施された発掘調査を順に紹介すると、総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡の調査から始まる。ここでは弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺(伝導寺跡)の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺溝が検出された。今回調査が実施されたのは、その北側の駐車場跡地の広い範囲である。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘

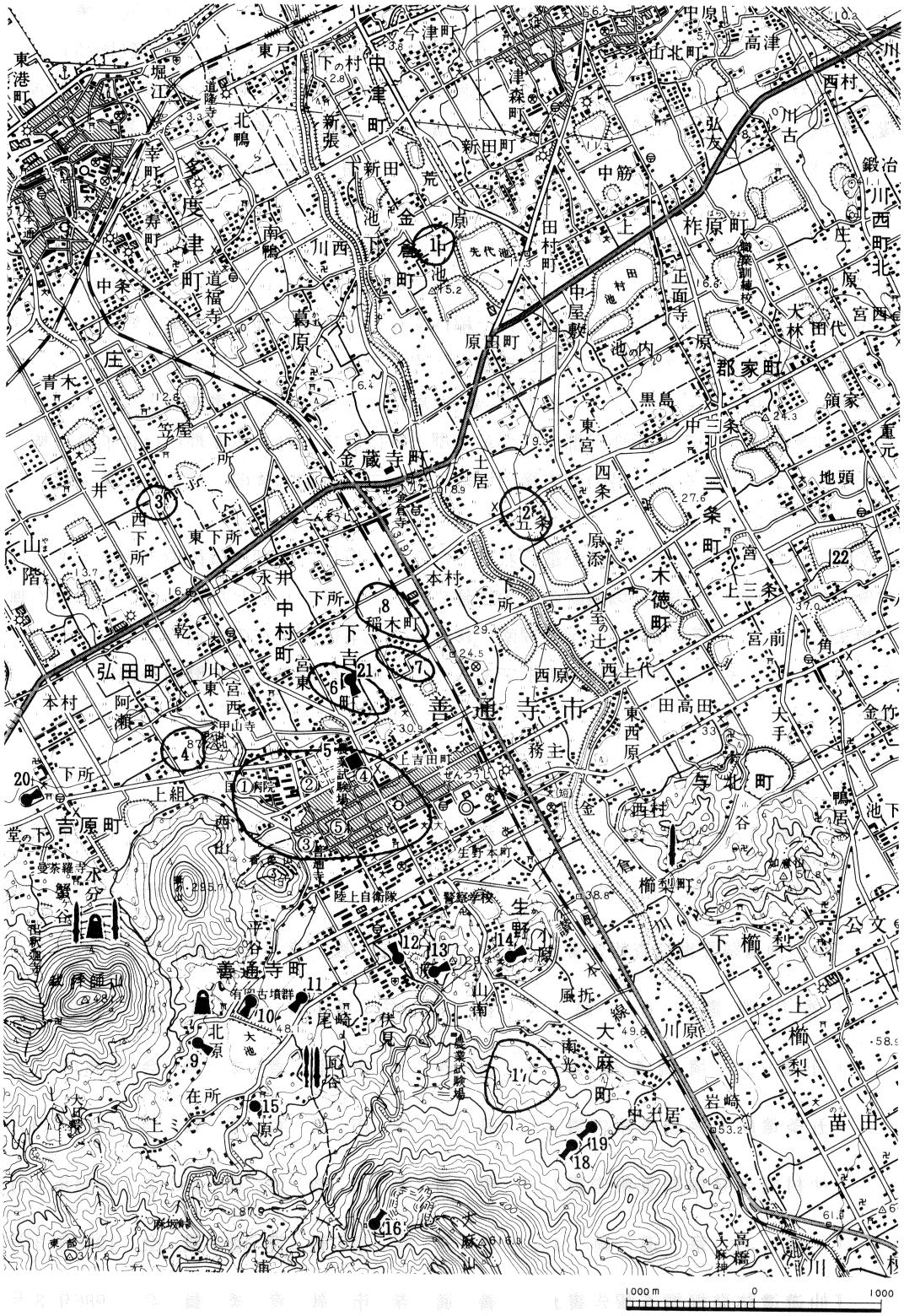
調査が実施されたが、ここでは約1,500 ㎡の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居跡・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳などが発見され、特に弥生時代終末期の竪穴住居跡からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏃・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年10月から昭和63年1月まで都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居跡や小児壺棺墓・箱式石棺等が確認されている。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。ここから北方に隣接する稲木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡群や墓地、中世の建物跡群が多数確認されている。こうした集落遺跡群は旧地形をみると、いずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであることがわかるが、これまでの調査結果をみるといずれも同時期に併存していたようである。従って弥生時代頃の善通寺周辺には、“大集落”というよりはむしろ“地方都市”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口:細形銅剣5口:中細形銅鉾1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形銅剣5口:銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目されている。

古墳時代に入ってもこの地の勢力は衰えず、市内だけでも400基を超える古墳が存在し、中でも筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

1. 中ノ池遺跡
2. 五条遺跡
3. 三井遺跡
4. 甲山北遺跡
5. 旧練兵場遺跡
①彼ノ宗遺跡
②仙遊遺跡
③善通寺西遺跡
④仲村廃寺（伝導寺跡）
■仲村廃寺調査区
⑤善通寺伽藍
6. 九頭神遺跡
7. 石川遺跡
8. 稲木遺跡
9. 北原古墳
10. 菊塚古墳
11. 王墓山古墳
12. 丸山古墳
13. 鶴ガ峰4号墳
14. 磨臼山古墳
15. 宮ガ尾古墳
16. 野田院古墳
17. 岡古墳群
18. 大麻山椀貸塚
19. 大麻山経塚
20. 青龍古墳
21. 下吉田八幡神社古墳
22. 宝憧寺跡（白鳳期）



第２図　調査地と周辺の主要遺跡　（１:50,000）

まず積石塚としては、大麻山経塚、大麻山椀貸塚、丸山1号・2号墳、野田院古墳、御忌林古墳、大窪ケルンなどが知られているが、中でも野田院古墳は大麻山北西麓(標高405m)のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古段階の前方部盛土後円部積石墳である。有岡地区には、同一系譜上の首長墓群と考えられる6基の前方後円墳が確認されており、北東から南西にかけて磨臼川古墳・鶴ガ峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚・北原古墳の順にならんでいる。古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現するが、中には宮ガ尾古墳に代表されるような線刻画で装飾された横式石室が計8基確認されているなど、様々な点で興味は尽きない。

古墳時代になると弥生時代に開始された稲作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤を背景に、特定の有力者が地域を代表する権力者として生まれ変わり、この様に数多くの古墳を築いたが、この権力者(豪族)層は、奈良時代には貴族層となる。この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯一族の一代系譜の墓ではないかという見方がある。

やがて仏教の伝来に伴い古墳が造られなくなるが、既に白鳳期には佐伯の氏寺である仲村廃寺(伝導寺跡)が旧練兵場遺跡の一角に建立されている。しかしながらこの寺は間も無く焼失してしまい、その際に500mの程南に移転されたものが現在の善通寺ではないかと考えられている。そして古代文化の中枢であったこの地は門前町として繁栄を続け、現在に至っている。

参考文献

『善通寺市の古代文化』　善通寺市　1973年11月

『善通寺市史』　善通寺市　1977年7月

『中の池遺跡発掘調査報告書』　丸亀市教育委員会　1982年3月

『香川叢書・考古篇』　香川県教育委員会　1983年3月

『王墓山古墳調査概報』　善通寺市教育委員会　1983年3月

『五条遺跡発掘調査報告書』　善通寺市教育委員会　1983年11月

『仲村廃寺発掘調査報告書』　善通寺市教育委員会　1984年3月

『彼ノ宗遺跡』　善通寺市教育委員会　1985年3月

『仙遊遺跡発掘調査報告書』　善通寺市教育委員会　1986年3月

「彼ノ宗遺跡の発掘調査とその問題点」『香川史学』15号	笹川龍一	1986年6月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	九頭神遺跡発掘調査団 善通寺市教育委員会	1988年3月
『稲木遺跡』	稲木遺跡発掘調査報告書	1989年3月
『香川県埋蔵文化財年報』	昭和58年度　香川県教育委員会	1988年3月
『香川県埋蔵文化財年報』	昭和58～62年度　香川県教育委員会	1988年3月
『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』	昭和58年度　香川県教育委員会	1984年3月
『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』	昭和59年度　香川県教育委員会	1985年3月
『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』	昭和60年度　香川県教育委員会	1986年3月
『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』	昭和61年度　香川県教育委員会	1987年3月
『県道西白方善通寺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』	昭和61年度　香川県教育委員会 善通寺市	1987年3月
『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第一冊　中村・乾・上一坊遺跡	昭和61年度　香川県教育委員会 日本道路公団	1987年3月
『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第三冊　矢ノ塚遺跡	昭和61年度　香川県教育委員会 日本道路公団	1987年10月

第二章　調査に至る過程

前章で紹介した旧練兵場遺跡の一角に、白鳳期に創建された寺院－仲村廃寺－の遺構が残ると伝えられる地区がある。伝導寺跡とも呼称されるこの寺院跡について、伽藍配置はもとより正確な寺域・寺の歴史等を記載した文献等は残されていないが、付近の側溝工事やビル建設工事の際に出土した瓦や、伝導寺墓地内に墓石に転用された礎石が残存していることから、善通寺町村道下付近にあったのではないかと推定されている。

しかしながら、この周辺部では正式な調査が実施されないままビルや家屋が林立し、このままでは仲村廃寺の詳細が確認できなくなってしまうことを懸念し、善通寺市教育委員会は遺構が残るとされる市営駐車場において、昭和58年８月１日から８月24日まで第１次調査を同年11月21日から翌年２月10日まで第２次調査を実施した。

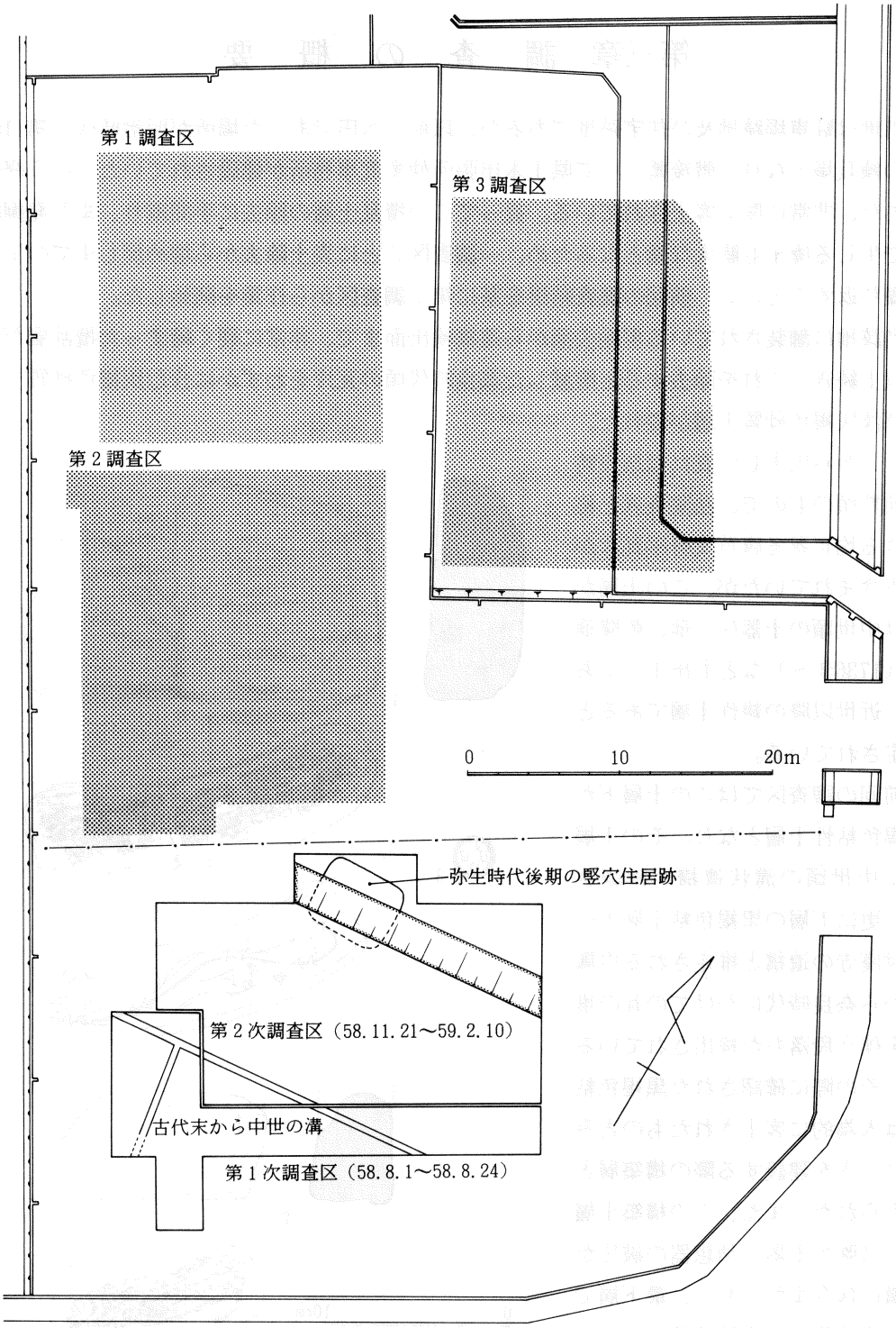
調査の結果、古代末から中世頃の所産と考えられる一部石積みの溝が検出されている。その下層は弥生時代中期頃から古墳時代後期末までの遺物を多く含む厚い構築層であり、調査区北東部で白鳳時代から奈良時代の瓦の堆積を伴う段落ちが認められた。この遺構は東西方向に方位を取り、ここから東方約4.2kmに位置する同じ白鳳時代創建の宝幢寺の方位と一致していることや、出土遺物などから伝導寺の遺構と判断された。従って、寺域は礎石の残る伝導寺墓地を中心とした方1.5町程度の規模が推定されている。また発掘調査によって出土した瓦が白鳳から奈良時代までに限られているため、この寺は奈良時代には既に廃絶していたものと考えられるが、その際にここから500m程南西に再建され、善通寺伽藍として生まれ変わったのではないかと推定されている。善通寺伽藍は条里方位と一致し、方２町の区画とも合致しているにもかかわらず、白鳳時代の瓦（仲村廃寺の瓦と同范瓦を含む）が出土していることも理由の一つである。

また、この構築層中からは滑石製有孔円盤・船形土製品・ミニチュア土器・銅鏃等が出土しており、更に下層では弥生時代後期末頃の所産と考えられる竪穴住居跡も検出されていることから、仲村廃寺の遺構下には弥生時代から古墳時代にかけての集落遺構が複合していることが明らかにされた。

善通寺市内は近年特に都市化が進み、昭和62年12月16日に四国横断自動車道路（善通寺～豊浜間）が開通し、昭和63年４月10日に瀬戸大橋が機能し始めてからは、市内にインターチェンジが設置されたこともあり、閑静な田園都市善通寺市も従来の地域生活の改変時期を迎え、市街地の中心部にあるこの地区も開発の危機に曝されている。

そこで、仲村廃寺の遺溝が続くと考えられる前回の調査区北側の市営駐車場跡地と市営住宅跡地で遺構の確認調査を実施することとなった。

発掘調査は前回の結果を踏まえて該当地区内に第１～第３調査区を設定し、昭和63年11月７日、駐車場跡地のアスファルト除去から作業を開始した。



第3図　調査地及び調査区配置図

白鳳～奈良時代の瓦の堆積を伴う
7世紀頃の構築層による土壇

第三章　調　査　の　概　要

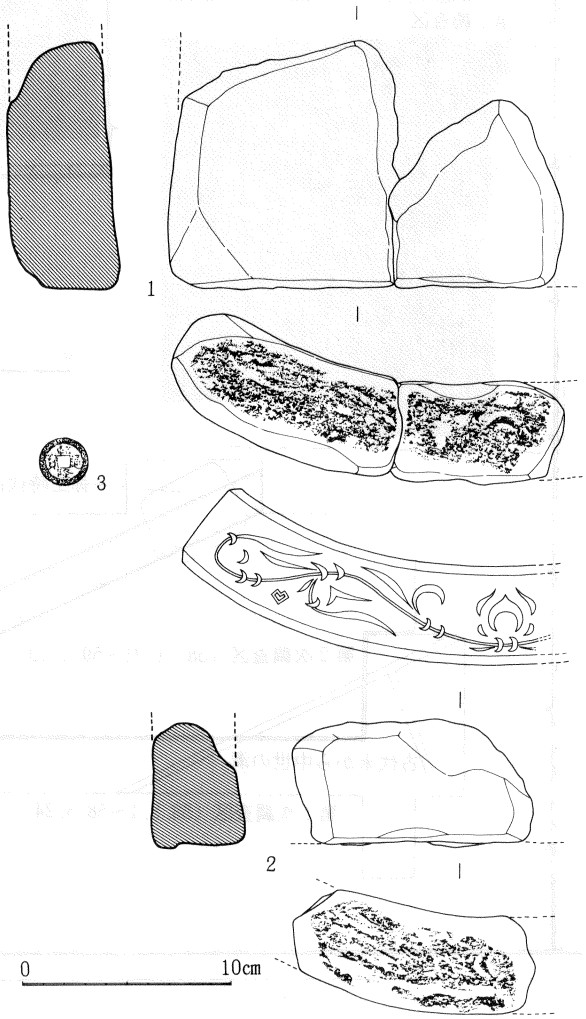
当地は駐車場跡地及び住宅跡地であるが、以前は水田であった場所が明治時代に第11師団の練兵場となり、戦後暫くして県土木出張所仲多度事務所が建設されていたという経緯があり、非常に厚く客土されている。従ってこの攪乱土層の除去に手間取り、また発掘調査で生じる廃土も膨大な量となるため、一調査区ごとに表土除去から埋め戻しまでの工程を繰り返すこととし、前回の調査結果を基に第１調査区から作業を開始した。

当該地は舗装されている現地表面から遺構検出面まで、非常に硬く締まった攪乱層が80cm以上続き、これを除去すると磨滅した奈良時代頃の瓦片をわずかに含む灰褐色砂質土層及び淡灰褐色砂質土層が現れた。

ここから出土した瓦には奈良時代前期頃のもので、法隆寺式と称される均正忍冬唐草文軒平瓦片が２点含まれていたが、この土層からは中世頃の土器片の他、乾隆通寶（1736年～）なども出土しており、近世以降の耕作土層であると推定されている。

前回の調査区ではこの土層下が灰褐色粘性土層となり、その土層上に中世頃の溝状遺構が確認され、更に下層の黒褐色粘土層上に仲村廃寺の遺構と推定される白鳳期から奈良時代にかけての瓦の堆積を伴う段落ちが検出されているが、その際に確認された黒褐色粘土は人為的に客土されたものとみられ、寺を建設する際の構築層と考えられた。また、この構築土層中には弥生土器や須恵器の破片が多量に包含されており、最下層では弥生時代から古墳時代にかけての遺構が検出されている。

今回の調査範囲では、灰褐色砂



第４図　灰褐色砂質土層出土遺物実測及び拓影

質土層及び淡灰褐色粘性土層下は黒褐色粘性土層となっており、中世頃の遺構は全く確認されておらず、仲村廃寺に関連あると推定される遺構については、第2調査区の一部で溝状遺構や掘立柱建物跡が検出されただけである。しかしながら、第1～第3調査区全域に堆積する黒褐色粘土の包含層下からは弥生時代から古墳時代後期末にかけての竪穴住居跡32棟と古墳時代頃の掘立柱建物跡2棟をはじめ、無数の柱穴・土坑群等が検出されている。

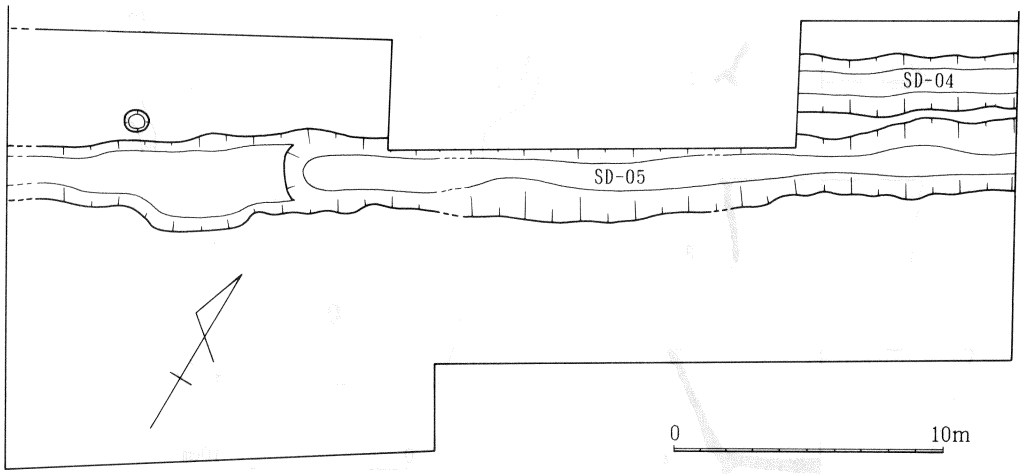
各調査区の主要遺構と遺物

①　仲村廃寺関連遺構

今回の調査では第1～第3調査区まで設定したが、仲村廃寺関連遺構は第2調査区南端で検出された2条の溝状遺構と、やはり第2調査区中央部で検出された1棟の掘立柱建物跡だけである。掘立柱建物跡については、第2遺構面検出後に確認されているが、埋土や遺構の切り合い関係などから、2条の溝状遺構とほぼ同一時期の所産と判断された。

まず、これらの遺構について解説した後、検出された遺構と出土した遺物を調査区ごとに紹介する。

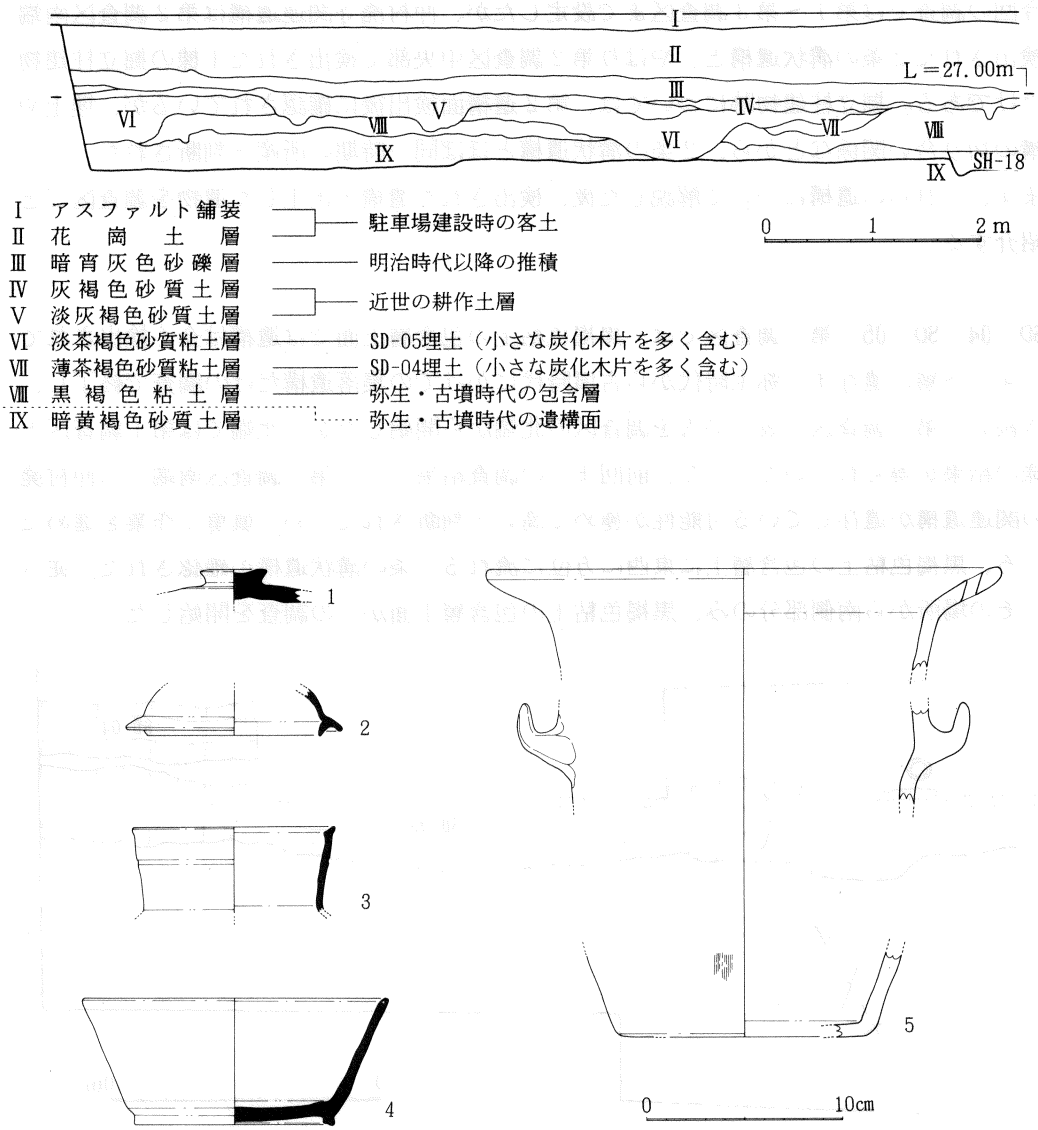
SD－04・SD－05　第1調査区では、黒褐色粘土の包含層上面では遺構は全く検出されておらず、下層に遺存する弥生時代から古墳時代にかけての集落遺構だけの調査で終了し、引き続いて第2調査区の表土除去を調査区の北端から開始したが、北端では第1調査区と同様の結果が得られていた。ただ、前回までの調査結果から、第2調査区南端では仲村廃寺の関連遺構が遺存している可能性が極めて高いと判断されたため、慎重に作業を進めたところ、黒褐色粘土の包含層上に東西に方位に流れる2条の溝状遺構が確認された。従って、その場所から南側部分のみ、黒褐色粘土の包含層上面からの調査を開始した。



第5図　SD-04・SD-05 実測図

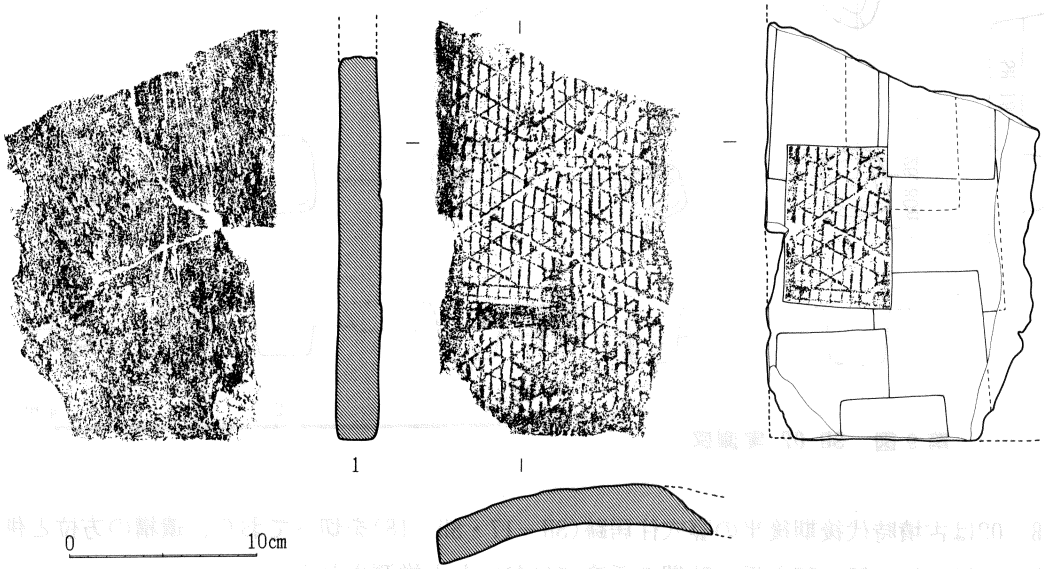
その結果、W－30°－Sの状里と並行な方位に流れる２状の溝状遺構が検出され、北側ものからSD－04、SD－05とした。SD－04は遺構の一部が、重機による包含層除去作業の際に一部失われてしまっていた。しかし調査区の西壁土層の観察の結果、２条の溝は並行に流れているものの、調査区西端では重なり、SD－05がSD－04を切っていることが判明した。

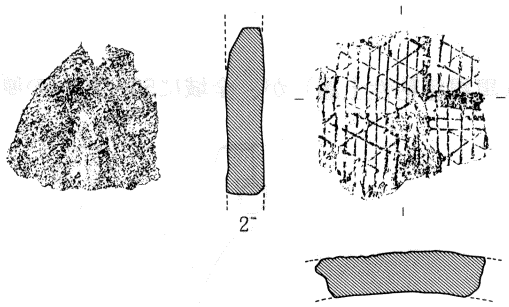
SD－04からは時期が特定できるような遺物は出土していないが、SD－05からは荒い叩き目が見られる瓦片と伴に、須恵器・土師器が出土している。また、SD－04の埋土は薄茶褐色砂質粘土層、SD－05の埋土は淡茶褐色砂質土層であるが、いずれにも小さな炭化木片が多量に含まれていた。



第７図　SD-05 出土遺物実測図

これまでの調査結果として、仲村廃寺は白鳳期に創建されたが、奈良時代に不慮の事故で焼失したと考えられている。SD－05から出土した遺物は奈良時代のものばかりで、わずかながら白鳳期の瓦片を含んでいることや、遺構の埋土中に炭化木片が多く含まれていること、仲村廃寺の遺構は東西方向に遺存しているが、SD－04とSD－05は条里方位と平行に遺存していることなどを考え併せれば、SD－04とSD－05は仲村廃寺廃絶時か、そう時間が経過しない頃の所産ではないかと推定される。





第8図

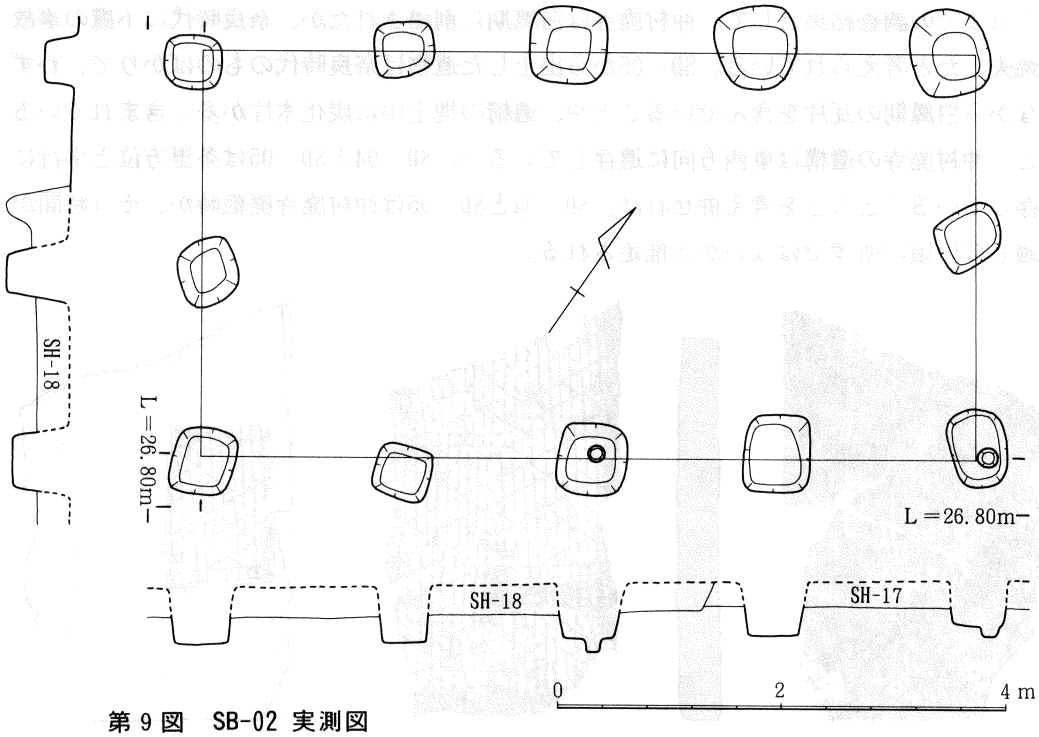
SD-05 出土古瓦実測図及び拓影

（上部右端の図は瓦表面に施された叩きの順と単位を示す）

SB－02　2間(3.65m)×5間(6.90m)の規模で、首軸方位をN－34°－Eに取る掘立柱建物跡である。柱穴の掘り形は50cm～80cm四方の隅丸方形で、大きさは余り揃っていない。

当調査区の第2遺構面上に多数複合し残された遺構群の埋土は、その大半が酷似しており、切り合い関係を把握するには困難を極めた。SD－02の南側柱列についても古墳時代後期頃の竪穴住居跡(SH－17・SH－18)検出後に各住居の床面で確認されているが、畦に残された土層を観察した結果、SB－02の方が後の所産であることが判明した。

各柱穴からは須恵器や土師器の破片がわずかに出土しただけで時期の特定は難しいが、

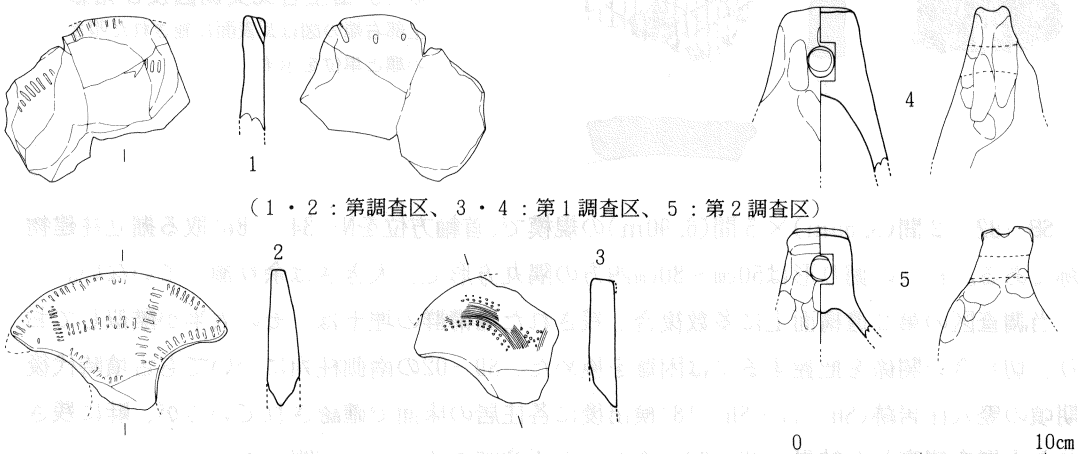


第９図　SB-02 実測図

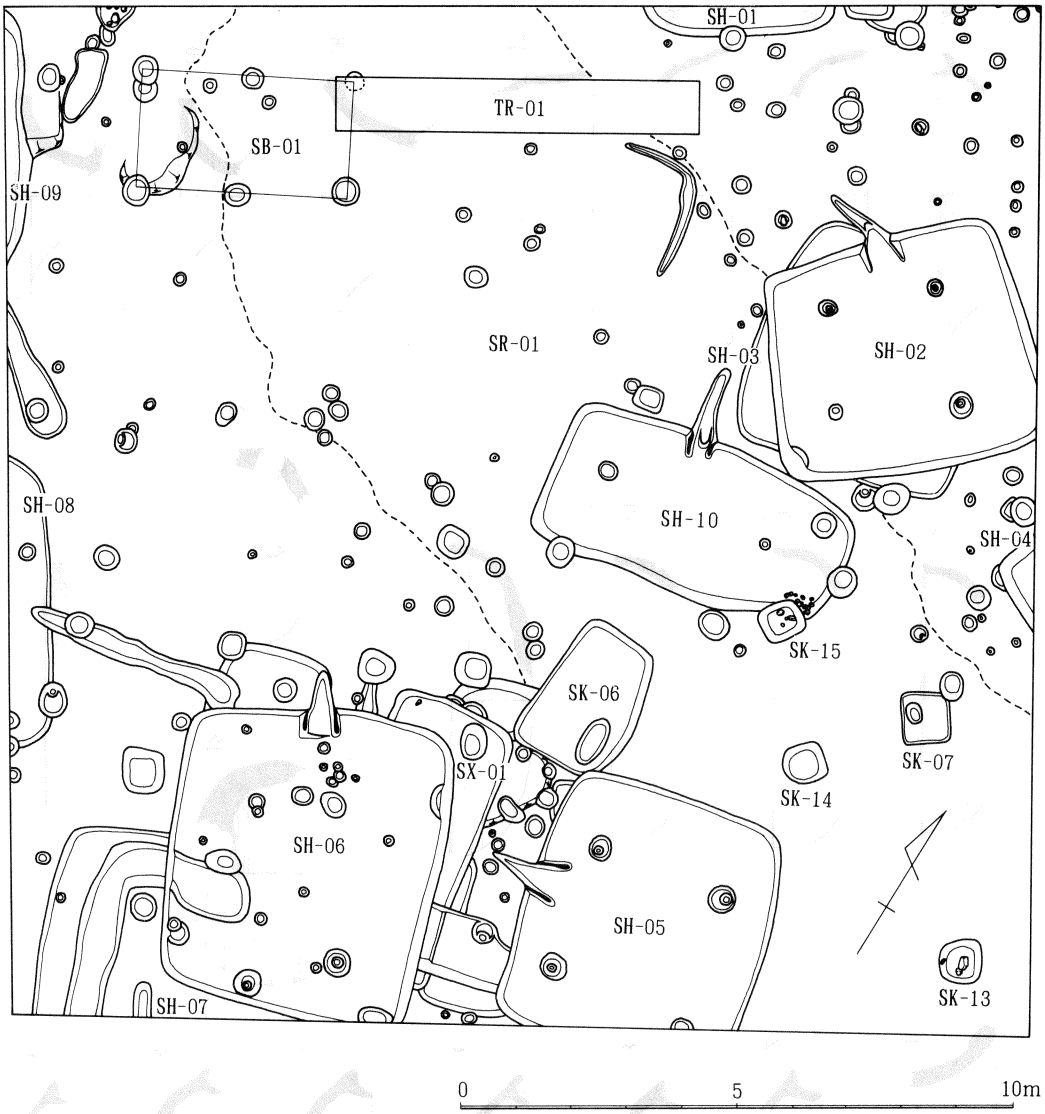
SB－02は古墳時代後期後半の竪穴住居跡(SH－17・SH－18)を切っており、遺構の方位と併せて、SD－04・SD－05と近い時期の所産ではないかと推測される。

②　第１調査区

当調査区では第６図の土層図に示したⅧ層（黒褐色粘性土層）が、全域に50～70cmの厚



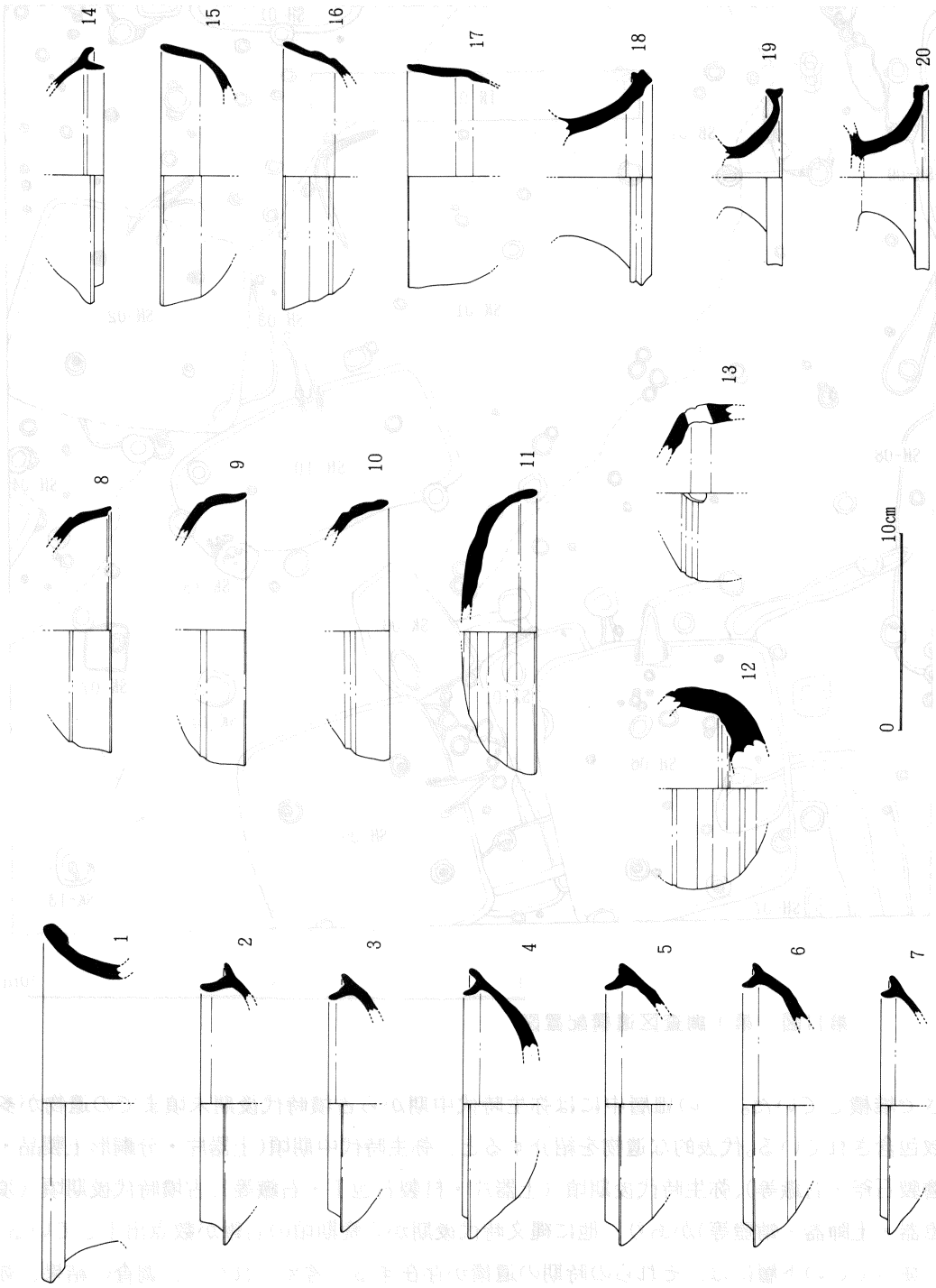
第10図　第１～３調査区 Ⅷ層出土遺物実測図－①



第11図　第１調査区遺構配置図

さで堆積していた。このⅧ層中には弥生時代中期から古墳時代後期末頃までの遺物が多数包含されている。代表的な遺物を紹介すると、弥生時代中期頃(土器片・分銅形土製品・磨製石斧・石鏃等)、弥生時代後期頃（土器片・打製石包丁・石鏃等)、古墳時代後期頃（須恵器・土師器・蛸壺等)があり、他に縄文時代後期から晩期頃の石鏃が数点出土している。

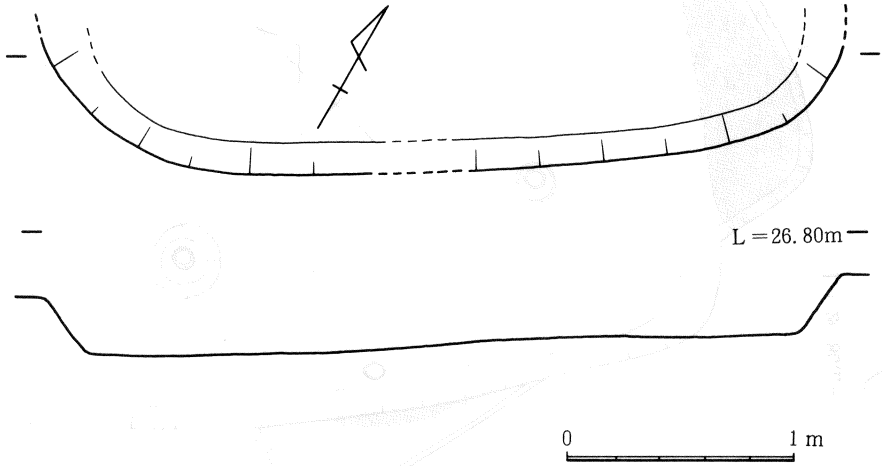
従ってこの下層には、それらの時期の遺構が存在すると考えられたが、調査の結果、弥生時代後期頃と古墳時代後期頃の竪穴住居跡が合計10棟と掘立柱建物跡が１棟、弥生時代中期から後期末にかけての土坑群、古墳時代後期頃の土坑群、及び各時期の無数の柱穴が検出された。



第12図　第１～第３調査区 Ⅷ層出土遺物実測図－②

（11、14が第２調査区、他は全て第１調査区出土）

全ての遺構は暗黄褐色砂質土層(IX層)上面に遺存していたが、IX層上部は変色し起伏していたため、IX層上部を10～20cm削ったところで確認されている。遺構は一部攪乱されてはいたが、遺存状況は比較的良好であった。ただ、調査区北壁中央部から前東隅部にかけて幅十数mの帯状の黒い変色域があり、この部分での遺構の検出は切り合い関係が明確に把握できず苦慮した。この帯状の変色部分については調査区北端でトレンチ(TR－01)による調査を実施したが、遺物等は全く含まれておらず時期等は不明である。しかしながら、他の遺構との切り合い関係等から、弥生時代中期前葉以前の自然河道若しくは窪地であった可能性が高い。以下、第1調査区内で検でされた主要遺構を順に解説する。

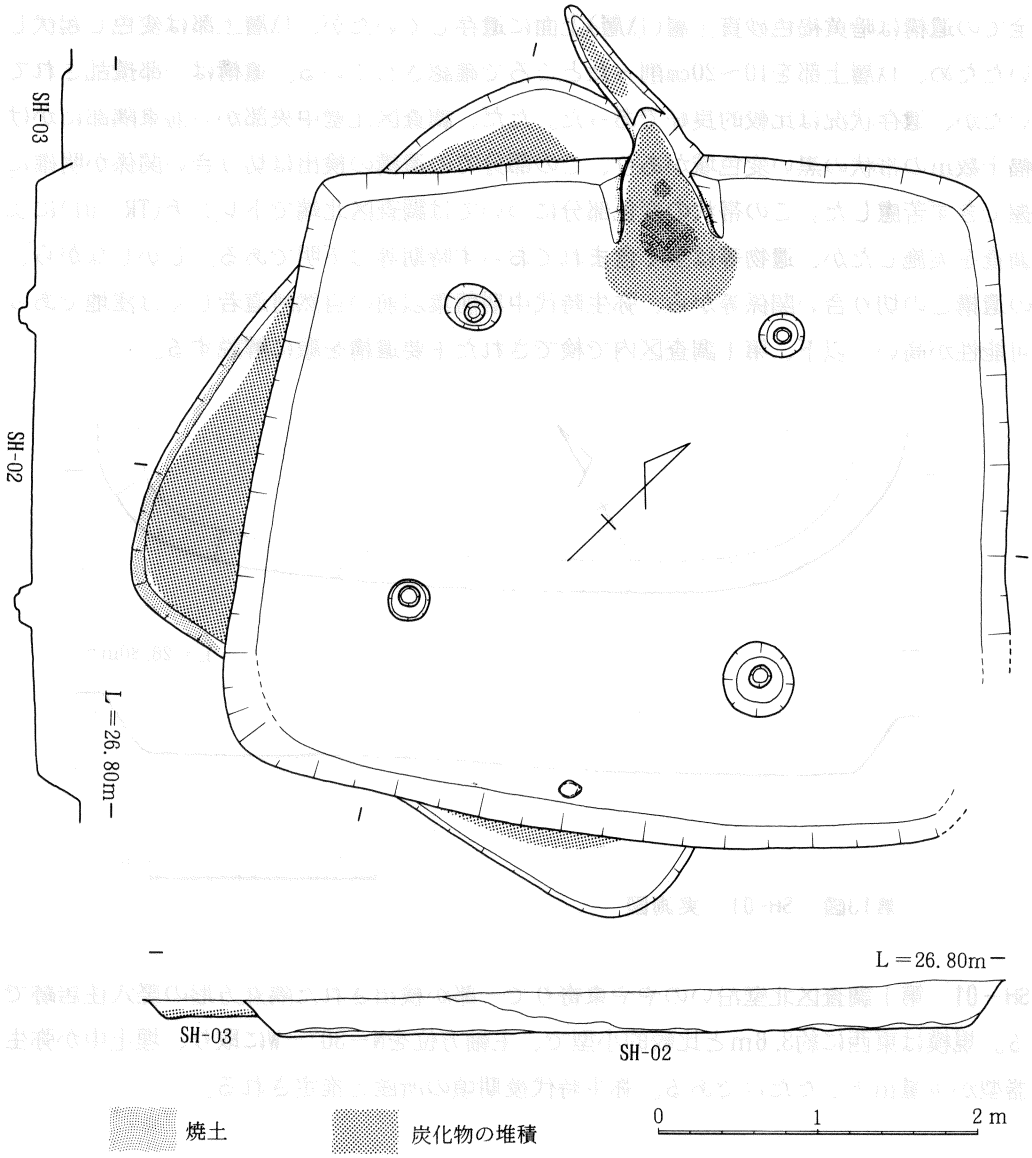


第13図　SH-01　実測図

SH－01　第1調査区北壁沿いのやや東寄りで一部が検出された隅丸方形の竪穴住居跡である。規模は東西に約3.6mと比較的小型で、主軸方位をN－30°－Wに取り、埋土中か弥生土器型が少量出土しただけである。弥生時代後期頃の所産と推定される。

SH－02・SH－03　SH－03は第1調査区北東部で検出されたやや隅丸の方形を呈する竪穴住居跡で、真上に方形の竪穴住居跡・SH－02が重なっている。

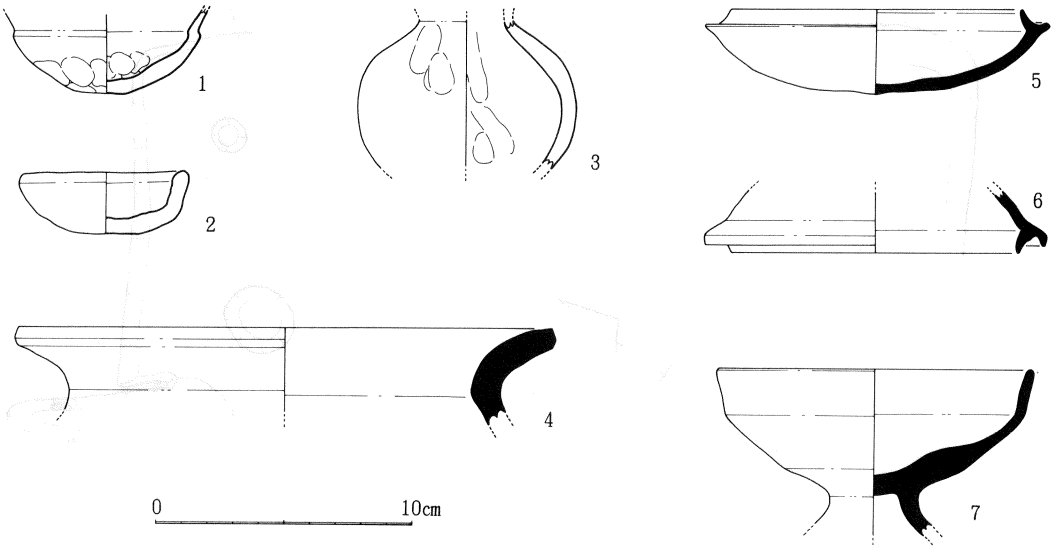
SH－02は主軸方位をN－42°－Wに取り、規模は北西－南東に3.7～4.2m・北東－南西に4.3～4.8mを測る。住居床面には各隅寄りに柱穴が配置され、北西側壁面中央部には竈が設置されている。住居の埋土中から竈壁と推定される焼土塊が多数出土しており、竈本体は住居の廃絶時若しくはそれ以前に破壊されていたと考えられるが、残存する竈中とそこから向かって左に延びる煙道中には多量の炭化物が残されていた。ハの字形に聞く竈中の炭化物を除去したところ、中央部床面で竈の炊き口とみられる円形に強く焼けた部分が確認されている。



第14図　SH-02・03 実測図

遺構内から出土した遺物は、祭祀遺物の可能性が考えられる比較的小型の土師器と6世紀末頃の須恵器であり、SH－02は古墳時代後期末頃に機能し廃絶したと推定される。

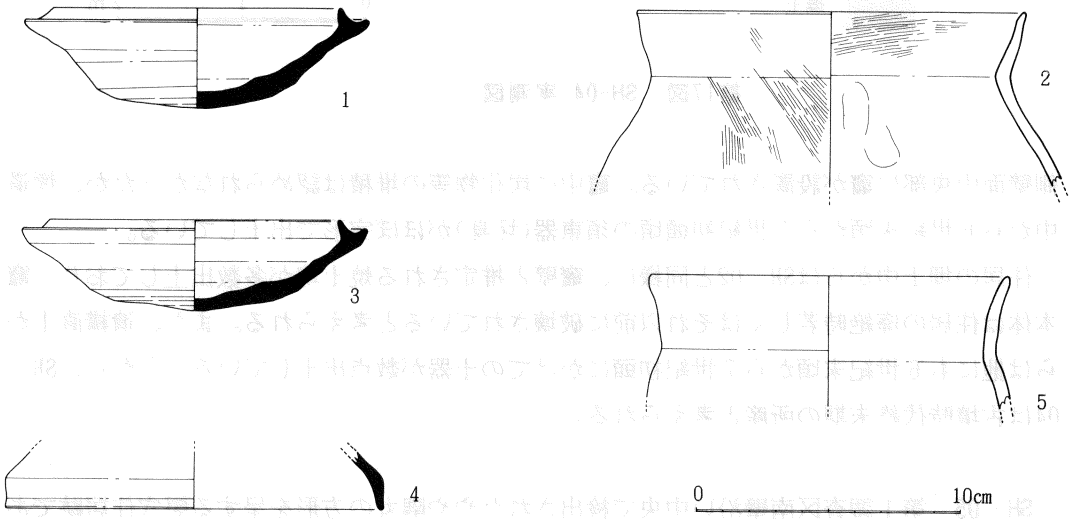
SH－02は主軸方位をN－10°－Wに取り、規模は南北に約4.3m四方を測る。遺構の大半はSH－02に切られてしまっているが、住居床面に多量の炭化物が堆積し、住居南西側壁面が焼けているため一般的な考え方では焼失家屋となる。しかしながら、炭化物に柱材等は含まれておらず細い植物繊維ばかりであることから、稲木遺跡の昭和63年度調査で確認されたような廃絶時に住居内で廃材を焼却した跡の可能性も考えられる。



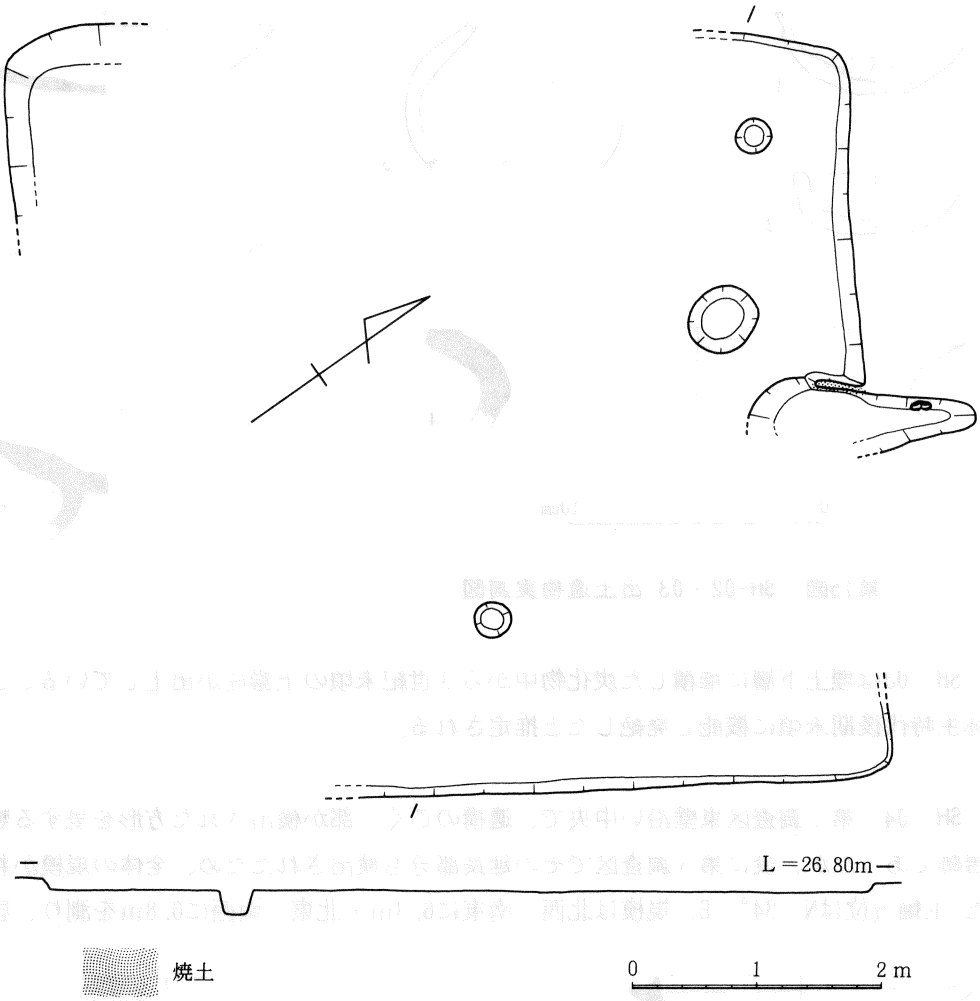
第15図　SH-02・03 出土遺物実測図

SH－03は埋土下層に堆積した炭化物中から3世紀末頃の土器片が出土していることから、弥生時代後期末頃に機能し廃絶したと推定される。

SH－04　第1調査区東壁沿い中央で、遺構のごく一部が検出された方形を呈する竪穴住居跡であったが、後に第3調査区でその延長部分も検出されたため、全体の規模が判明した。主軸方位はN－34°－E、規模は北西－南東に6.3m・北東－南西に6.8mを測り、居北東



第16図　SH-04 出土遺物実測図

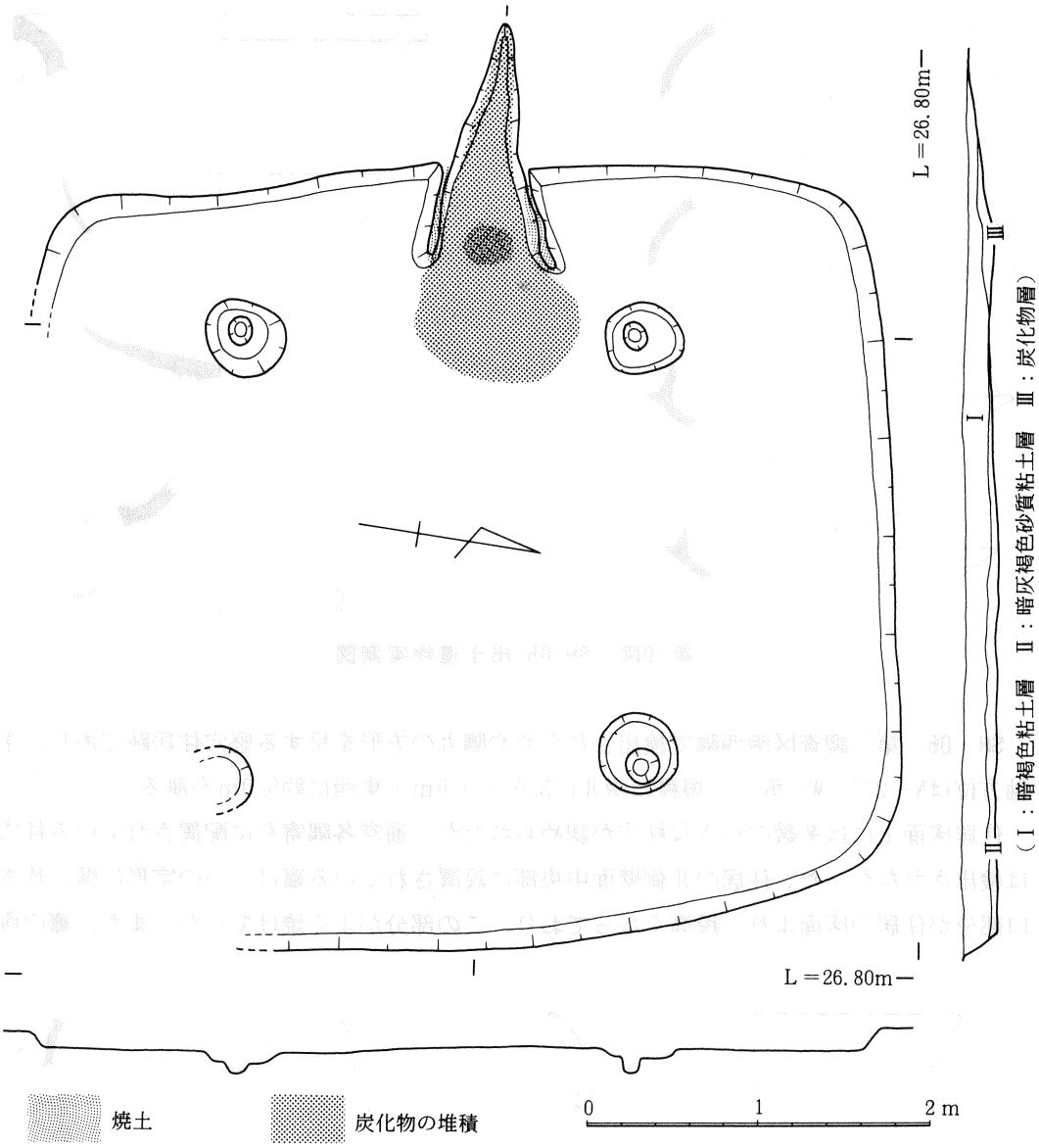


第17図　SH-04 実測図

側壁面中央部に竈が設置されている。竈中に炭化物等の堆積は認められなかったが、煙道中から6世紀末頃から7世紀初頭頃の須恵器(坏身)がほぼ完形で出土している。

住居の埋土中からはSH－02と同様に、竈壁と推定される焼土塊が多数出土しており、竈本体は住居の廃絶時若しくはそれ以前に破壊されていると考えられる。また、遺構直上からは他にも6世紀末頃から7世紀初頭にかけての土器が数点出土していることから、SH－04は古墳時代終末期の所産と考えられる。

SH－05　第1調査区南壁沿い中央で検出されたやや隅丸の方形を呈する竪穴住居跡であり主軸方位はN－10°－Wに取り、規模は南北に約5.0mを測る。住居床面には各隅寄りに柱穴

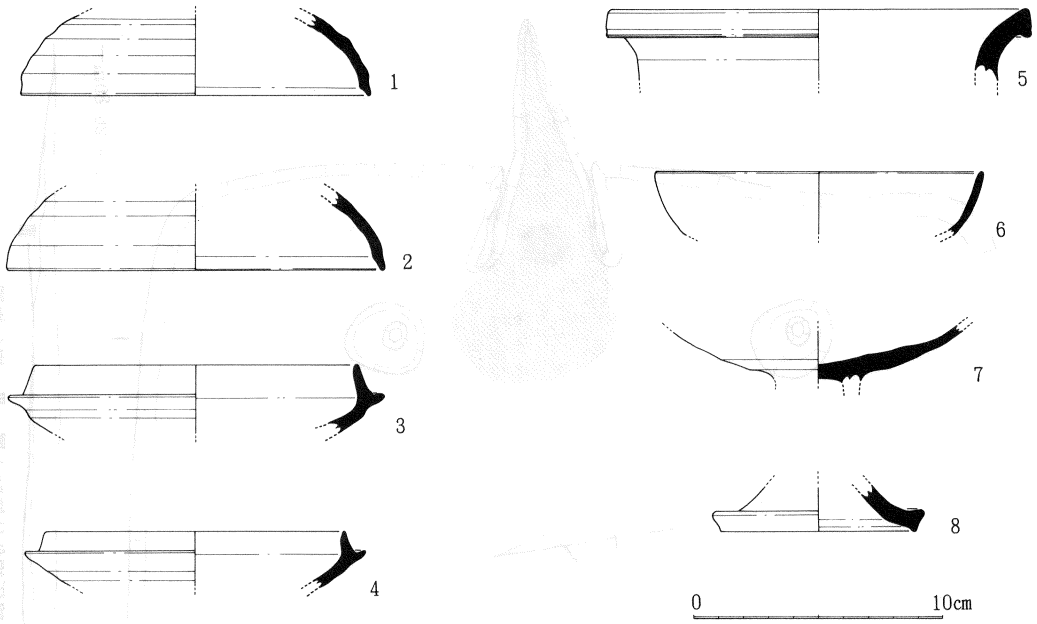


第18図　SH-05 実測図

が配置され、北西側壁面中央部には竈が設置されている。

ハの字形に開く竈中には種火を保存するためのものと考えられる炭化物(灰)の堆積が確認されており、この上からはやや火を受けた痕の認められる須恵器の甕片が多数出土しているが、この竈で使用されたものか後に投入されたものかは不明である。また、灰の堆積を取り除くと、中央部床面で竈の炊き口とみられる円形に強く焼けた部分が認められた。

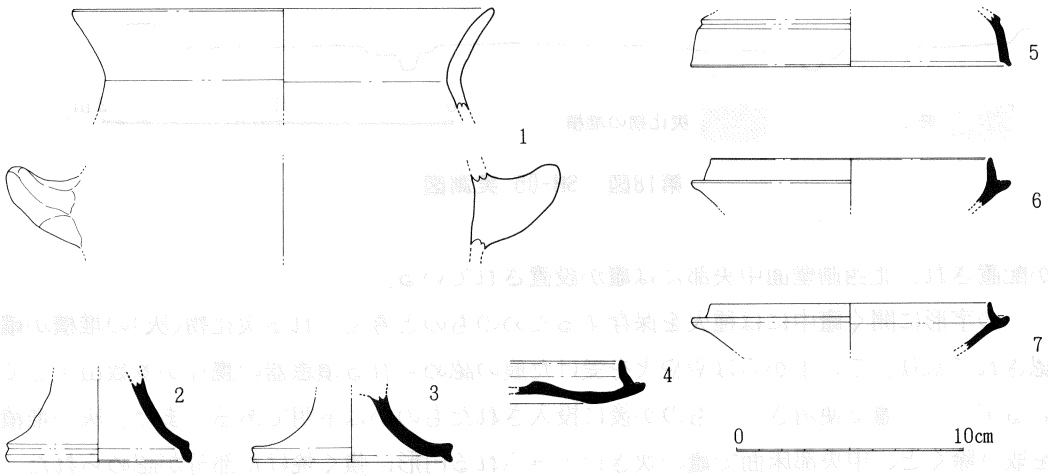
住居の埋土中からは6世紀後半の須恵器が出土しており、SH－05は古墳時代後期後半頃に機能し廃絶したと推定される。



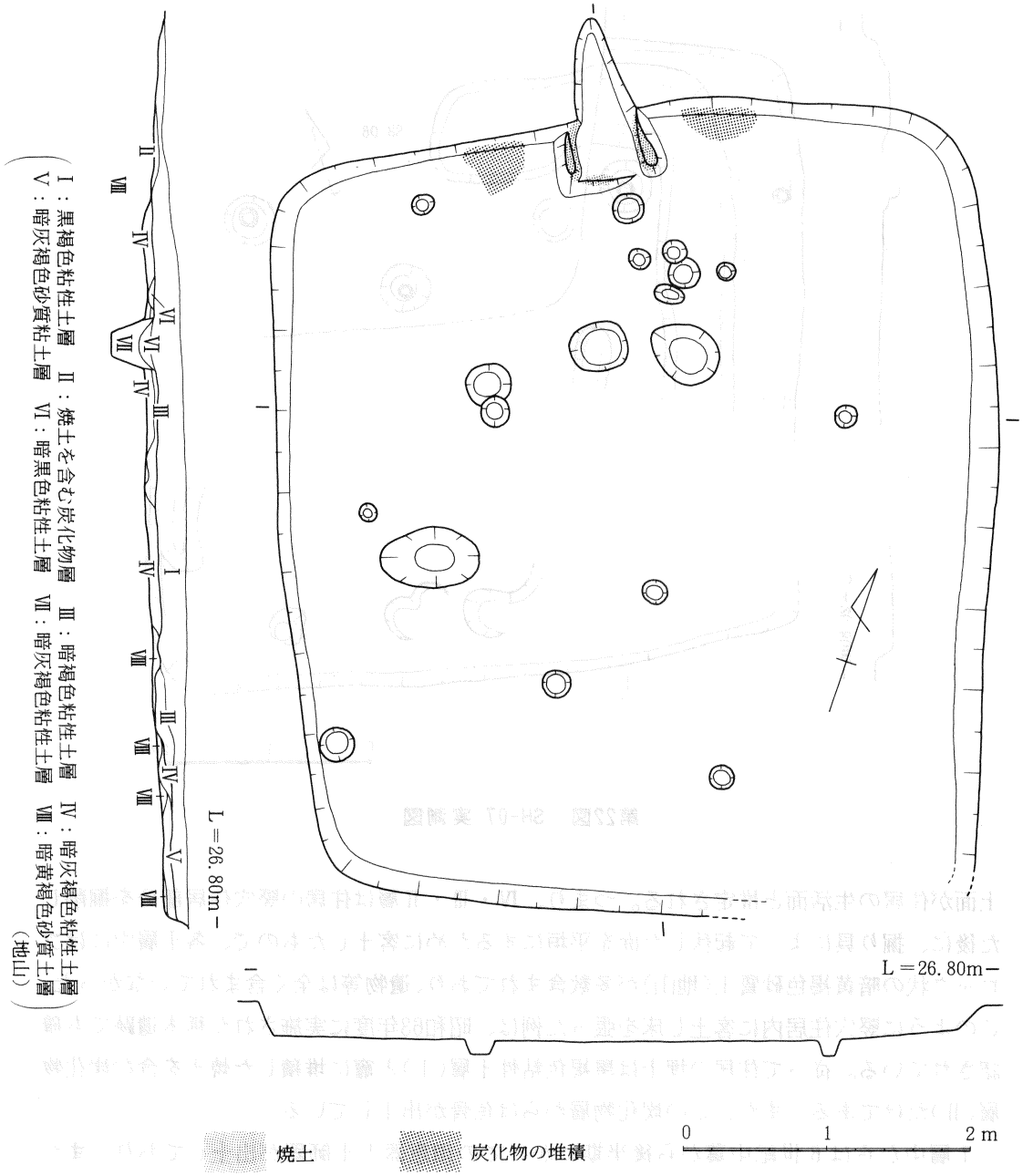
第19図　SH-05 出土遺物実測図

SH－06　第１調査区南西隅で検出されたやや隅丸の方形を呈する竪穴住居跡であり、主軸方位はN－21°－Wに取り、規模は南北に5.0 ～5.6m・東西に約5.0mを測る。

住居床面上には多数の小さな柱穴が認められたが、通常各隅寄りに配置されている柱穴は検出されなかった。住居の北側壁面中央部に設置されている竈は、ハの字形に開く炊き口部分が住居の床面より一段高くなっており、この部分がよく焼けていた。また、竈の両



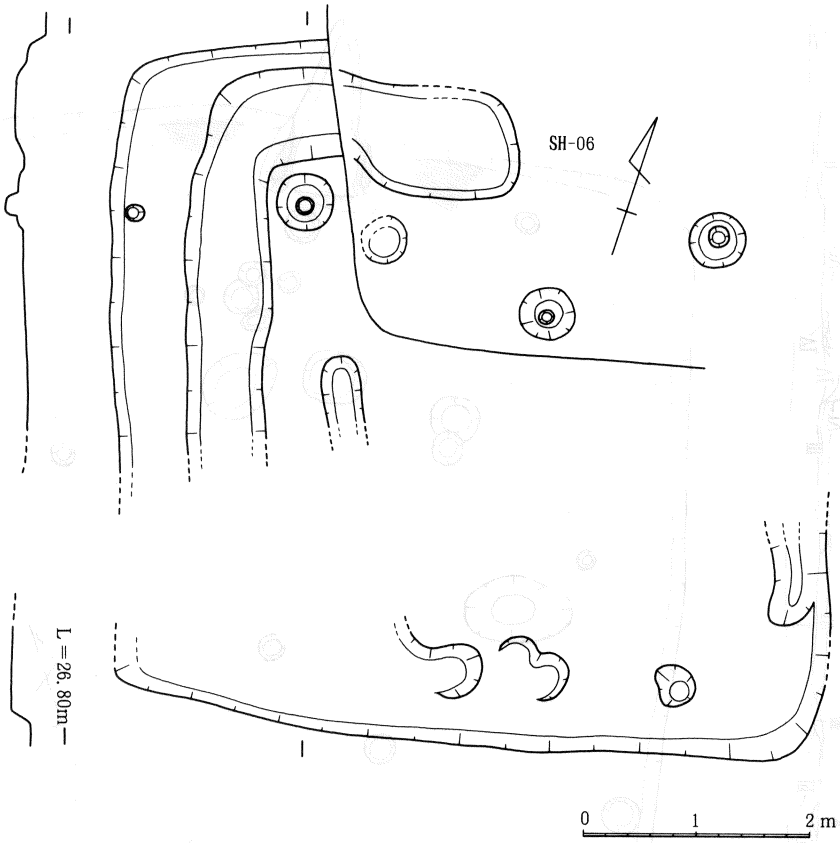
第20図　SH-06 出土遺物実測図



第21図　SH-06 実測図

側の壁沿いに炭化物(灰)がおかれているのが確認されたが、これは竈の中に堆積していたものを住居の廃絶前に掻き出したものではないかと考えられる。

住居内の埋土は複雑に堆積していたが、基本的には地山である暗黄褐色砂質土層(Ⅷ)上に暗灰褐色砂質粘土層(Ⅴ)・暗灰褐色粘性土層(Ⅵ)・暗褐色粘性土層(Ⅲ)が堆積し、この

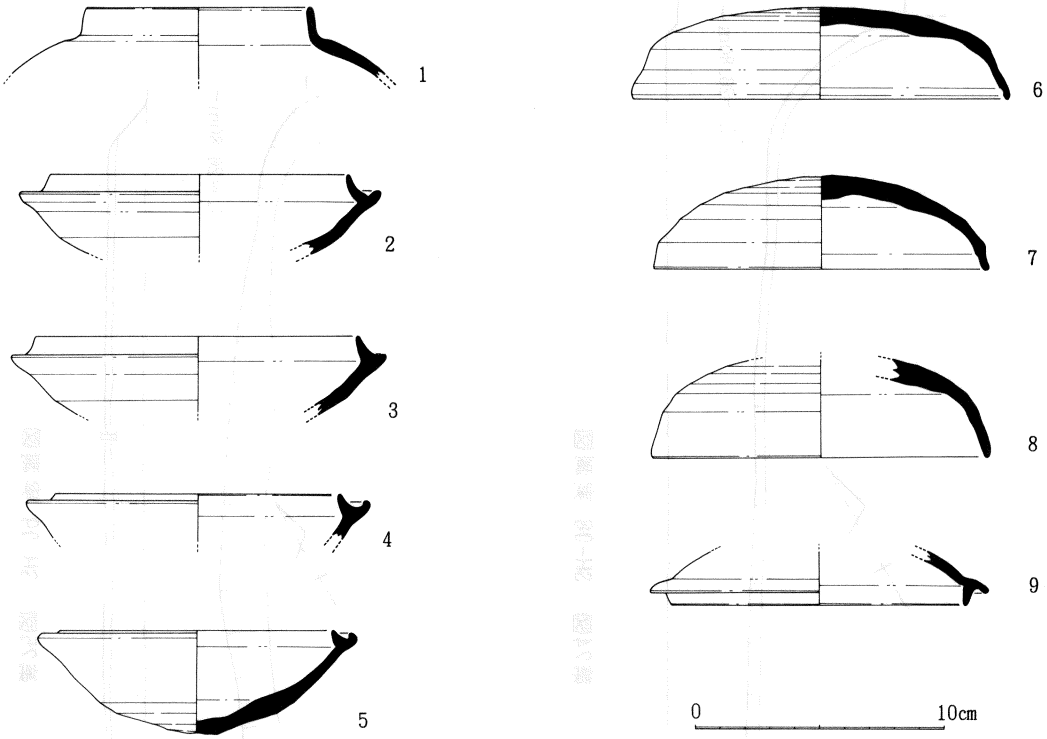


第22図　SH-07 実測図

上面が住居の生活面と推定される。つまり、Ⅳ・Ⅲ・Ⅱ層は住居の竪穴住居部分を掘削した後に、掘り具によって起伏した面を平坦にするために客土したもので、各土層中にはブロック状の暗黄褐色砂質土(地山)が多数含まれており、遺物等は全く含まれていなかった。このように竪穴住居内に客土し床を張った例は、昭和63年度に実施された稲木遺跡でも確認されている。従って住居の埋土は黒褐色粘性土層(Ⅰ)と竈に堆積した焼土を含む炭化物層(Ⅱ)だけである。また、この炭化物層からは魚骨が出土している。

Ⅰ層中からは6世紀中葉から後半期にかけての須恵器と土師器が出土しており、またSH－06は古墳時代後期後半期の竪穴住居跡(SH－07)を切っていることから、古墳時代期頃に機能し廃絶したと推定される。

SH－07　第1調査区南西隅の壁沿いで検出された方形の竪穴住居跡であり、一部分の検出であった上に遺構の大半をSH－07に切られている。しかしながら、後に第2調査区でその南側部分が検出されたため全体の規模が判明した。主軸方位はN－18°－E、規模は南北に

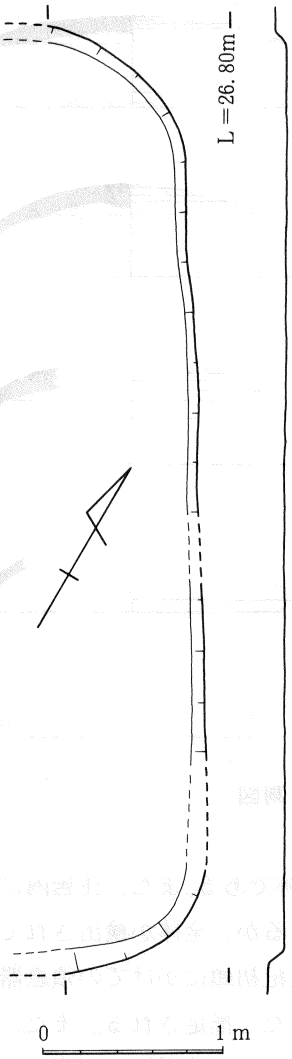


第23図　SH-07 出土遺物実測図

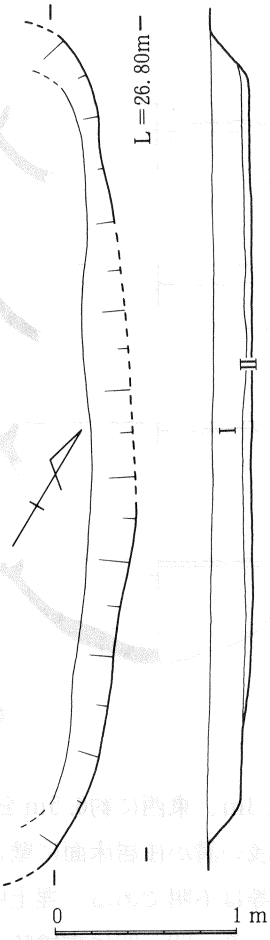
6.7～7.3m、東西に約6.5mを測る比較的大規模な住居跡である。また、住居内には幅1m前後の浅い溝が住居床面に壁と平行して掘り込まれているが、全体が検出されていないため性格等は不明である。埋土中からは6世紀末から7世紀初頭にかけての須恵器が多数出土しており、SH－07は古墳時代後期末頃に機能し廃絶したと推定される。また、住居の北東部が古墳時代末期頃の竪穴住居跡(SH－06)に切られているため詳細は不明であるが、北壁中央部には他の古時代後期の住居同様竈が設置されていたとみられる。

SH－08　第1調査区西壁沿いほぼ中央部で一部が検出された隅丸方形の遺構である。規模は南北に約5.2mで、主軸方位N－32°－Wに取る。埋土中からは弥生土器片が少量出土しただけであり詳細は不明であるが、弥生時代後期頃から古墳時代頃にかけての竪穴住居跡と推定される。

SH－09　第1調査区西壁沿いやや北寄りで一部が検出された隅丸方形の遺構である。規模は南北に約4.8mで、主軸方位N－30°－Wに取る。埋土中からは弥生土器片とサヌカイ片が少量出土しただけであり詳細は不明である。弥生時代後期の竪穴住居跡と推定される。



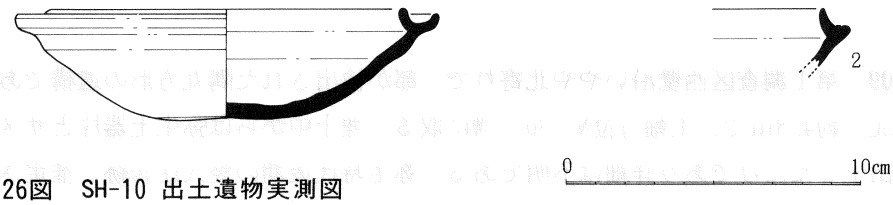
第24図　SH-08 実測図



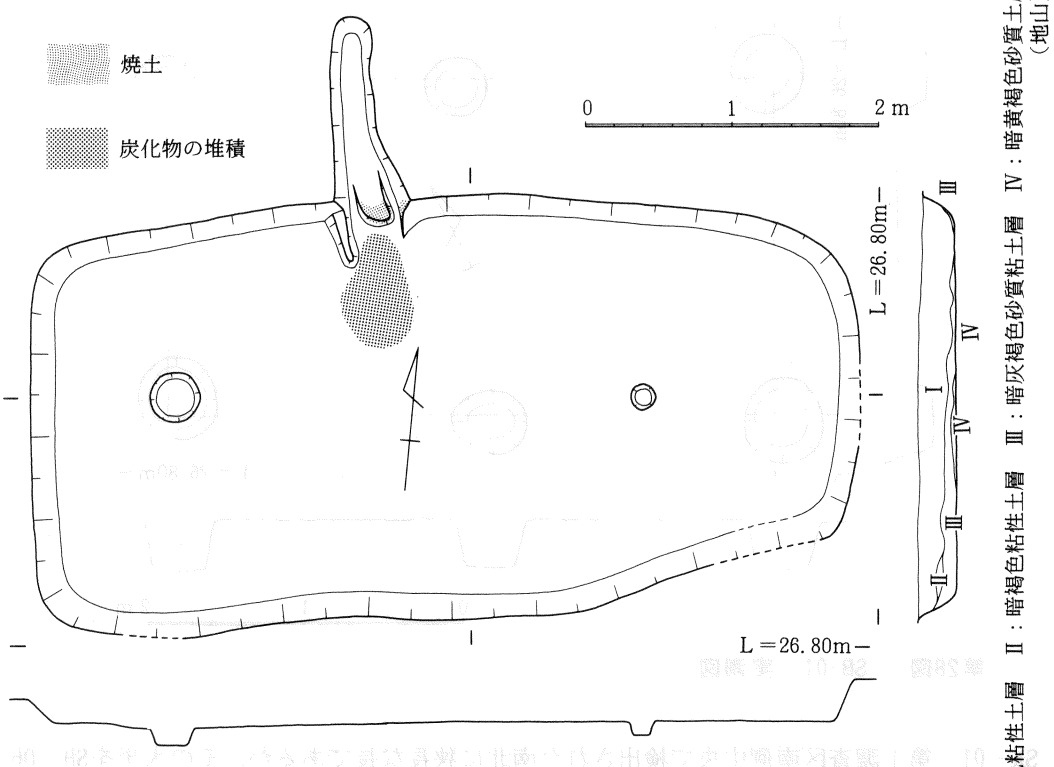
第25図　SH-09 実測図

SH－10　第１調査区中央からやや東寄りで検出された、やや隅丸の長方形を呈する竪穴住居跡である。特異な形態から当初は土坑として扱っていたが、竈や柱穴の存在から竪穴住居跡であることが判明した。

主軸方位N－7°－Wで規模は南北に2.9m・東西5.6mを測り、北壁中央部には竈が設置れ



第26図　SH-10 出土遺物実測図

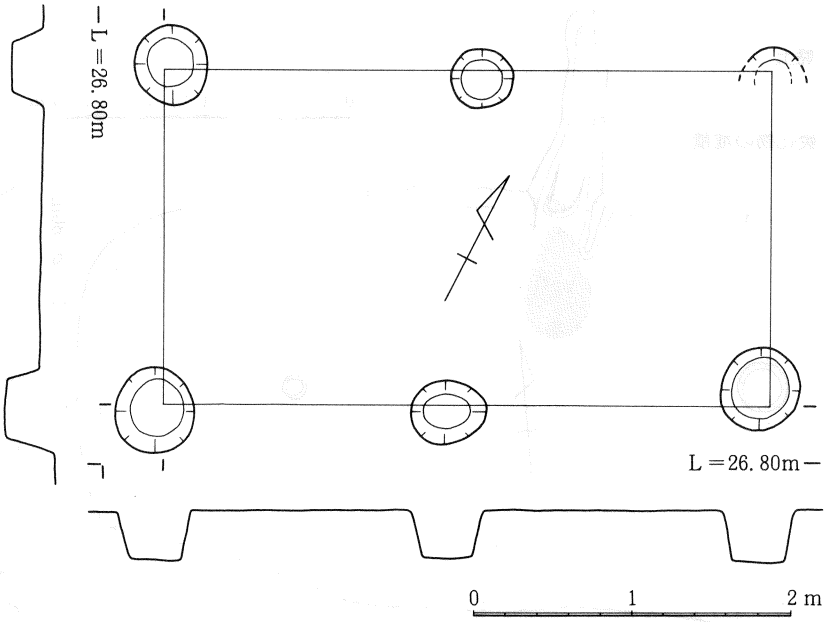


第27図　SH-10 出土遺物実測図

ている。ちょうど普通の竪穴住居の南半分を除去したような形態である。竈は他の例と同様にハの字形をしていたと推定されるが、竈本体は住居の廃絶時若しくはそれに以前に破壊されていたようで、その痕跡しか検出されておらず、住居の埋土中からは竈壁と推定される焼土塊が多数出土している。また、竈の炊き口床面はやや奥が突出し、この部分がひどく焼けていた。煙道はここから北に直線的に延びている。

このような特異な形態を呈する住居跡は他に例をみないが、埋土中からは6世紀末期頃の須恵器が数点出土しており、竈の状態等を考え併せて、SH－10は古墳時代後期末頃に機能し廃絶したと推定される。

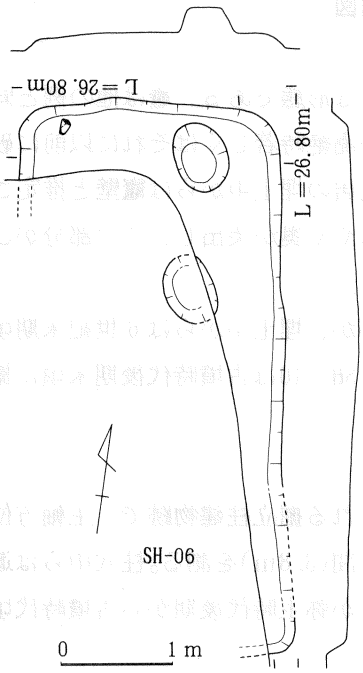
SB－01　第1調査区北西隅で検出された倉庫跡と推定される掘立柱建物跡で、主軸方位をN－26°－Wに取り、規模は南北に1間(2.1m)・東西に1間(3.8m)を測る。柱穴中らは遺物は出土しておらず、埋土だけからは時期の判定は難しいが弥生時代後期から古墳時代頃にかけての所産ではないかと推定される。



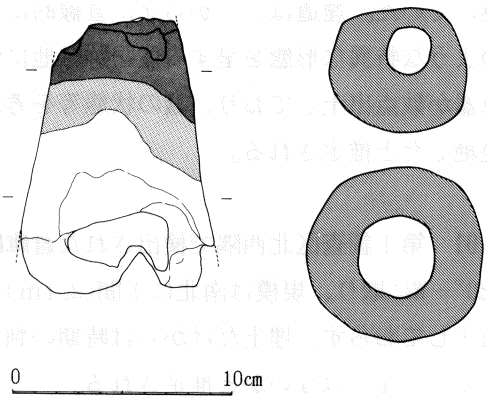
第28図　SB-01　実測図

SX－01　第１調査区南側中央で検出された南北に狭長な長であるが、その大半をSH－06に切られてるため性格等は不明である。遺構の規模は南北に約５ｍ・東西に約2.4mで、２カ所に円形の落ち込みが認められた。

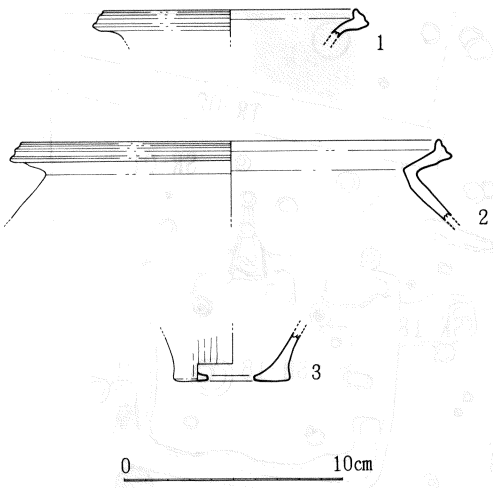
遺構中の遺物は北西端部から出土した鞴の羽口だけであり、他に時期が判別できるような遺物は出土していない。鞴の羽口は長期に渡り使用されたようで暗褐色から暗灰色に変色し溶解している。



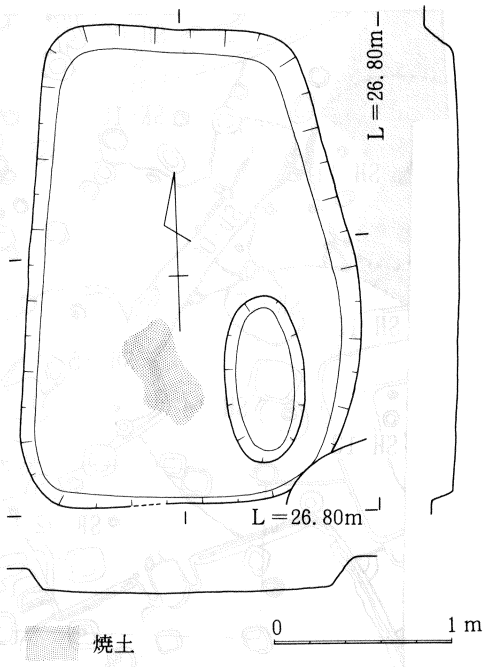
第29図　SX-01 実測図



第30図　SX-01 出土遺物実測図



第31図　SK-06 出土遺物実測図



第32図　SK-06 実測図

SX－01はSH－06に切られていることから、古墳時代末期以前の所産と推定されるが、他に遺物が全く出土しておらず、鞴を使用するような性格の遺構であったか否かは不明である。

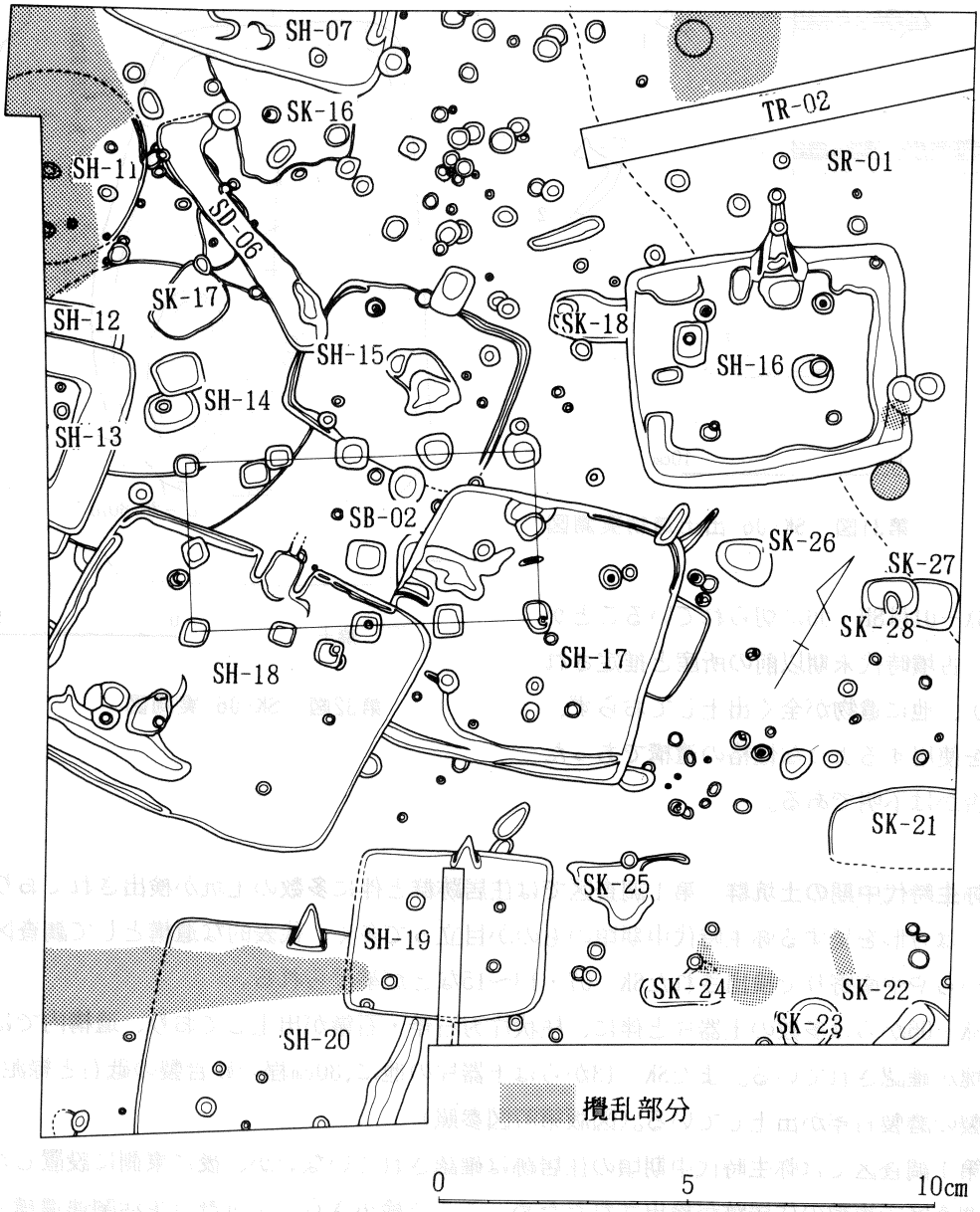
弥生時代中期の土坑群　第１調査区では住居跡群と伴に多数の土坑が検出されており、中には方形を呈する弥生時代中期頃のものが目立って多く、代表的な遺構として調査区中央からやや南寄りで検出されたSK－07・13～15などが挙げられる。

SK－06からは多数の土器片と伴に、柱状片刃石斧・石鏃が出土しており、遺構内では焼土塊が確認されている。またSK－13からは土器片の他に、30cm程の砂岩製の砥石と緑泥片岩製の磨製石斧が出土している。(図版第97図参照)

第１調査区では弥生時代中期頃の住居跡は確認されていないが、後に東側に設置した第３調査区で複数の住居跡が検出されたため、ここで検出された土坑群は生活関連遺構であると推測される。

③ 第 2 調 査 区

当調査区では、第１調査区と同様に弥生時代中期頃から古墳時代後期末期までの遺物を包含する黒褐色粘性土層が、調査区南部の仲村廃寺関連遺構が検出された部分を除いて、やはり50～70cm程度の厚さで堆積していたが、前回までの調査が実施された更に南側では遺構面が次第に傾斜し氾濫原となるため、包含層はより厚く堆積していることが確認されている。



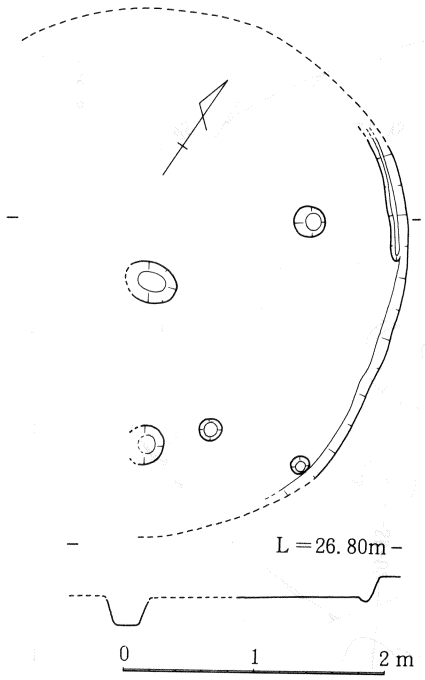
第33図　第２調査区遺構配置図

第２調査区の第１遺構面では、前述したように奈良時代の溝状遺構２条と掘立柱建物跡１棟が検出されているが、第２遺構面では更に弥生時代後期頃と古墳時代後期頃の竪穴住居跡が10棟と無数の柱穴及び土坑群の他、第１調査区で確認された弥生時代中葉以前の自然河道若しくは窪地と推定されるSR－01の延長が検出されたため、TR－02を設定したが、結果はTR－01と同じである。SR－01は当調査区北東端から東へ延びている。

当調査区は部分的に攪乱は受けているが、遺構の遺存状況は良好であった。以下、第2調査区で検出された主要遺構を順に解説する。

SH－11　第2調査区北西端で検出された円形を呈する竪穴住居跡である。当調査区の北西端はひどく攪乱されており、SH－11もその大半が失われているが、調査区の壁面に残された土層の状況等から、直径が約4m程の規模であることが判明している。また、部分的に壁溝が認められる。

埋土中からは、弥生時代土器片とサヌカイト片がわずかに出土しただけであるが、SH－11は弥生時代中期から後期頃にかけての所産と推定される。



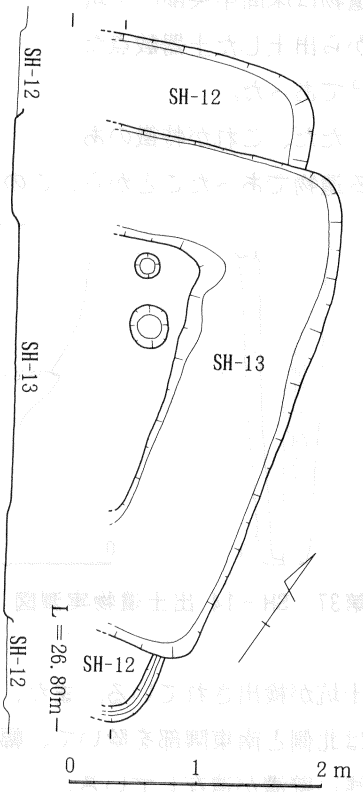
第34図　SH-11 実測図

SH－12　第2調査区西壁沿いやや北寄りで重なって検出された竪穴住居跡である。

SH－12は方形を呈しており主軸方位はN－20°－W、規模は南北に約5mを測るが、遺構の大半はSH－13に切られているため詳細は不明である。また、埋土中からは須恵器片が少量ではあるが出土しており、これを検討した結果SH－12は古墳時代後期頃の所産ではないかと推定される。

SH－13　SH－13も方形を呈しており、主軸方位はN－16°－W、規模は南北に約4mを測る。住居内には壁面に沿って幅80～90cmの浅い溝が廻っている。

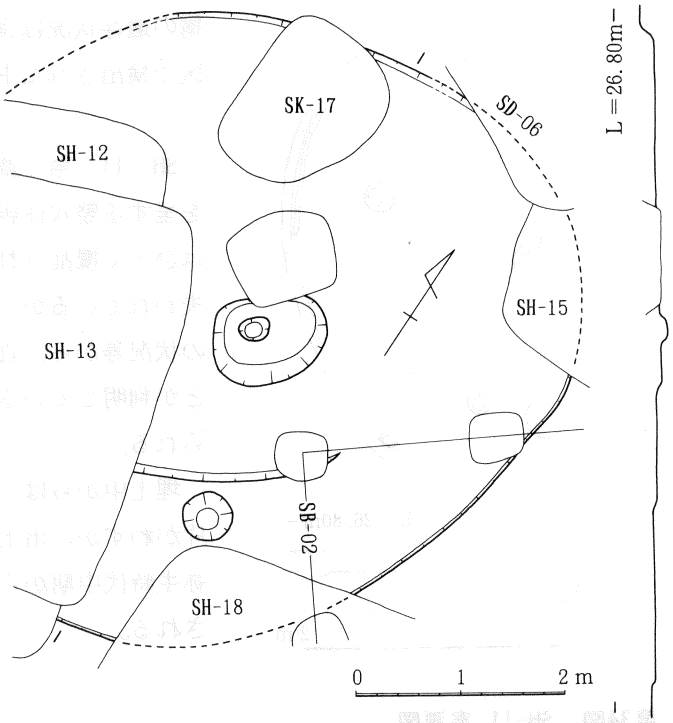
埋土中からはSH－12と同様に須恵器片がわずかに出土しただけであるが、古墳時代後期頃でSH－12廃絶後の所産と推定される。



第35図　SH－12・13 実測図

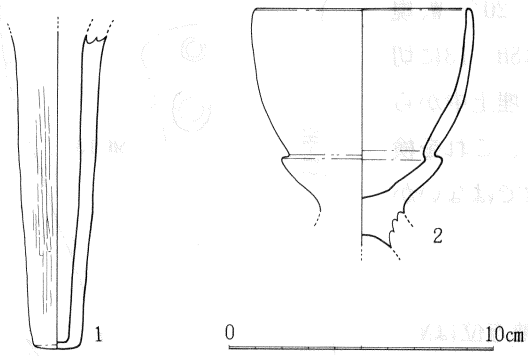
SH－14　SH－14は他の遺構群に切られているため詳細は不明である。ただ、住居の南端部でベット状遺構とみられる段、中央部で80～110cm程の楕円形を呈する土坑が検出されている。

住居の規模は3.8m～7m程と比較的大型であるが、遺構は他の住居に比べ床面が浅く、しかも削平を受けた際にその上部が殆ど失われてしまっているため、確認された遺物は床面中央部の土坑から出土した土器数点だけであった。



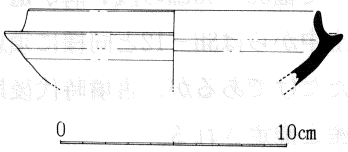
第36図　SH-14 実測図

ただ、これが特徴のある遺物であったことから、この住居跡が弥生時代終末期の所産であると推定できる。



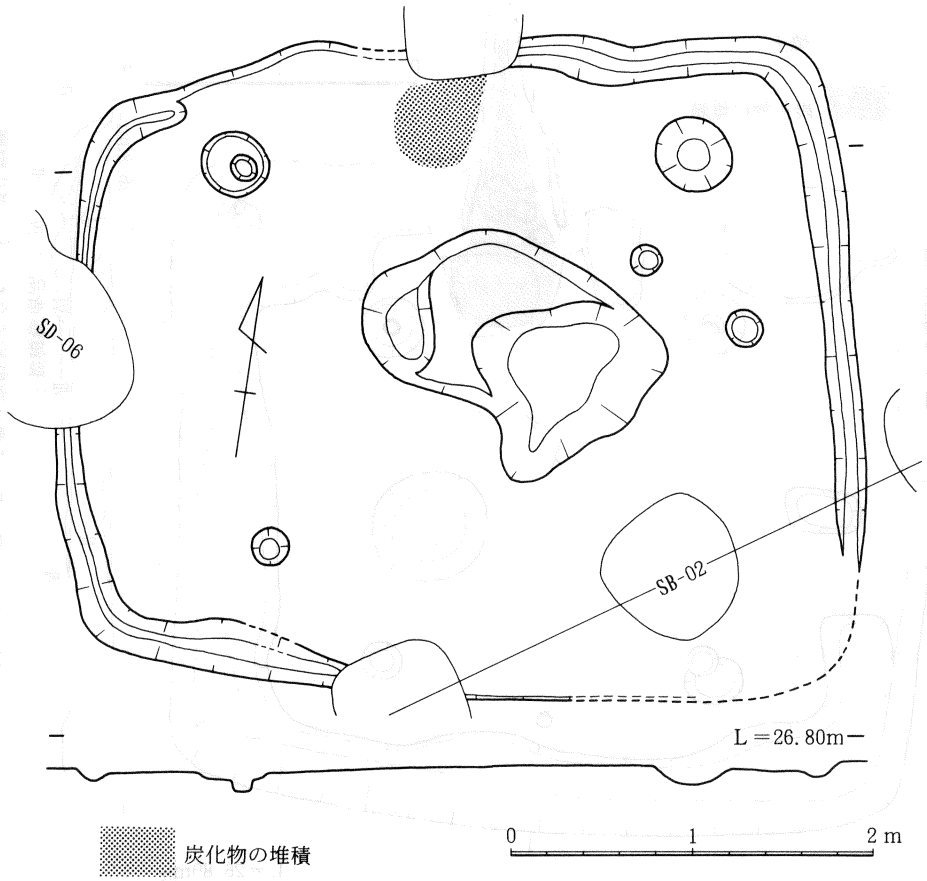
第37　SH－14 出土遺物実測図

SH－15　第2調査区中央からやや北西寄りで検出された長方形を呈する竪穴住居跡で、主軸方位N－8°－Wに取り、規模は南北に3.1～3.7m・東西に約4.5mを測る。住居床面上にはSB-02に切られている部分を除いた各隅に竪穴住居が配置されており、中央部には1.0～1.7mの不定形の土坑が検出されている。また、住居の壁沿いでは北側と南東隅部を除いて、幅20～30cmほどの浅い壁溝が遺存している。



第38図　SH－15 出土遺物実測図

遺構はSH－14同様他の住居に比べ床面が浅く、



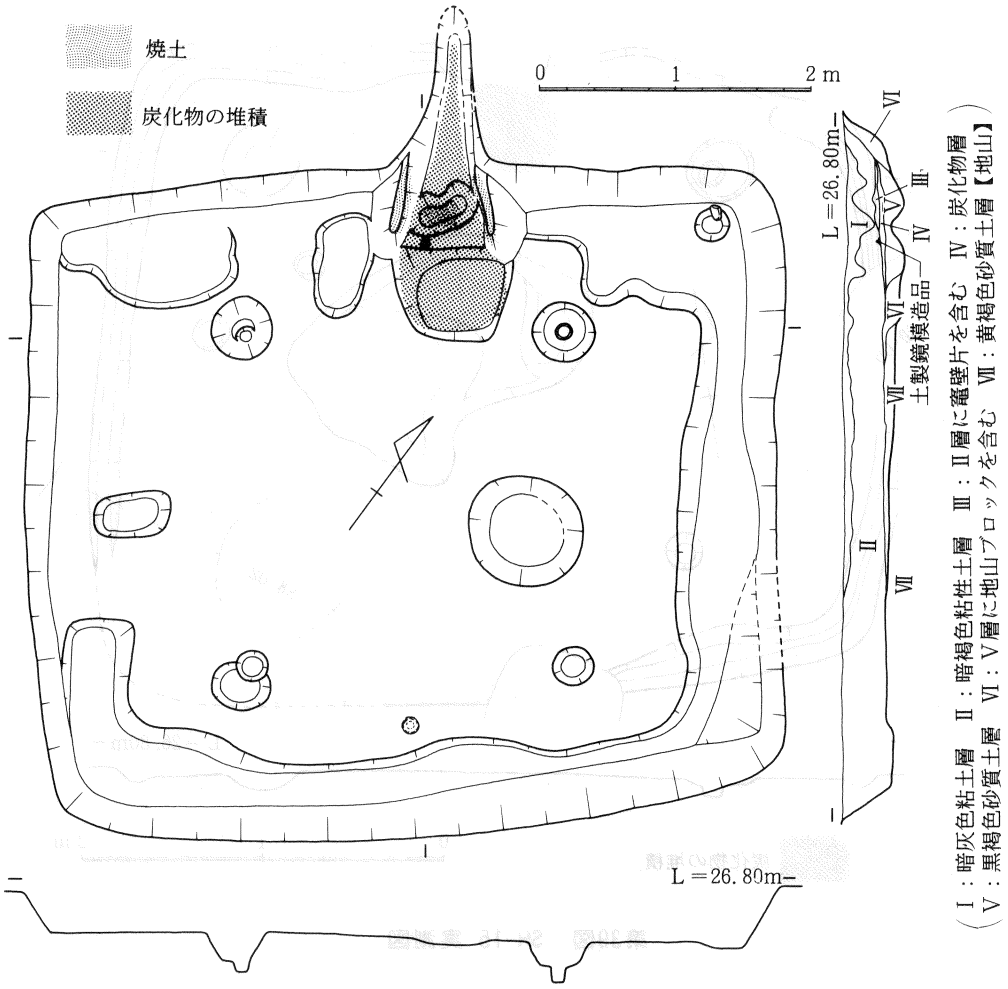
第39図　SH-15 実測図

しかも削平を受けた際にその上部が殆ど失われてしまっているため、出土が確認された遺物は床面中央部の土坑から出土した数点の土器片だけであった。出土した遺物の中に6世紀後半頃の須恵器片が認められることから、SH－15は古墳時代後半頃に機能し廃絶したと推定される。

また、SH－15北壁中央部は他の遺構によって切られているため竈の存在については明らかにはできないが、当調査区で検出された同時期の住居には大低のものに竈が設置されていることと、この部分に他の住居の竈部分でみられたような炭化物(灰)の堆積が確認されたことから、竈は設置されていたものとみられる。

SH－16　第2調査区南中央部からやや北東寄りで検出された、方形を呈する竪穴住居跡である。主軸方位はN－40°－Wに取り、規模は南北に約5.0m・東西に約5.5mを測る。

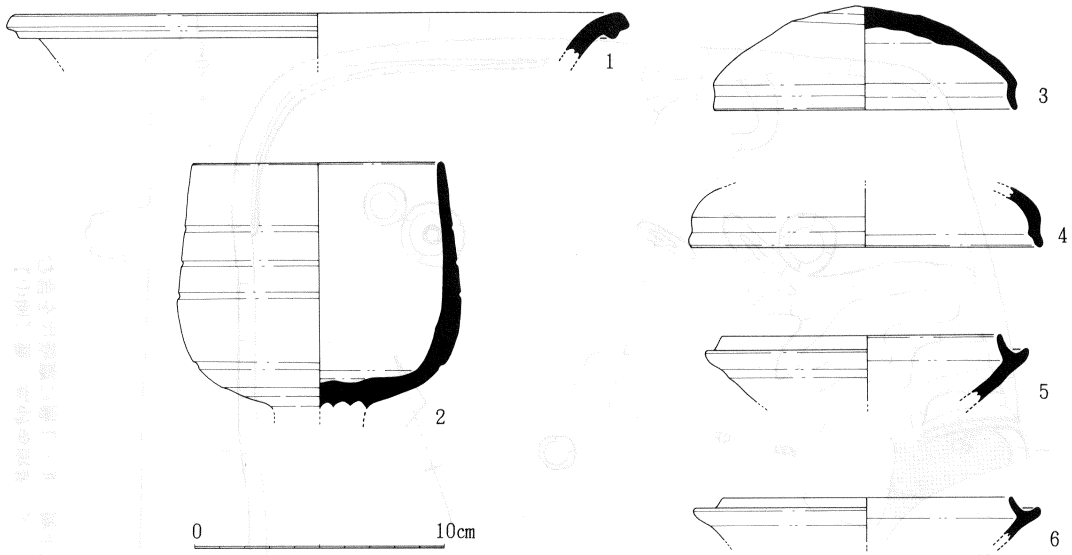
住居床面上には各隅寄りに設置された合計4個の柱穴の他に、直径80cm・深さ25cm程の



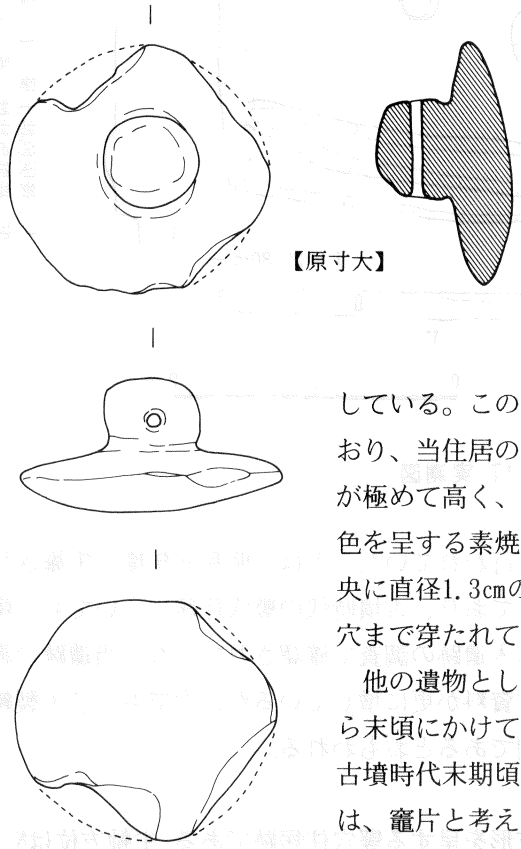
第40図　SH－16 実測図

円形の土坑が検出されている。更に床面上には壁に沿って不規則に廻る幅20～80cmの浅い溝が確認されている。

遺構の埋土は遺構内に十字に残した畦の土層観察によって、最上層が暗灰色粘土層（1層）でに黒褐色粘性土層（Ⅱ層）となっており、住居北壁中央部に設置された竈中の埋土である竈壁片を含む黒褐色粘性土層（Ⅲ層）までが、この住居が廃絶した後に堆積した土層であり更に竈中の炭化物の堆積（Ⅳ層）は住居が機能している際に堆積したもので、続く黒褐色砂質土層（Ⅴ層）と黄褐色砂質土層【地山】のブロックを多く含む黒褐色砂質土層（Ⅵ層）、は住居の竪穴部を掘削した際に客土したものであることが判明している。従って、当住居の生活面はⅤ層・Ⅵ層上面ということになる。このⅤ層・Ⅵ層中からは遺物は全く出土していないが、最下層の地山面上には、長さ十数cm・幅1cm程の掘り具の先端部の痕跡と考え



第41図　SH－16　出土遺物実測図

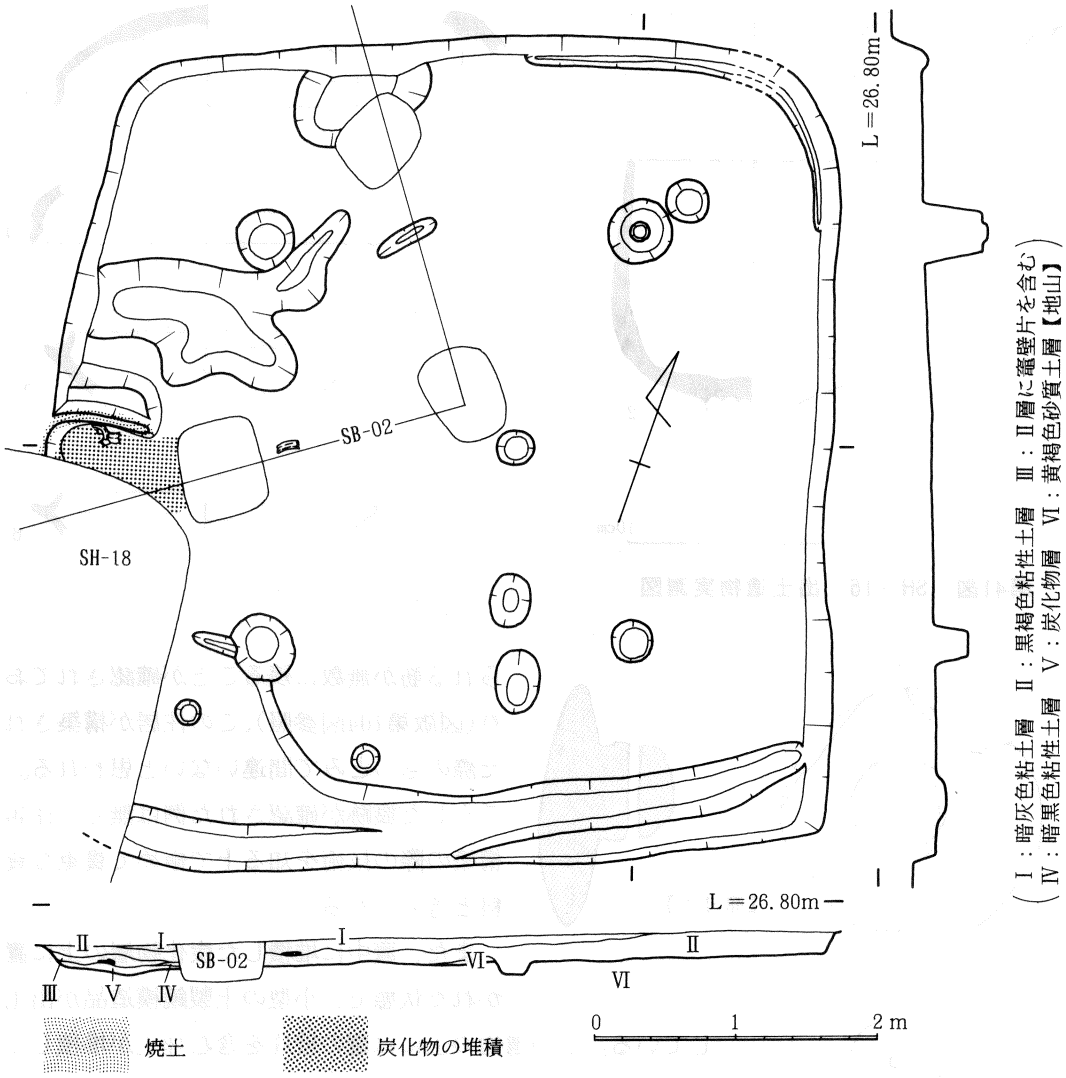


第42図
SH－16　竈出土遺物実測図

られる筋が無数に残ることが確認されており(図版第104図参照)、この住居が構築された際のものとみて間違いないと思われる。こうした痕跡が確認された例は無く、住居構築の際の技術を知る上で極めて貴重な資料と考えられる。

また、竈中に堆積した炭化物層の上に置かれた状態で、小型の土製鏡模造品が出土している。この遺物の上には竈の破片を含む埋土が堆積しており、当住居の廃絶時に竈で行われた祭祀遺物である可能性が極めて高く、興味深い存在である。土製鏡模造品は乳灰褐色を呈する素焼きの製品で、直径3㎝程のレンズ形の本体中央に直径1.3㎝の丸い鈕が付けられており、丁寧に紐通しの穴まで穿たれている。

他の遺物としては黒褐色粘性土層(Ⅱ層)から6世紀後半から末頃にかけての須恵器と土師器が出土しており、SH－16は古墳時代末期頃に機能し廃絶したと推定される。Ⅱ層中からは、竈片と考えられる焼土塊も多数出土しており、これまでにみられた幾つかの例のように廃絶前に竈の一部が破壊されていた可能性が高い。

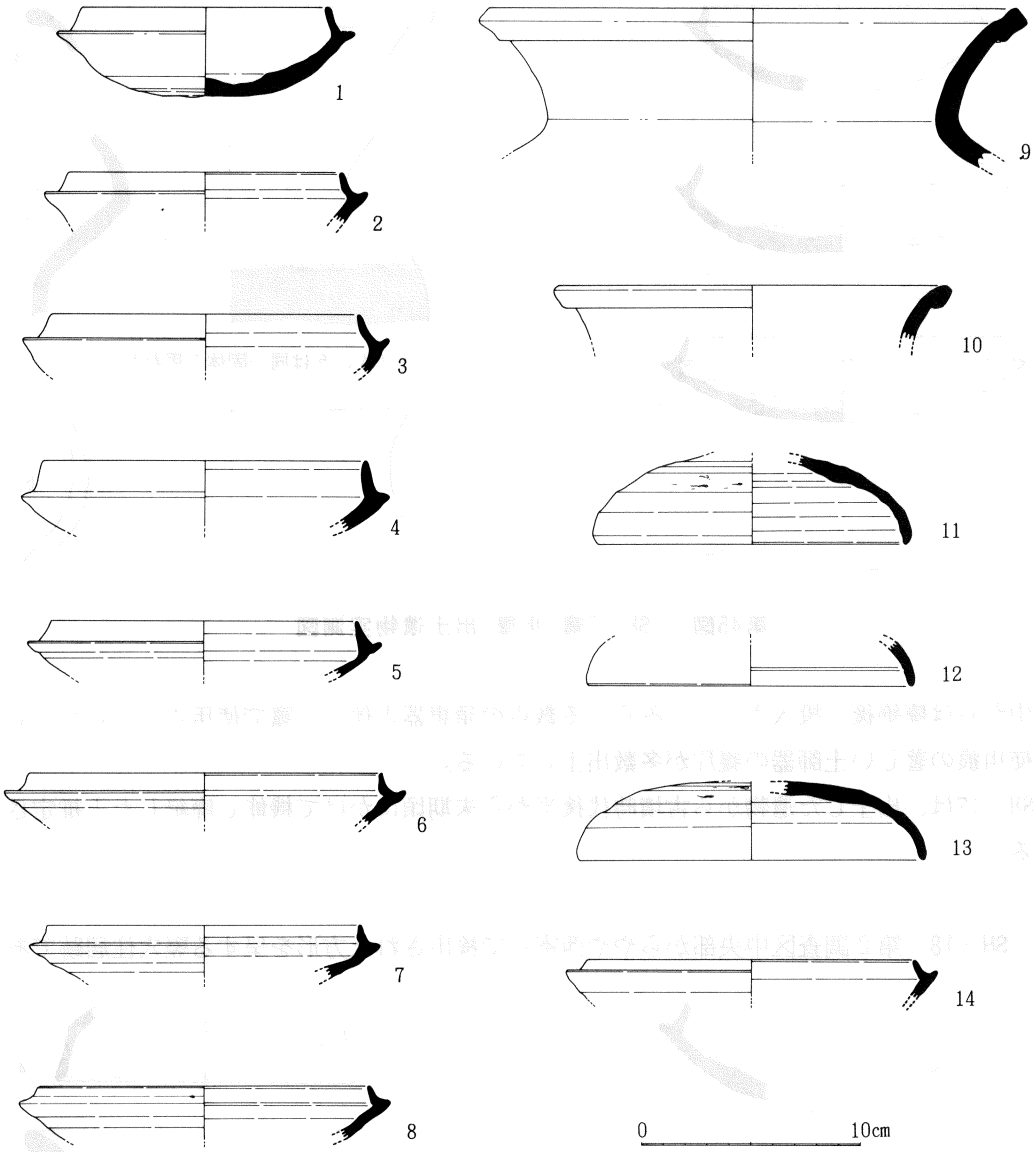


第43図　SH－17 実測図

弥生時代の竪穴住居において廃絶の祭祀が行われていたことは、昭和59年度に実施された旧練兵場遺跡彼ノ宗地区の調査で確認されており、古墳時代の竪穴住居についても、廃絶時の祭祀が存在したことは昭和63年度の稲木遺跡の調査で確認されていた。当遺跡の調査でも同様の祭祀が存在していたことを示す資料が更に増しているが、中でもこの土製鏡模造品とその出土状況については突出した例であるとおもわれる。

SH－17　第２調査区中央部で検出された方形を呈する竪穴住居跡である。主軸方位はN－19°－Wに取り、規模は南北に約6.0m・東西に約5.0～5.6mを測る。

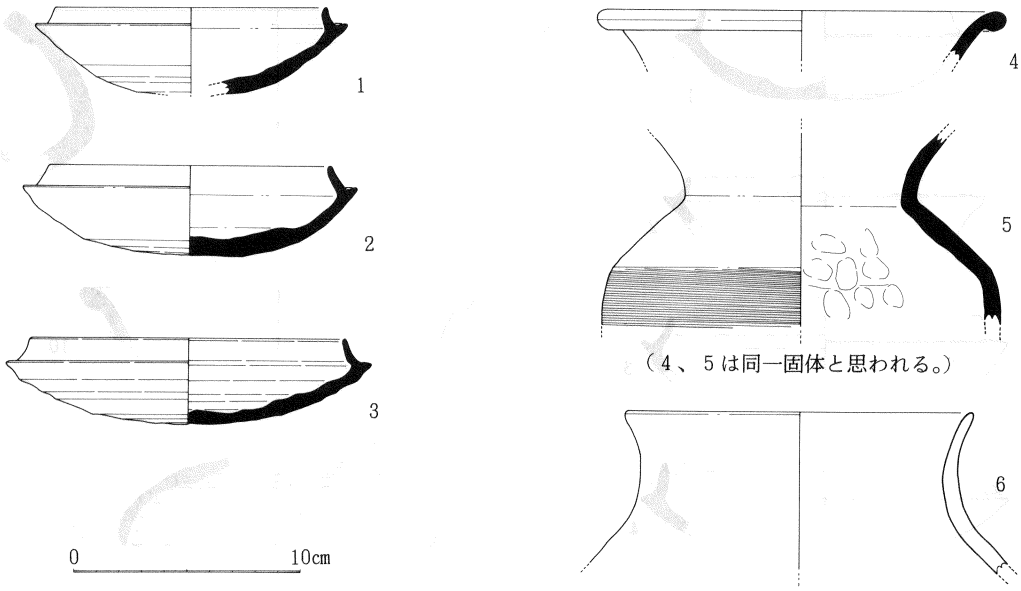
住居床面上には各隅寄りに設置された合計４個の柱穴の他に、小型の柱穴が数カ所に認



第44図　SH－17 Ⅱ層出土遺物実測図

められた。また、北東隅の一部には幅20cm程の壁溝・南壁面に沿って幅40～50cmの浅い溝確認されている。

竈は西壁中央部に設置されており、当調査区で西壁に竈を持っているのは当住居跡とSH－05だけで、他の住居跡がは全て北壁中央に位置している。当住居跡の竈はその南半分が遺構の南西隅部と判に古墳時代後期末頃の竪穴住居跡(SH－18)に切られてしまっているが、



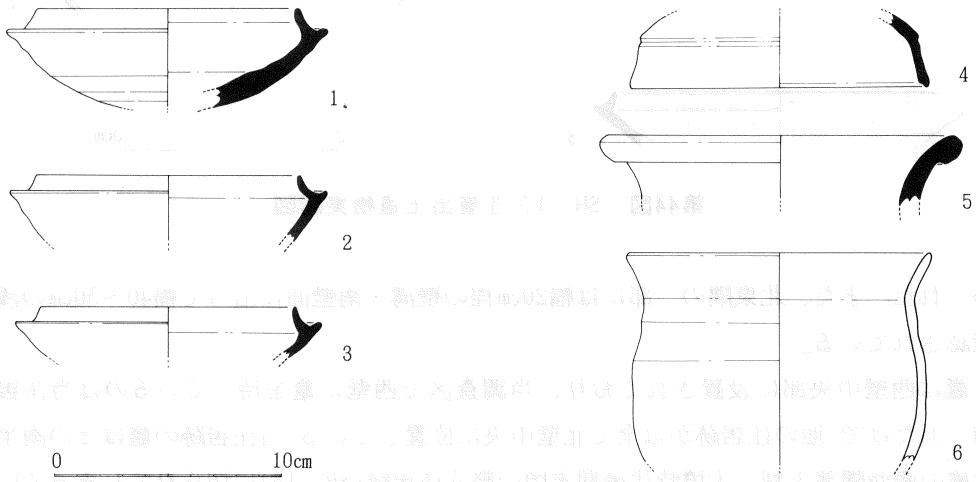
（4、5は同一固体と思われる。）

第45図　SH-17竈（Ⅲ層）出土遺物実測図

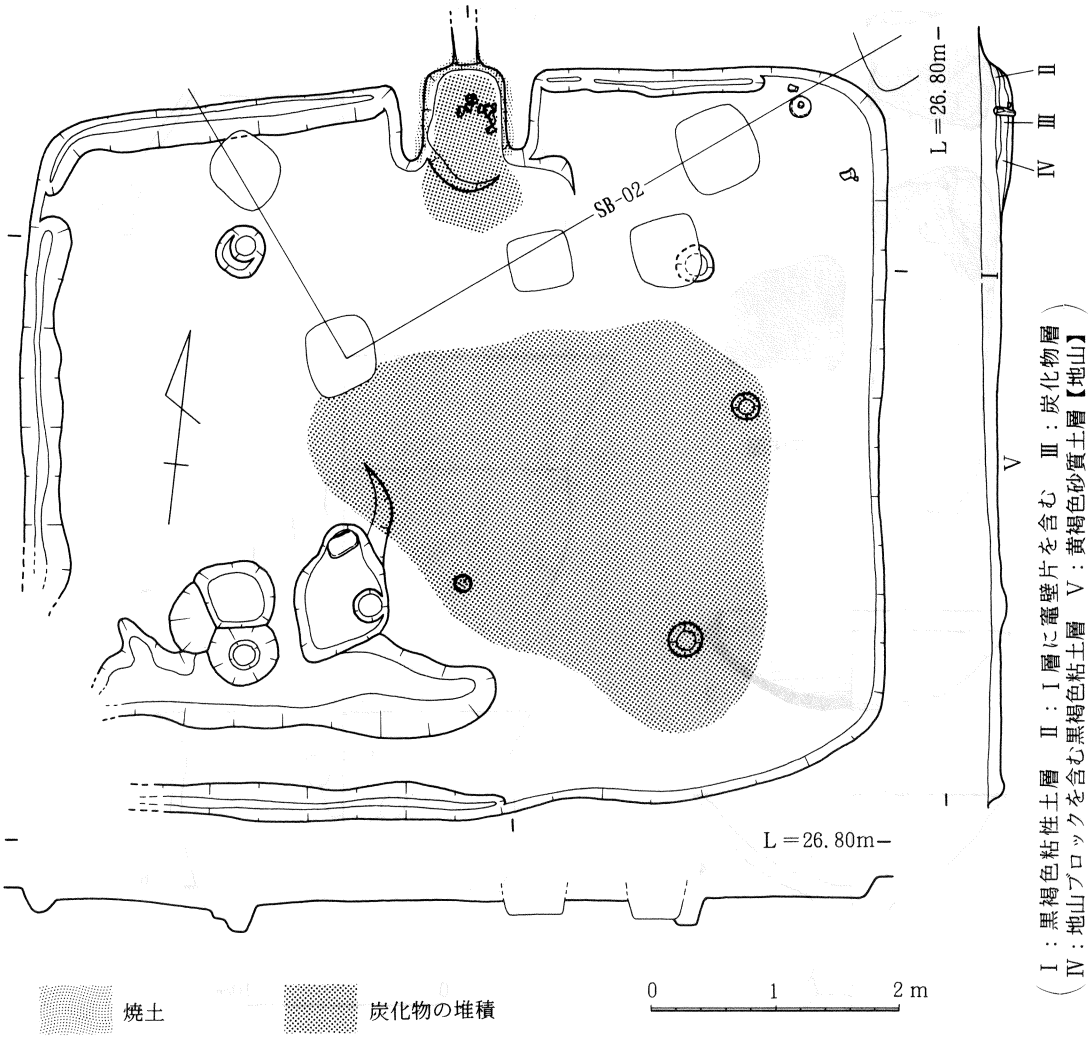
中からは廃絶後に投入されたとみられる数点の須恵器と伴に、竈で使用されていたらしい使用痕の著しい土師器の甕片が多数出土している。

SH－17は、出土した遺物から古墳時代後半から末期頃にかけて機能し廃絶したと推定される。

SH－18　第2調査区中央部からやや西寄りで検出された方形を呈する竪穴住居跡である。



第46図　SH-18　Ⅰ層出土遺物実測図

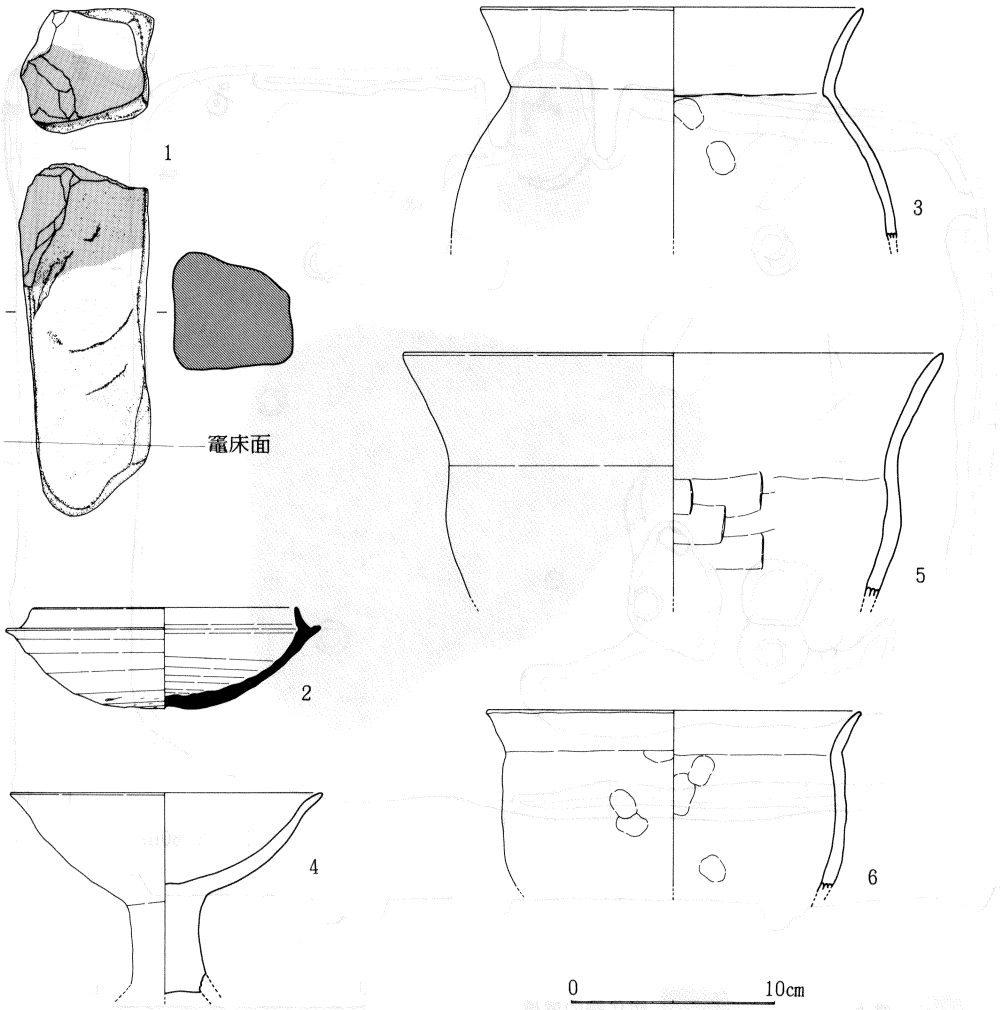


第47図　SH－18 実測図

主軸方位はN－8°－Wに取り、規模は南北に約6.0m・東西に6.9mを測る。

住居床面上には各隅寄りに設置された合計4個の柱穴の他に、南西隅部には複雑に柱穴や土坑、溝状遺構が配置されている。また住居壁面沿いでは北東隅から西壁を経て南壁中央までの範囲で、幅20～30cmの比較的深い壁溝が確認されている。

北壁中央部には大型の竈が設置されていたが、これまでにみられた竈とは異なり、竈壁がハの字形ではなく並行に延びている。そして他の竈が住居の竪穴掘削後に床部の整備等と併せて新たに造り付けられていると推定されるのに対して、これは明らかに竪穴部の掘削時に竈部分を削り出して造られたものである。また、竈中央部には竈で使用される甕などが竈中に落下することを防ぐ目的と考えられる支脚が備えられていた。支脚は自然石(河原石：和泉砂岩製)であり、竈中央からやや西寄りに垂直に立てられていた。上部は強力な



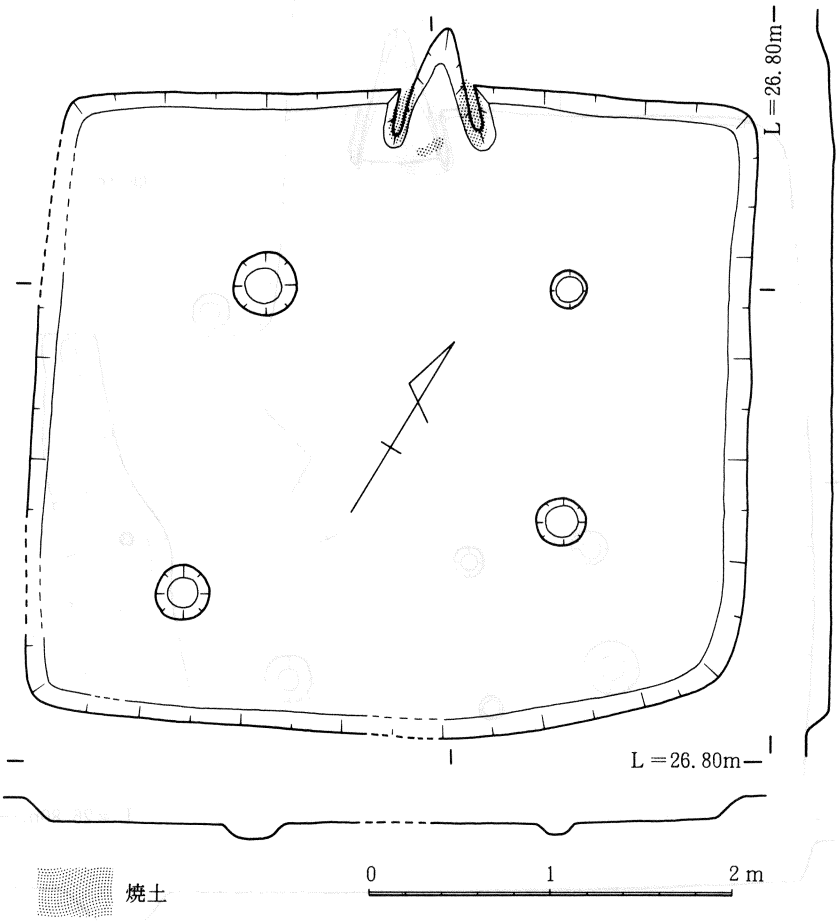
第48図　SH－18 竈及び床面直上出土遺物実測図

（1：竈中央の支脚　2：住居中央【炭化物中】　3：竈中　4，5：住居北東隅）

火力のため赤黒く変色し一部が弾けており、この周辺からは使用痕の著しい土師器片が多数出土している。

住居床面中央部から南東隅部にかけて、藁のような植物体の炭化物が広い囲に堆積しており、この中から完形の須恵器の坏身が床面直上に伏せられて置かれた状態で出土している。炭化物中には柱材等が全く認められないことから、昭和63年度の稲木遺跡の調査で確認されたように、これは焼失家屋ではなく、竪穴住居を廃絶時に解体し、再利用可能な柱材等を取り除いた後に、不要な屋根材等を焼却処理した痕跡ではないかと考えられる。また、埋土中からは竈片とみられる焼土塊が多数出土しており、この住居でも廃絶前に竈の一部が破壊されていた可能性がある。

SH－18は出土した遺物から、古墳時代後期末頃でSH－17廃絶後の所産と推定される。

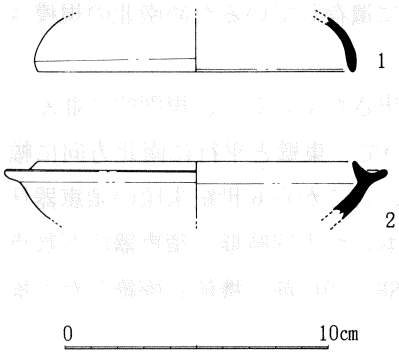


第49図　SH-19 実測図

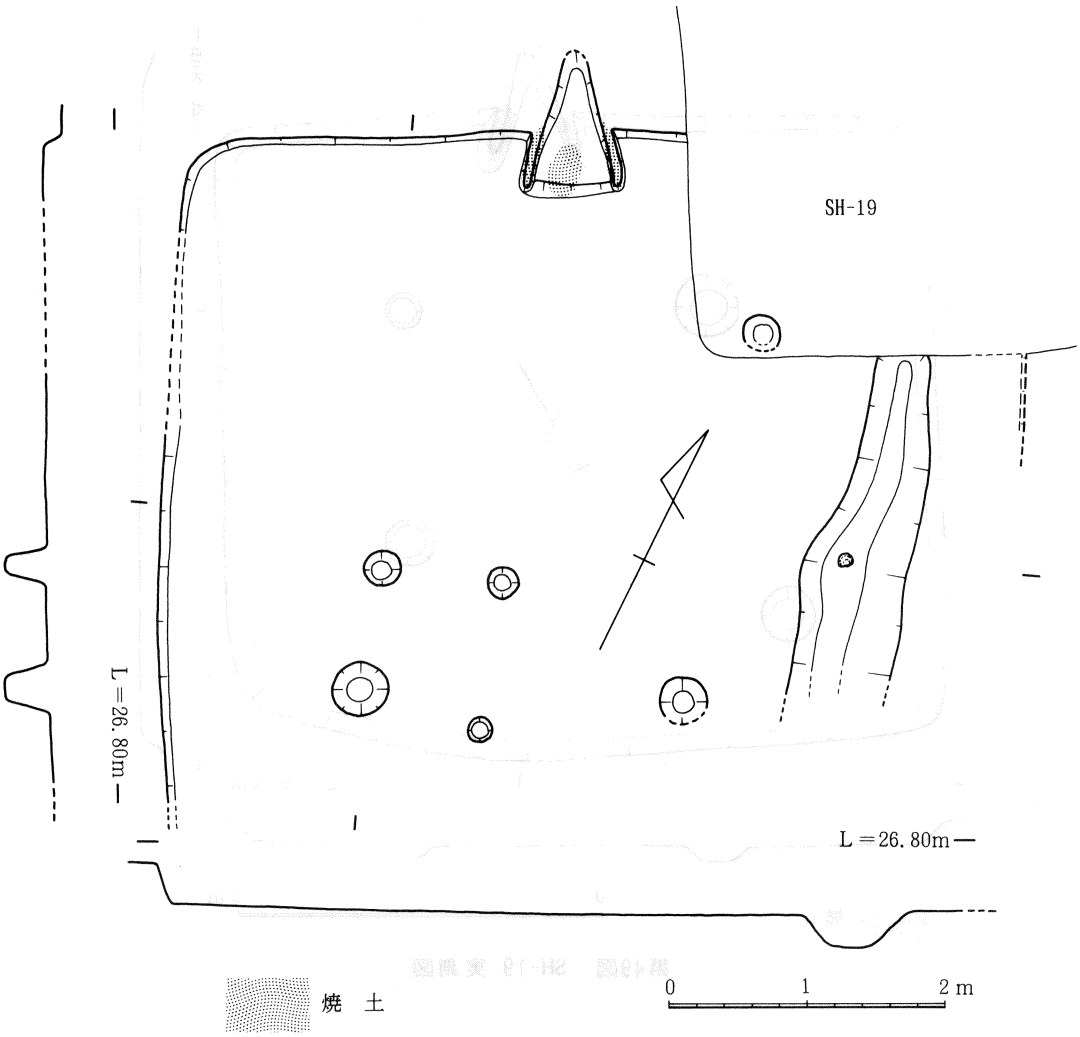
SH－19　第２調査区南部で検出された方形を呈する比較的小型の竪穴住居跡で、主軸方位はN-30°-Wに取り、規模は南北に約3.3～3.5m・東西に3.9mを測る。

住居床面上では各隅寄りに設置された合計４個の浅い柱穴が検出されただけで他に特徴は無いが、小型の住居であるにもかかわらず、北壁中央部には竈が設置されている。竈はハの字形に開き、竈の壁とその中央部が一部焼けて赤変しているが、炭化物等の堆積は認められなかった。

埋土中からは６世紀末から７世紀初頭にかけての須恵器片が数点出土しており、また遺構が古墳時代末頃の住居跡SH－20を切っていることから、SH－19は古墳時代後期末頃に機能し廃絶したと推定される。



第50図　SH-19 出土遺物実測図

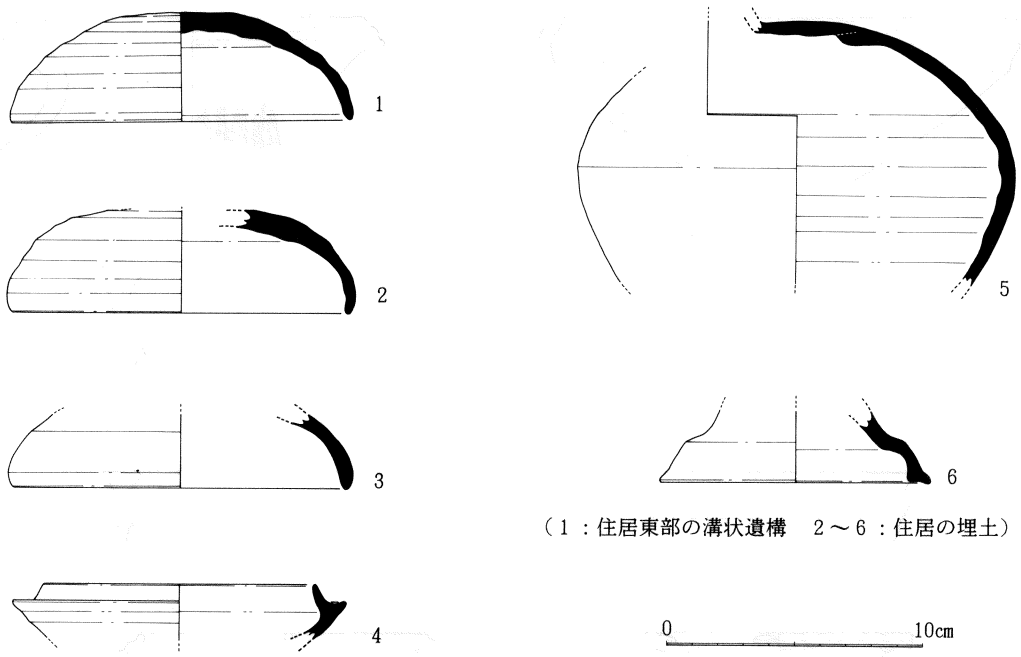


第51図　SH-20 実測図

SH－20　第２調査区南部で検出された方形を呈する竪穴住居跡で、主軸方位はN-26°-Wに取り、規模は東西に約6.2mを測るが、調査区の壁沿いに遺存しているため南北の規模は不明である。

住居床面上では小型のものを含めて数カ所で柱穴が検出されているが、規則的に並んではいない。床面上東端部では壁から80cm程の間隔を置いて、東壁と平行に南北方向に幅40～80cm・深さの35～50cmの溝状遺構が検出されており、ここから６世紀末頃の須恵器坏蓋がほぼ完形で出土している。住居埋土中からは、他にもこれと同時期の須恵器片が数点出土していることから、SH－20は古墳時代後期末頃で、SH－19以前に機能し廃絶したと推定される。

住居北壁中央部にはハの字形に開く竈が設置されており、竈壁とその中央部が一部焼けて赤変しているが SH-19と同様に炭化物等は確認されていない。また、竈の炊き口部分



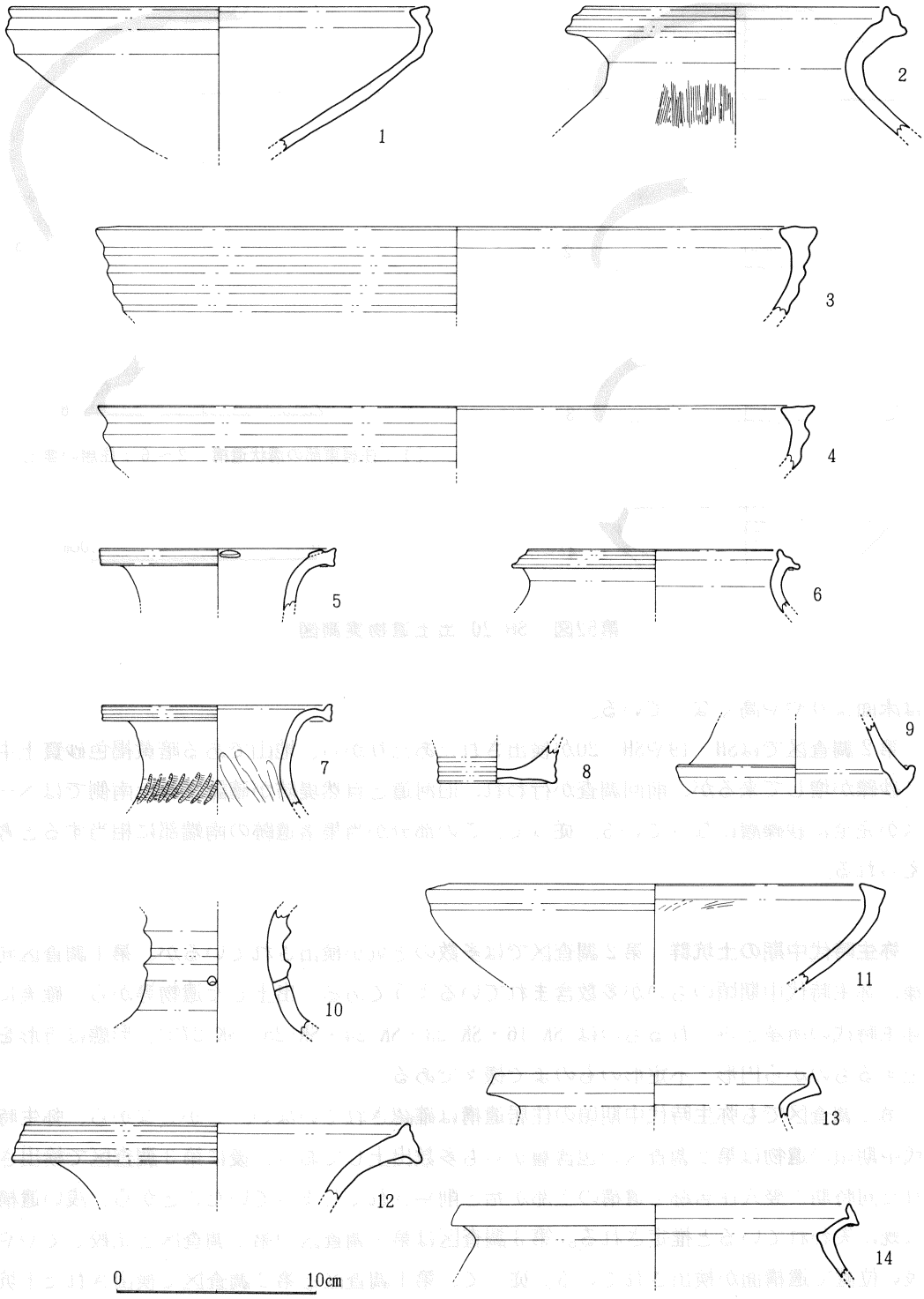
第52図　SH-20 出土遺物実測図

は床面よりやや高くなっている。

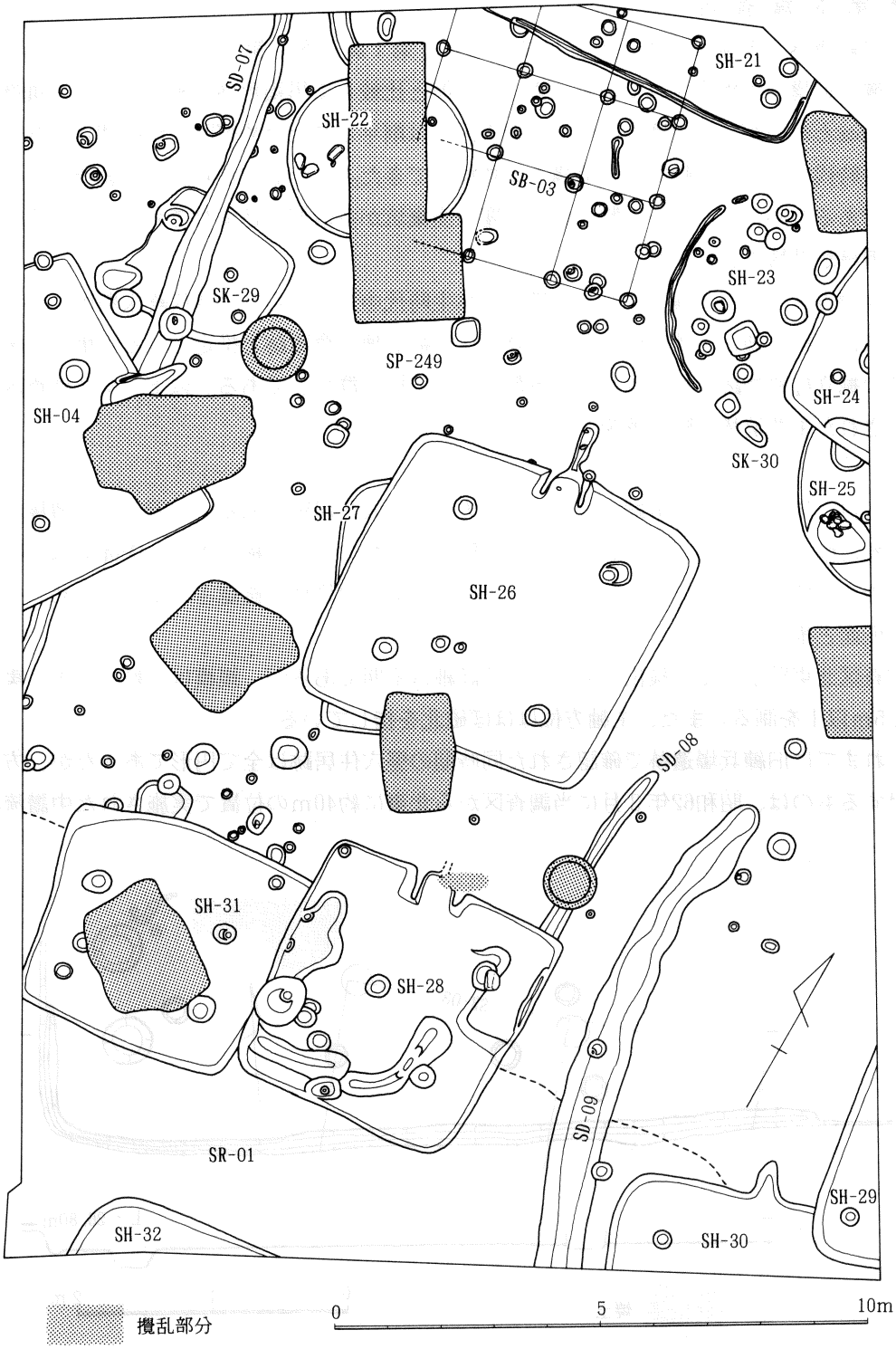
第2調査区ではSH－19やSH－20が検出されたあたりから、地山である暗黄褐色砂質土中に砂礫が増して来るが、前回調査が行われ、旧河道と自然堤防が確認された南側ではベースが完全に砂礫層になっている。従って、この部分が当集落遺跡の南端部に相当すると考えられる。

弥生時代中期の土坑群　第2調査区では多数の土坑が検出されているが、第1調査区同様に弥生時代中期頃のものが多数含まれているようである。出土した遺物等から、確実に弥生時代の所産とみられるものは SK-16・SK-23・SK-24・SK-25・SK-27で、形態は方形を呈するものから円形・不定形のものまで様々である。

第2調査区でも弥生時代中期頃の住居遺構は確認されていない。しかしながら、弥生時代中期頃の遺物は第2調査区の包含層からも多数出土しており、後に第3調査区で検出された同時期の竪穴住居跡も遺構の上部が殆ど削平されてしまっていたことから、浅い遺構は既に失われていると推定される。第3調査区は第1調査区や第2調査区と比較してやや浅い位置で遺構面が検出されている。従って、第1調査区と第2調査区で検出された土坑の中には、弥生時代中期頃の竪穴住居跡の痕跡が含まれている可能性が高い。



第53図　第２調査区土坑群出土遺物実測図（１:SK-16　２～７:SK-23　８～14:SK-25）



第54図　第３調査区遺構配置図

④ 第 3 調 査 区

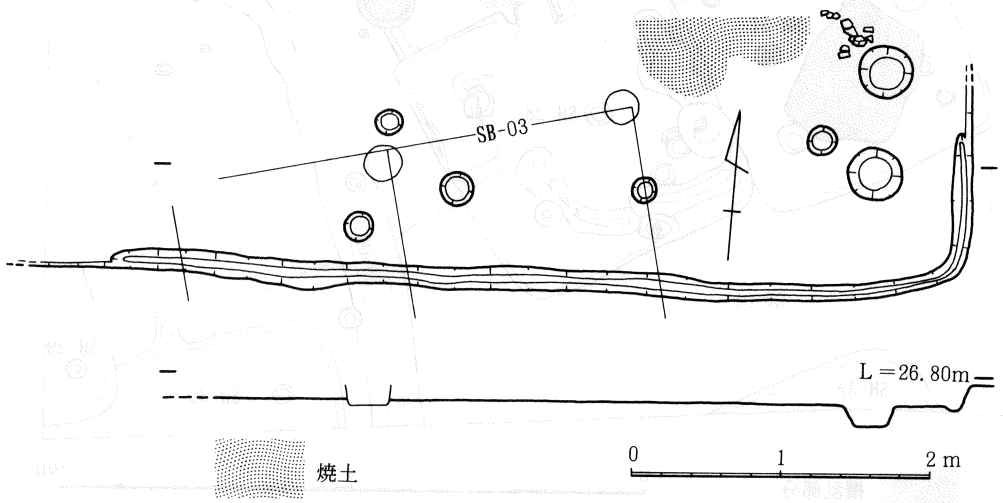
この調査区は深部まで攪乱を受けておらず、第1調査区や第2調査区より15～20㎝浅い位置で遺構面が検出されている。従って、他と比較して黒褐色粘土層(包含層)の堆積は30～50㎝と薄いが、第1調査区や第2調査区では削平されたため痕跡しか確認されなかった弥生時代中期頃の比較的浅い遺構も多数検出できた。しかしながら、この調査区は住宅跡地であるためコンクリート製の便槽や塵の廃棄坑が多数掘り込まれており、いたるところで遺構が破壊されていた。

第3調査区で新たに検出された遺構は、弥生時代中期頃から弥生時代終末期頃にかけての竪穴住居跡7棟と古墳時代後期頃の竪穴住居跡5棟、倉庫跡と推定される古墳時代後期末頃の掘立柱建物跡1棟をはじめ、多数の土坑・柱穴群などである。以下、第3調査区で検出された主要遺構を順に解説する。

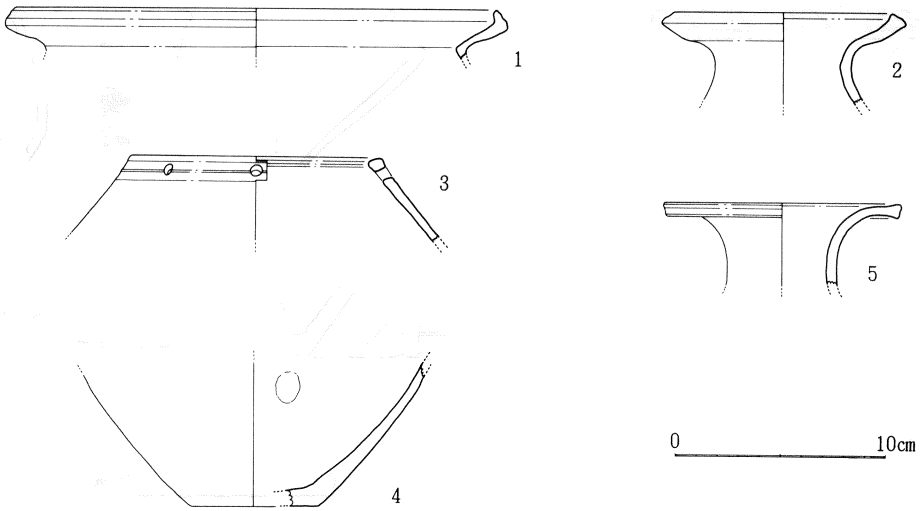
SH－21 第3調査区北東端で検出された方形の竪穴住居跡である。床面が浅く遺構は上部が殆ど削平されていたが、U字形の浅い壁溝と複数の柱穴が検出され、床面では広い範囲の赤く変色した焼土と弥生時代中期後半頃の土器片の堆積が確認されているため、その頃の所産と推定される。

調査区北東壁沿いでの検出であったため詳細は不明であるが、規模は比較的大きく東西に6.5m以上を測る。また、主軸方位はほぼ磁北を指している。

これまでに旧練兵場遺跡で確認された同時期の竪穴住居跡は全て円形であったが、方形を呈するものは、昭和62年3月に当調査区から北東に約40mの位置で実施された中讃流域



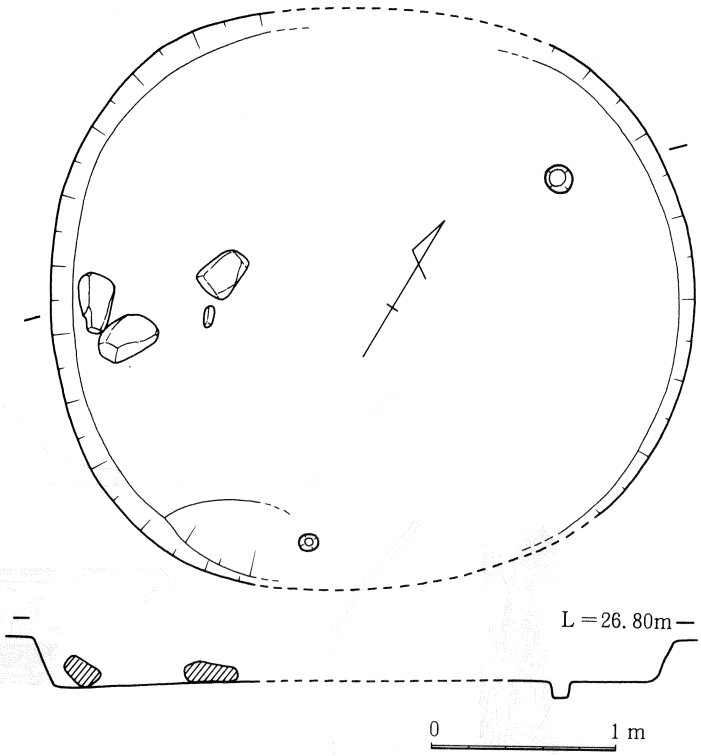
第55図 SH-21 実測図



第56図　SH-21 出土遺物実測図

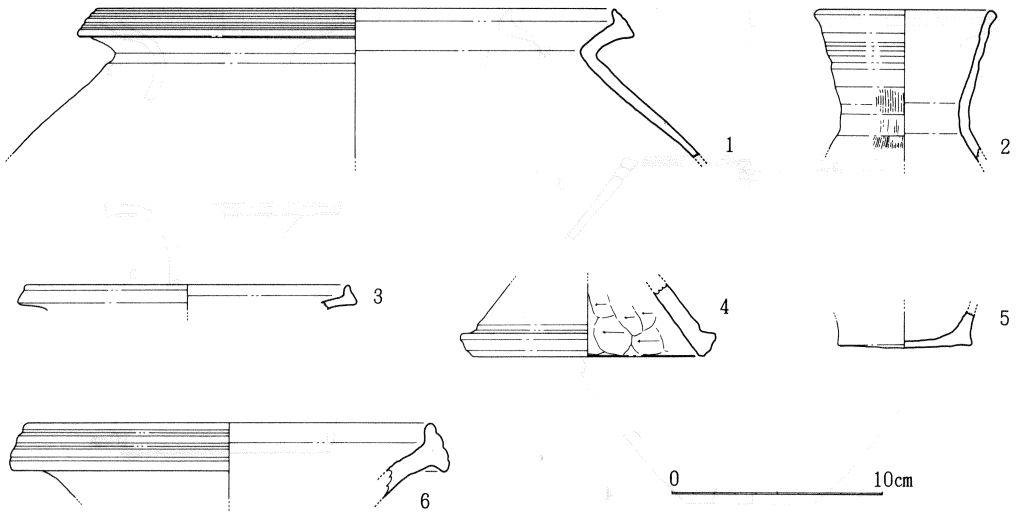
下水道工事に伴う発掘調査でも1棟確認されている。この場所には明らかに今回検出された遺構群の延長であり、その住居はやはり壁溝を持ち、床面に焼土が確認され、出土した遺物の時期もほぼ一致している。

これまでの調査で確認されたものや、今回の調査で検出された同時期頃の竪穴住居跡(SH－22・SH－23)が全て円形を呈する小型であることを考えると、何か特殊な目的の住居遺構である可能性もある。

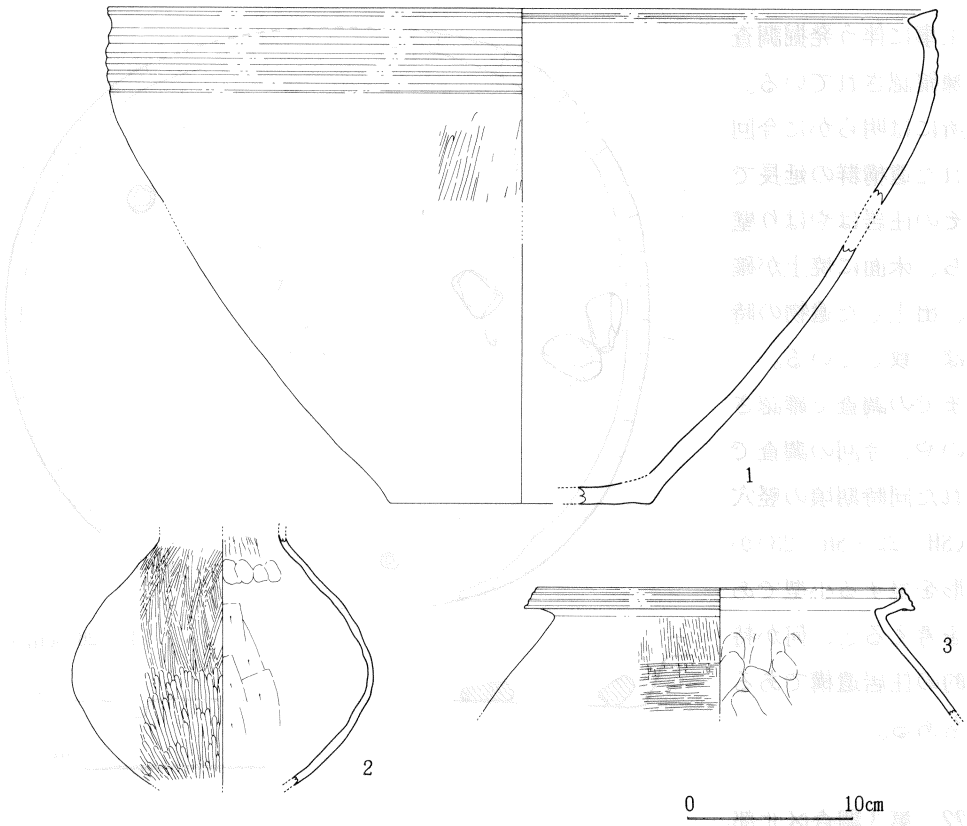


第57図　SH-22 実測図

SH－22　第3調査区北部で検出された円形を呈する



第58図　SH-22 出土遺物実測図



第59図　SH-23 中土坑(SK-30)出土遺物実測図

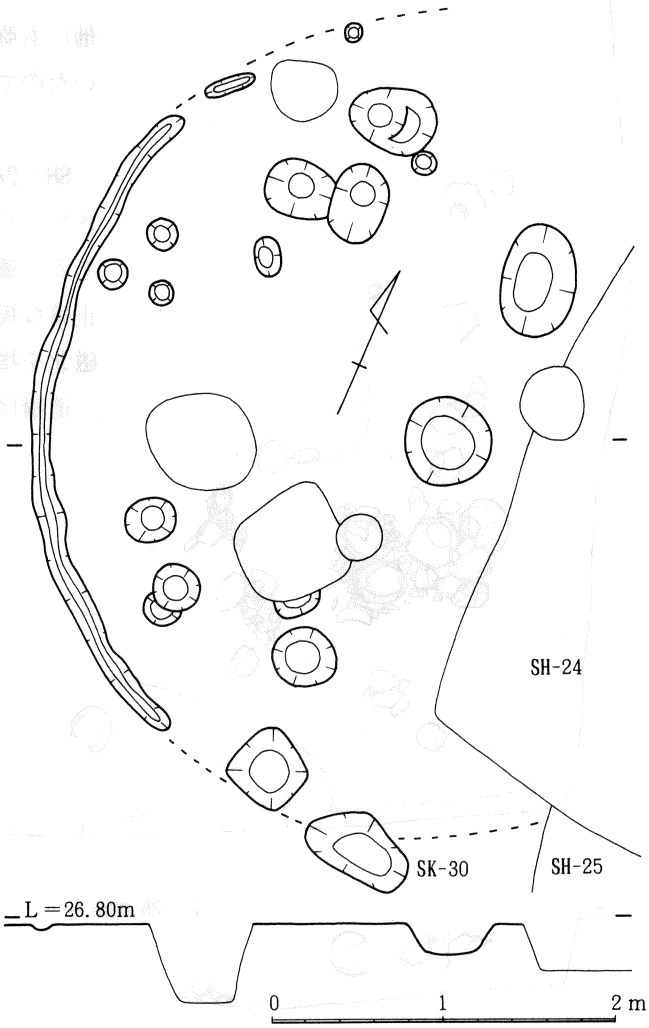
小型の竪穴住居跡である。

規模は東西に 3.5m、南北に3.2mを測るが、遺構の中央部が深部まで攪乱されているため柱穴等の状態は不明である。

住居埋土中からは30～40cm程の河原石と伴に弥生土器が数点出土しており、その遺物などからSH－22は弥生時代中期後半頃の所産と推定される。

SH－23 SH－23は第3調査区北東隅で柱穴・土坑群と伴に、その壁溝がかろうじて確認されたために竪穴住居跡であることが判明した遺構である。円形に廻りU字型の断面を呈する壁溝から直径が 4.5m程の規模であることがわかるが、遺物等は全く出土しておらず詳細は不明である。

しかしながら、この壁溝の内側内に遺存する多数の柱穴・土坑の埋土は壁溝のそれと酷似しており、住居に伴うもの、若しくはほぼ同時期の遺構と判断される。このうちSH－30からは弥生時代中期中葉頃の大型の鉢や壺、甕が小さく割られ詰め込まれた状態で出土している。



第60図　SH-23　実測図

昭和59年度に実施された同じ旧練兵場遺跡群の西端部に当たる彼ノ宗遺跡の調査では、弥生時代中期中葉頃から弥生時代終末期頃にかけての竪穴住居跡が40棟程検出されたが、弥生時代中期中葉頃の住居跡の遺存状況や形態がこれと良く似ていることなどとも考え併せて、SH－23はこの頃の所産ではないかと推定される。

従ってSH－23が今回の調査で確認された一番古い住居跡ということになるが、包含層中にはこの時期の遺物が非常に多く含まれており、また調査区全体にこれと同時期の遺物を

含む土坑や柱穴が多数遺存している状態をみると、このあたりには削平を免れたSH－23の他にも弥生時代中期頃の住居が多数存在していたのではないかと思われる。

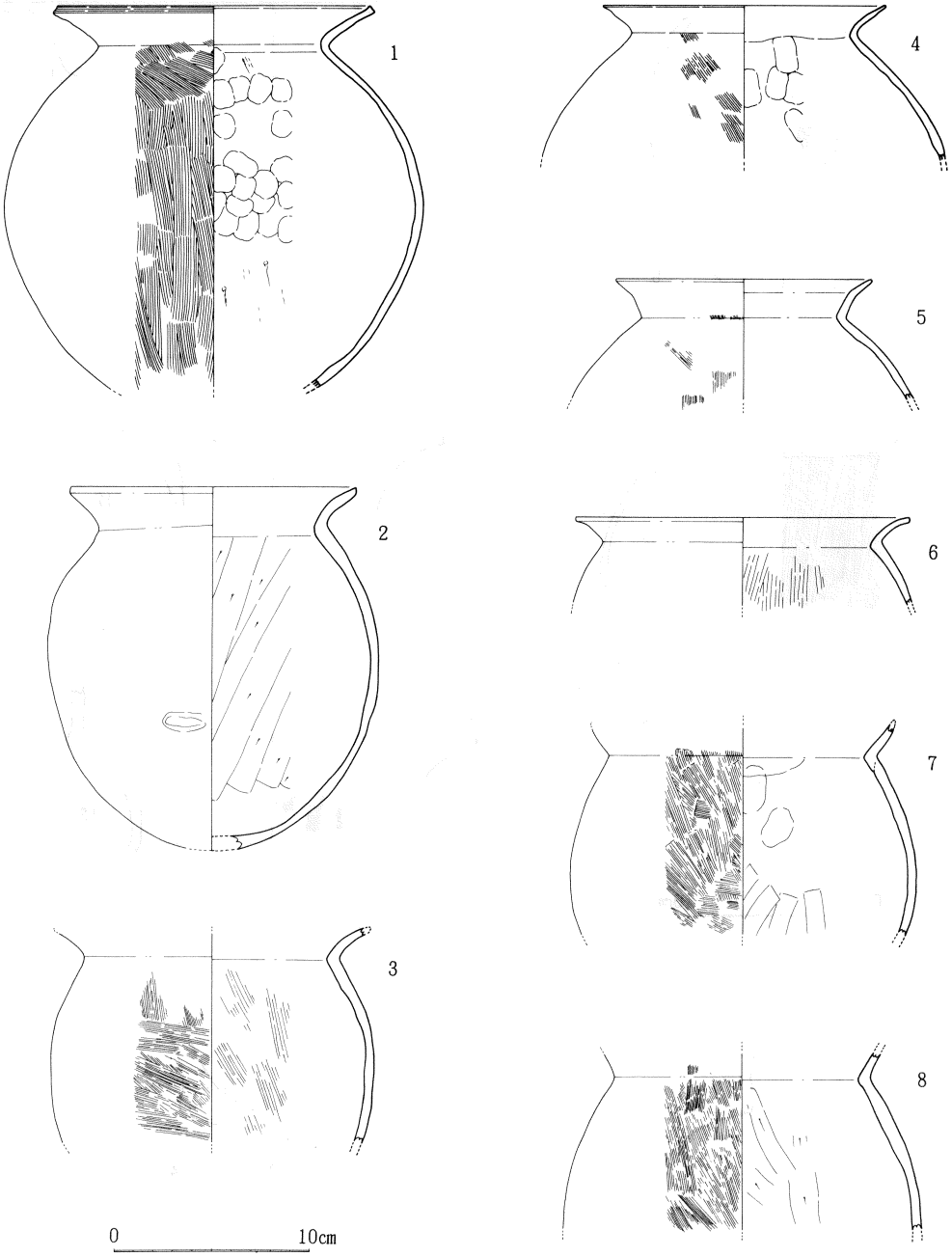
SH－24　第3調査区東壁沿い北寄りで検出されたやや隅丸を呈する方形の竪穴住居跡である。遺構の大部分は調査区外に延びており正確な規模は不明であるが、主軸方位はほぼ磁北を指している。

遺構は全体のごく一部の検出であったが、黒褐色砂礫土層の埋土中には中層部から下層部にかけて極めて多量の土器が包含されていた。

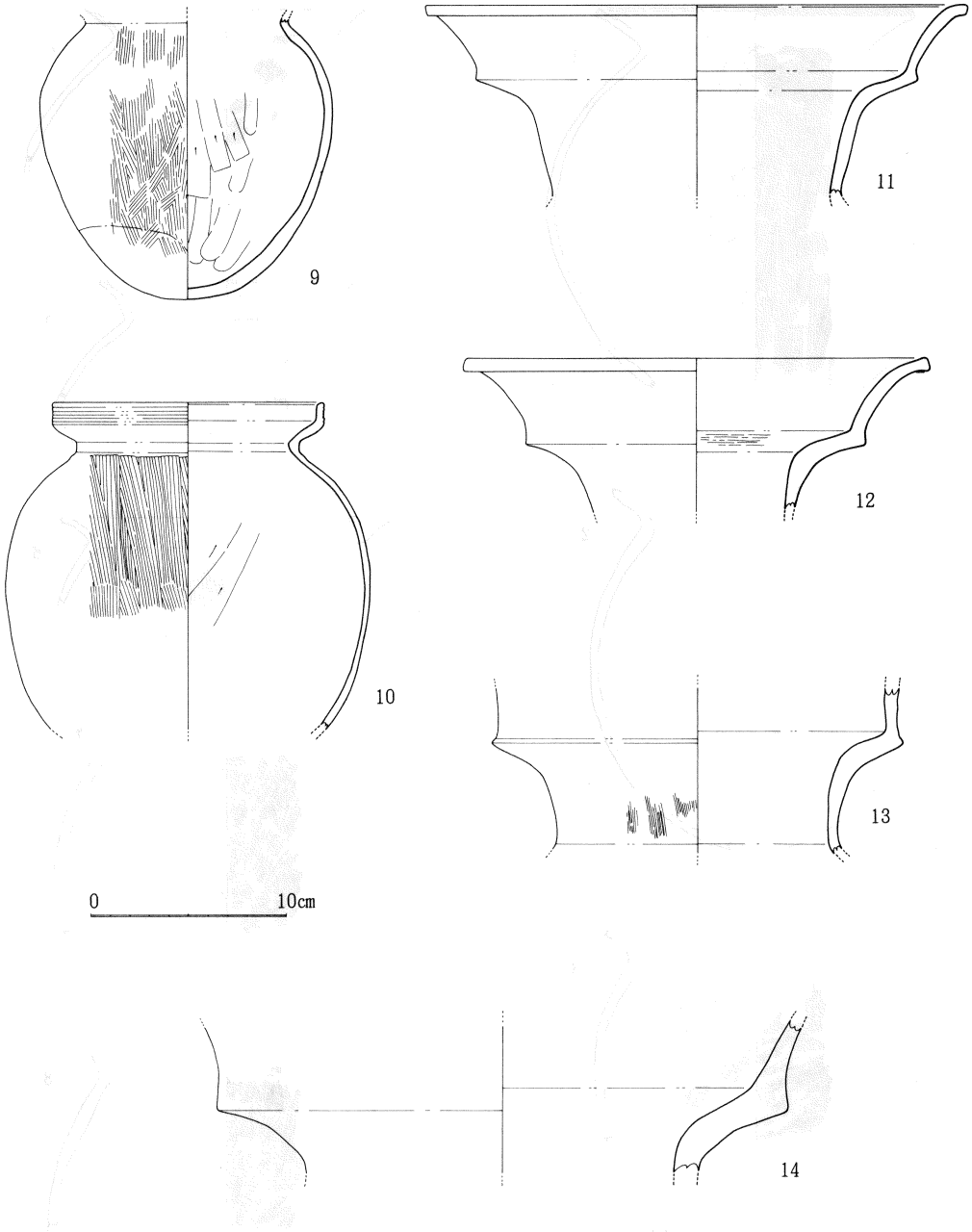
土器群は全て弥生時代終末期頃のもので、こぶし大の円礫と伴に堆積していた。器種は朝顔型口縁の壺と二重口縁の壺、甕・小型丸底壺・鉢と様々であるが、朝顔型口縁の壺と二重口縁の壺は体部を失ったもので、口縁部だけの出土である。その量が特に多く、特異であった。

第61図　SH-24 及び遺物出土状況実測図

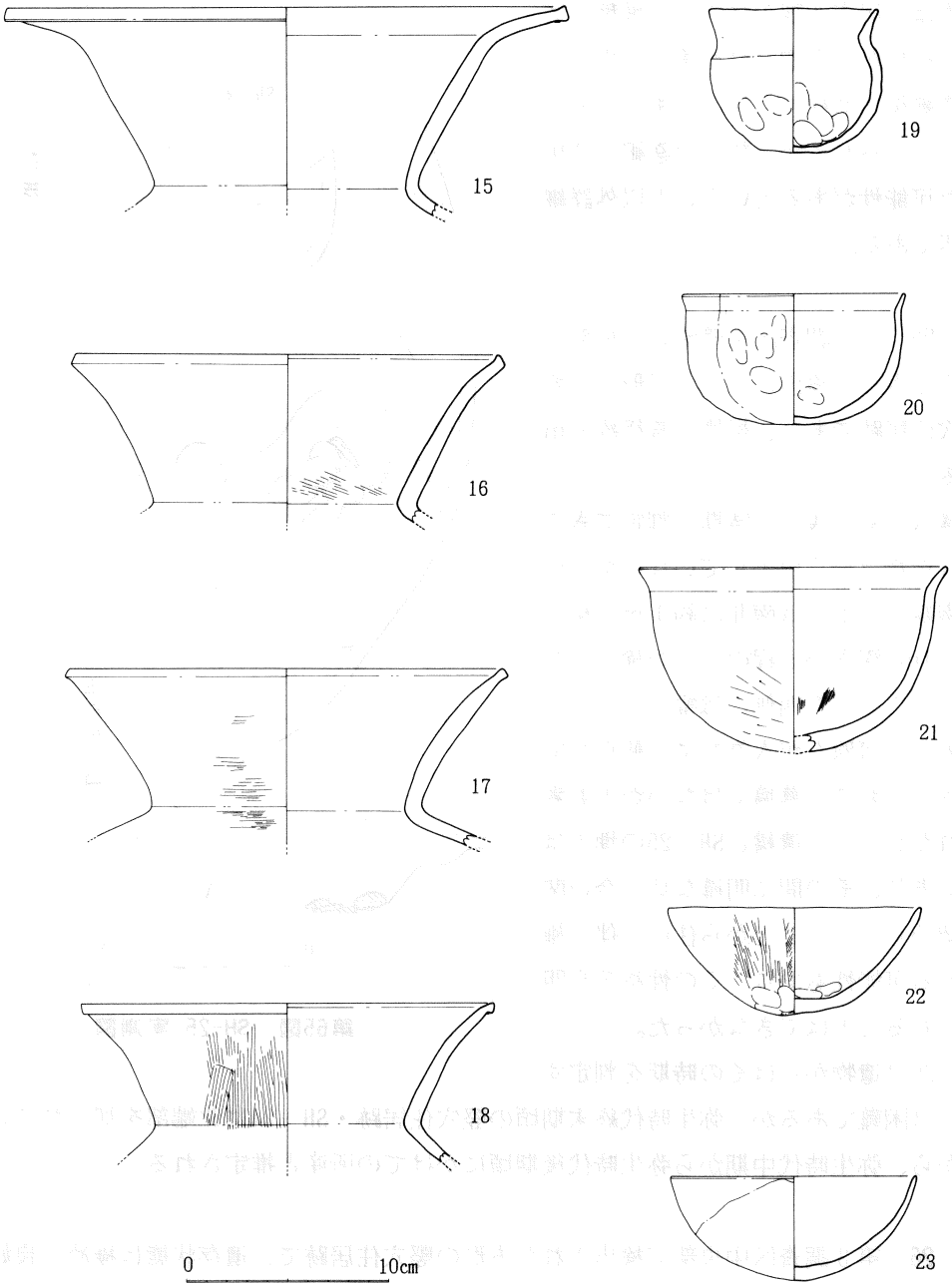
弥生時代終末期頃の住居内から朝顔型口縁の壺と二重口縁の壺の口縁だけが対をなして出土した例は、やはり昭和59年度に旧練兵場遺跡群西端部の彼ノ宗遺跡で確認されている。ここでは弥生時代終末期の竪穴住居が埋没した窪み上に、朝顔型口縁の壺と二重口縁の壺の口縁部のみを伏せて器台のように並べ、一方の上に甕が置かれていたが、SH－24では乱雑に堆積していた点と出土量が異なる。また、昭和58年度に実施された当調査区南側部分の発掘調査の際にも、旧河道岸部に土器溜が確認され、出土したものを接合したところ朝顔型口縁の壺と二重口縁の壺の口縁部のみであることが判明している。



第62図　SH-24 出土遺物実測図－①

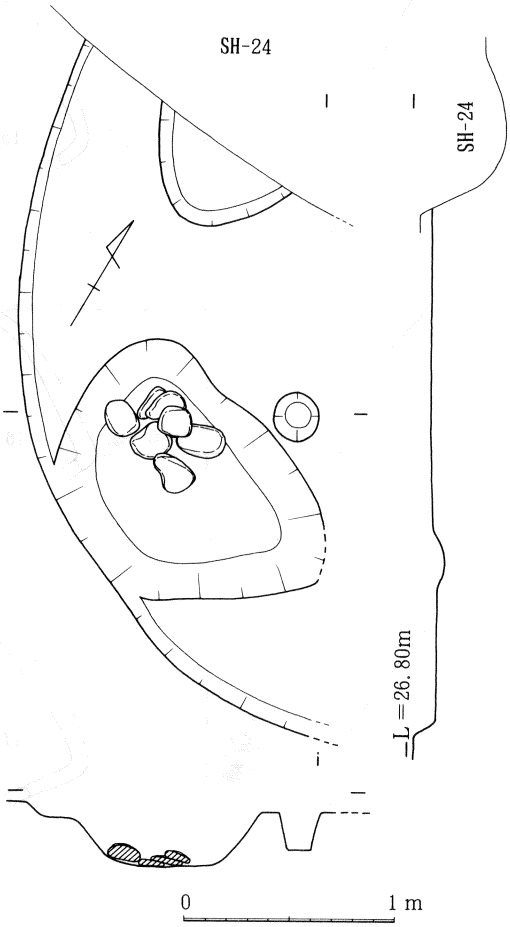


第63図　SH-24 出土遺物実測図－②



第64図　SH-24 出土遺物実測図－③

遺物は住居南西隅の柱穴上に堆積しており、柱材が抜き取られた後、つまり住居の廃絶後に遺構内に投げ込まれたものであるとみられるが、特定の祭祀に使用された可能性があるということ以外詳細は不明である。



第65図　SH-25 実測図

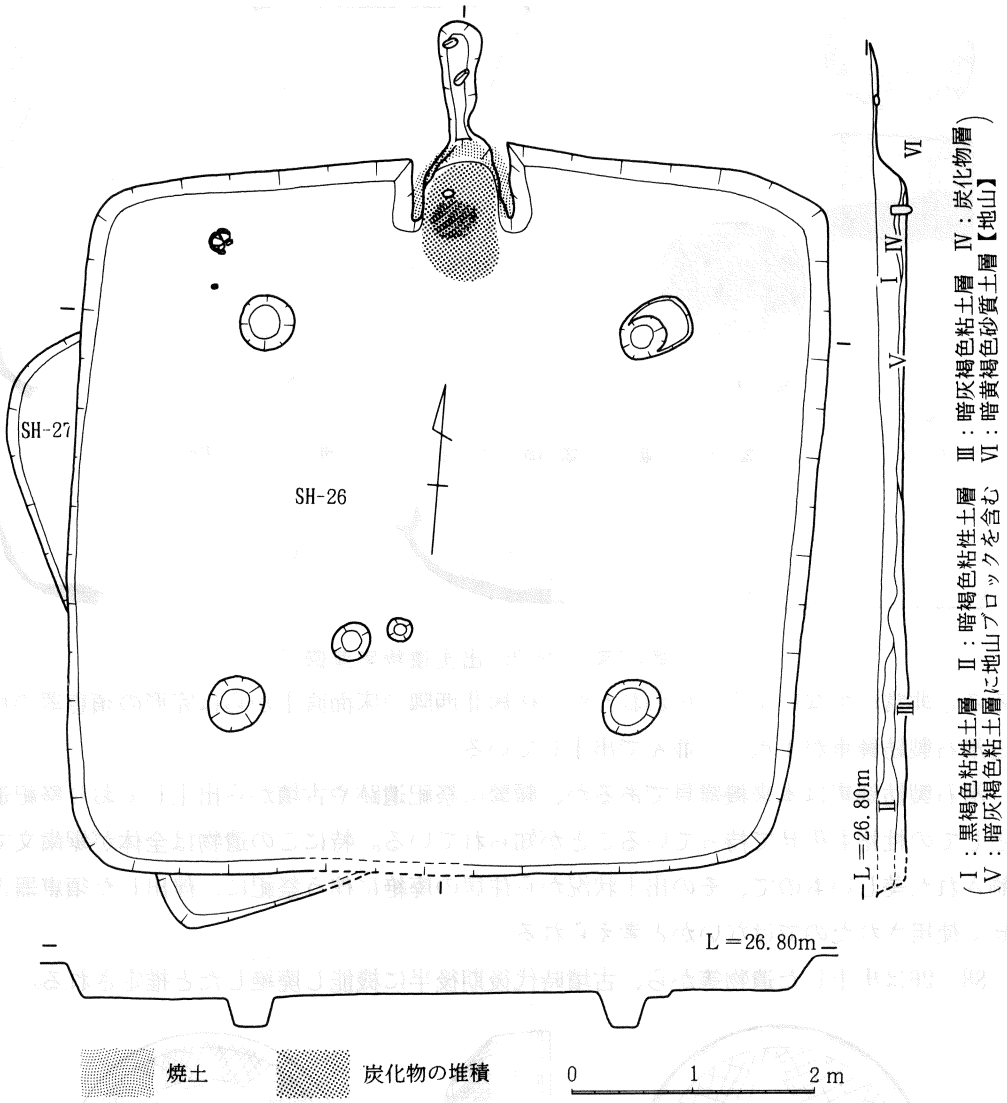
SH－25　第3調査区東壁沿い中央部からやや北寄りで検出された、円形を呈する竪穴住居跡であり、規模は直径約4mを測る。

遺構は非常に浅く、時期が判定できるような遺物は全く出土していないが、住居の南端床面上には南北に約1m、東西に約1.4m、深さ25cm程の土坑が検出されている。この底部西側には幅20～25cmの薄い板状の河原石が人為的に7個重ねて配置されており、墓壙ではないかとも考えられたが、この遺構とSH－25の埋土は同一であり、その間に明確な切り合い関係は認められないことから住居に伴う施設である可能性もあり、その性格等を明らかにすることはできなかった。

SH－25は遺物からはその時期を判定することは困難であるが、弥生時代終末期頃の竪穴住居跡・SH－24に北端部を切られていることから、弥生時代中期から弥生時代後期頃にかけての所産と推定される。

SH－26　第3調査区中央部で検出された方形の竪穴住居跡で、遺存状態は極めて良好であった。遺構の主軸方位はN－3°－W、規模は東西に6.2m・南北に6.0mを測る。

住居の埋土は基本的には黒褐色粘性土で、一部その下に暗褐色粘性土と暗灰褐色粘土が堆積しており、遺物はこの3層からのみ出土している。また住居北壁中央部には竈が造り付けられており、この周辺部のみが暗黄褐色砂質土の地山ブロックを多く含む暗灰褐色粘土によって薄く張り床されていた。そして、住居床面上には各隅寄り合計4カ所に柱穴が整然と配置されている。



第66図　SH-26・SH-27 実測図

竈は上面ではハの字型に開くとみられたが、検出の結果SH－18で確認された竈と同様に後から造り付けたものではなく、住居の竪穴部掘削時に地山部分を削り出して造ったものであり、竈壁がほぼ平行に設定されていることが判明した。そして、やはりSH－18と同様に、竈中央部からやや西寄りには自然石(河原石：和泉砂岩製)が支脚として垂直に立てられており、その上部は強力に火力のため赤黒く変色していた。竈中には多量の炭化物が堆積しており、この上面から使用痕の著しい土師器片が多数出土している。

埋土中からは6世紀末頃の須恵器片が数点出土しただけで、遺構の遺存状態の良さから

竈床面

（1：竈中央の支脚　2：竈の炭化物上面　3～4：埋土穴　5：床面直上）

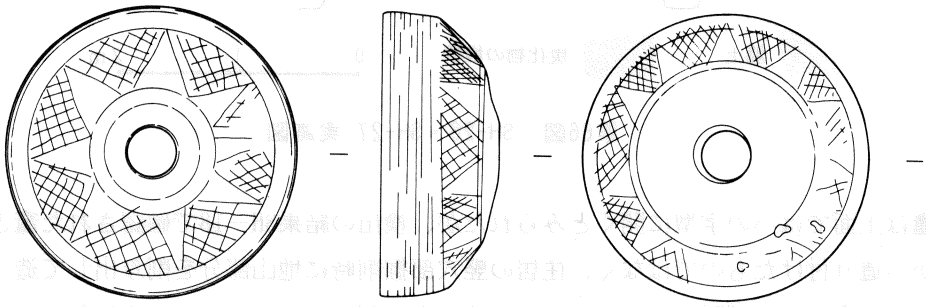
0　10cm

第67図　SH-26 出土遺物実測図

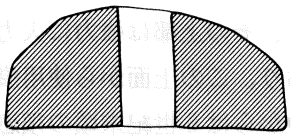
みると非常に少ないように思われたが、住居北西隅の床面直上からは完形の須恵器の坏身と滑石製紡錘車が1点づつ並んで出土している。

滑石製紡錘車は本来機織具であるが、頻繁に祭祀遺跡や古墳から出土しており祭祀遺物としての性格も併せて持っていることが知られている。特にこの遺物は全体が鋸歯文で装飾された美しいもので、その出土状況から住居の廃絶に伴う祭祀に、伴出した須恵器と併せて使用されたのではないかと考えられる。

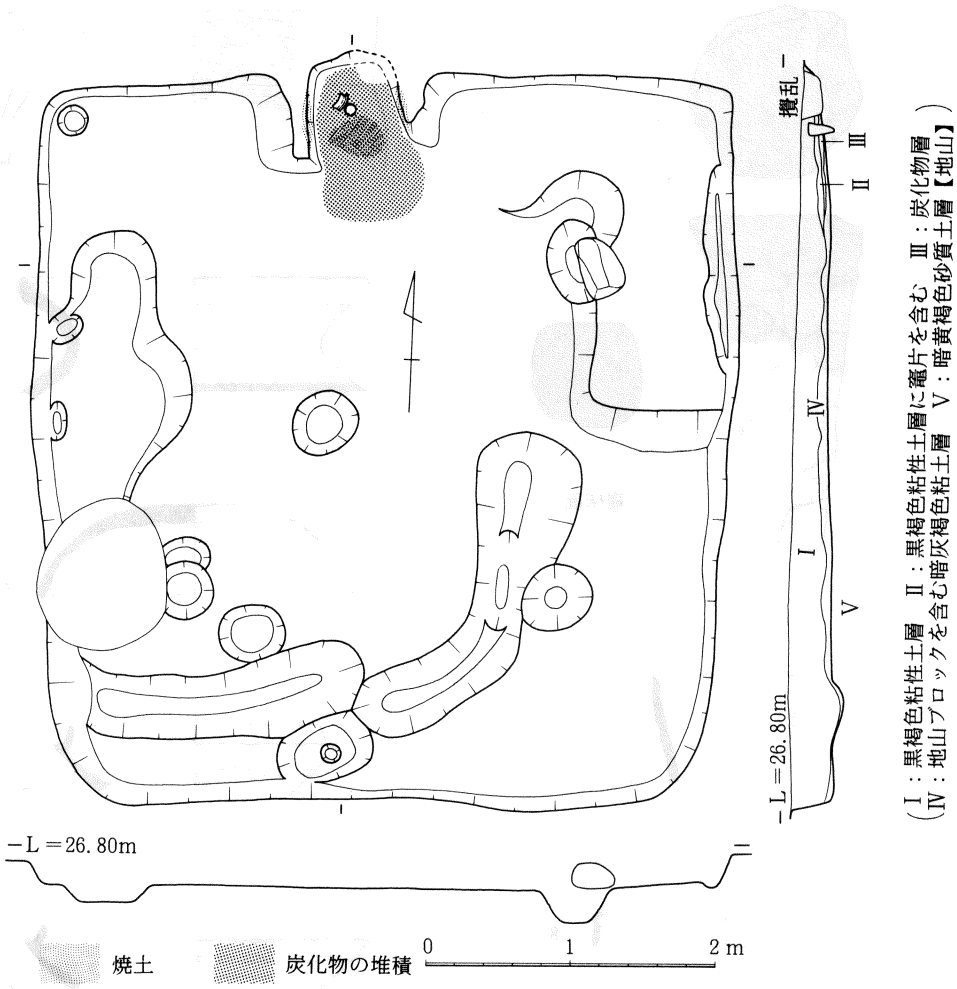
SH－26は出土した遺物等から、古墳時代後期後半に機能し廃絶したと推定される。



（原寸大）



第68図　SH-26 床面出土滑石製紡錘車実測図



第69図　SH-28 実測図

SH－27　SH－27はやや隅丸を呈する方形の竪穴住居跡で、遺構の規模は南北に約5.0m、主軸方位はN-24°-Wに取っている。遺構の大部分をSH－26に切られており、遺物等も全く出土していないことから詳細は不明であるが、弥生時代後期から古墳時代後期中葉頃までの所産と推定される。

SH－28　第3調査区南側中央部で検出された方形の竪穴住居跡で、遺構の主軸方位はほぼ磁北を指し、規模は東西に4.8m・南北に約5.0mを測る。

住居北壁中央部にはSH－18のものと酷似した形態の竈が設置されており、一部撹乱されてはいたものの遺存状況は比較的良好で、竈中央部では土製の支脚が垂直に立てられたま

竈床面

0　10cm

（1：竈中央の支脚　2，3：竈の炭化物上面　4～8：埋土中）

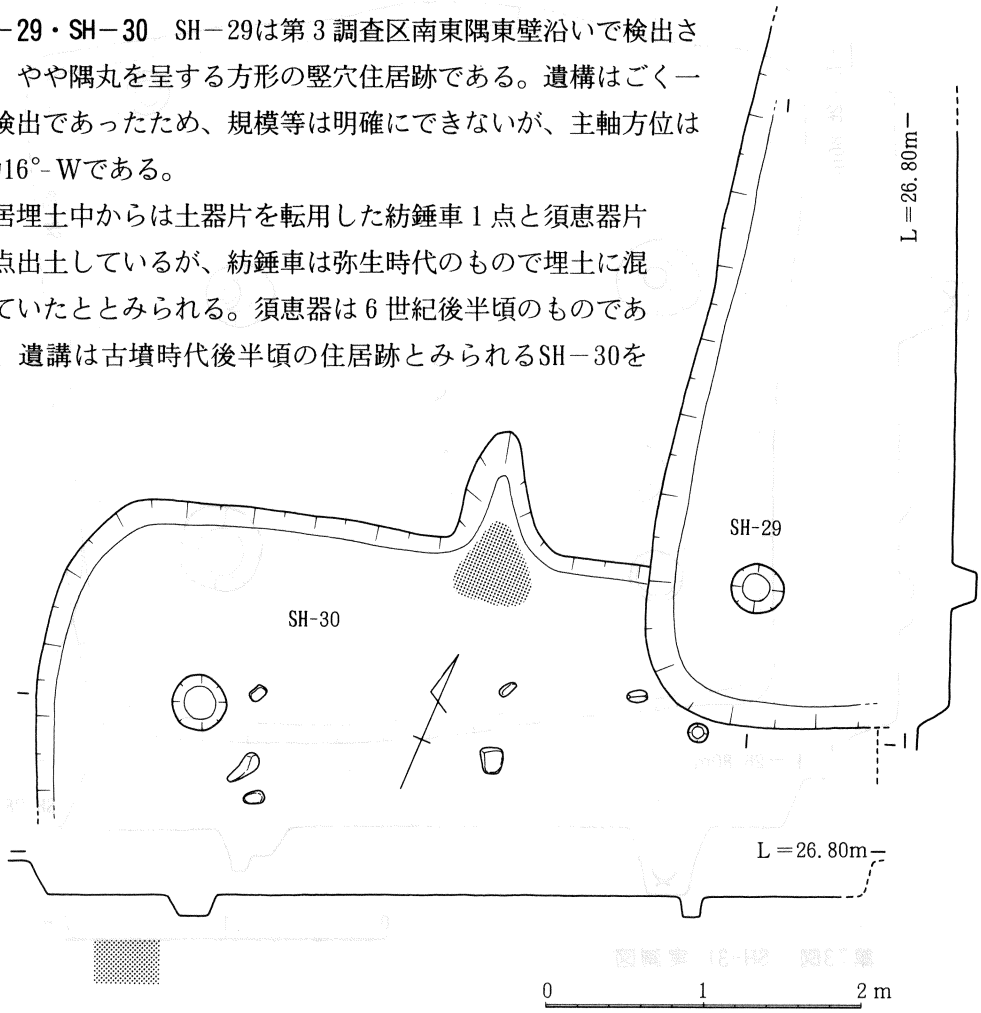
第70図　SH-28 出土遺物実測図

まの状態で検出されている。この土製の支脚はちょうど円錐を逆にしたような形態で、上部が平坦で下部ほど小さくなっており、表面全体に荒い指頭圧痕が残る手づくねの荒い造りである。その遺存状況から当初は余り焼きが良い製品ではなかったようであるが、上部は長期の使用で淡灰褐色に変色し硬化している。

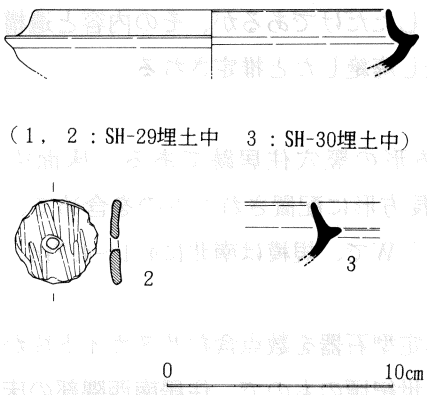
住居の埋土は黒褐色粘性土のみで、竈部分にはその内部に竈片とみられる焼土塊と炭化物の堆積が確認されている。焼土塊の堆積中からは須恵器の甕の口縁部と土師器の甕が出土しており、埋土中からは6世紀後半頃の須恵器片が多数出土している。従ってSH－28は古墳時代後期後半頃に機能し廃絶したと推定される。

SH－29・SH－30　SH－29は第3調査区南東隅東壁沿いで検出された、やや隅丸を呈する方形の竪穴住居跡である。遺構はごく一部の検出であったため、規模等は明確にできないが、主軸方位はN-約16°-Wである。

住居埋土中からは土器片を転用した紡錘車1点と須恵器片が数点出土しているが、紡錘車は弥生時代のもので埋土に混入していたととみられる。須恵器は6世紀後半頃のものであるが、遺講は古墳時代後半頃の住居跡とみられるSH－30を切っていることから、古墳時代後期末頃の所産と推定される。



第71図　SH-29・SH-30 実測図

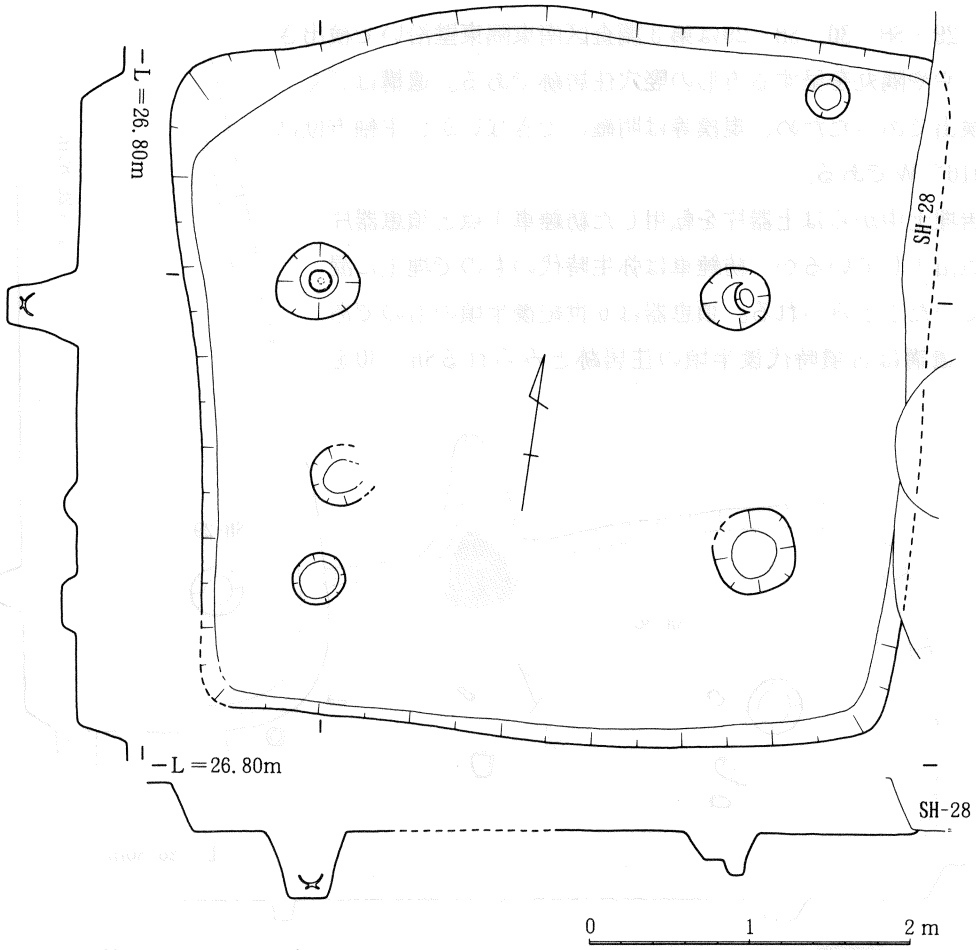


（1，2：SH-29埋土中　3：SH-30埋土中）

第72図 SH-29・SH-30 出土遺物実測図

SH－30は第3調査区南東隅南壁沿いで検出された、やや隅丸を呈する方形の竪穴住居跡である。遺講は一部の検出であったため規模等は明確にできないが、主軸方位はN-約15°-W、東西に約18mを測る。

住居北壁中央部には煙道と考えられる突出部と、その内側床面上に炭化物の堆積が確認されたため竈はあったとみられるが、廃絶時



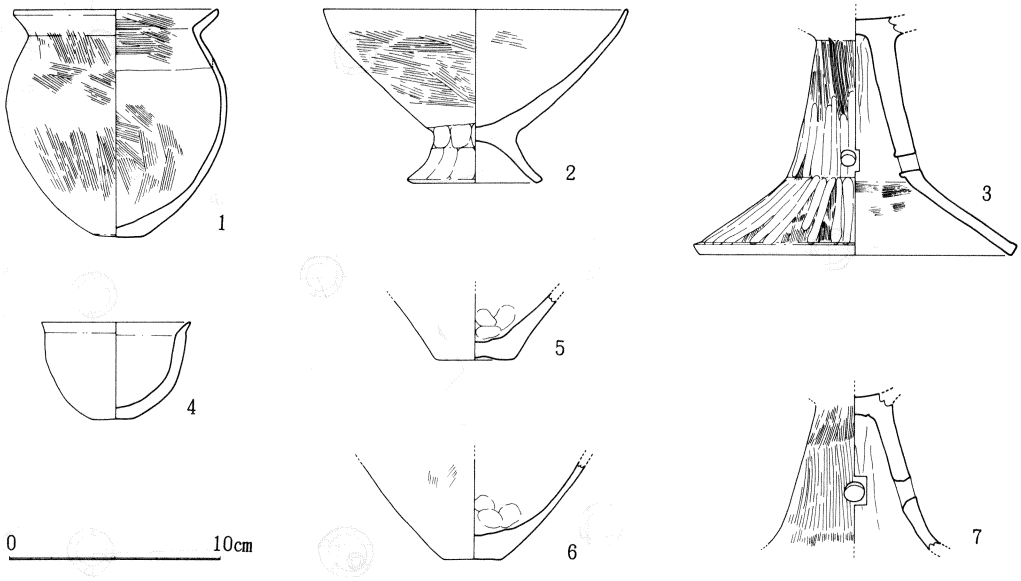
第73図　SH-31 実測図

以前に破壊されていたらしく、埋土中から小さな焼土塊が出土しただけで竈そのものは検出されていない。

埋土中からは土師器や須恵器の小片が数点出土しただけであるが、その内容と遺構の形態などから、SH－30は古墳時代後期後半頃に機能し廃絶したと推定される。

SH－31　第３調査区南西隅部で検出された方形の竪穴住居跡である。床面中央部が攪乱されてはいたが、床面上では各隅寄りに長方形に配置されたものを含めて、６個の柱穴が検出されており、遺講の主軸方位はN－８°－Wで、規模は南北に4.1～4.7m、東西に4.3～4.8mを測る。

住居埋土中からは弥生土器と伴に石鏃６点と不定型石器を数点含むサヌカイト片が多量に出土している。出土した弥生土器はいずれも３世紀頃のもので、住居南西隅部の床面直上で小型の甕が１点と、北西隅の柱穴の深部から脚付き鉢が出土している。



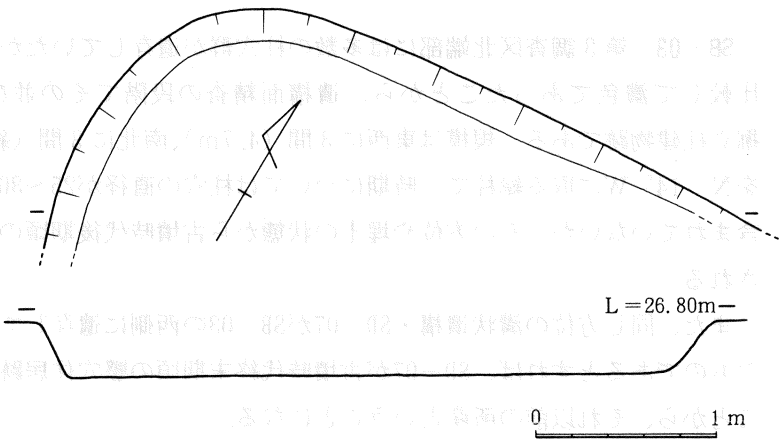
第74図　SH-31 出土遺物実測図（1：床面直上　2：北西隅柱穴中　3～7：埋土中）

竪穴住居跡の柱穴中から完形で土器が出土するということは、廃絶時に柱材を抜いた後に挿入したものと考えられるが、同様の例としては昭和59年度に四国横断自動車道路建設に伴い観音寺市内で実施された一の谷遺跡群の調査で、弥生時代終末期頃の竪穴住居跡の柱穴一ケ所に計3個の甕が挿入されていたことが確認されている。

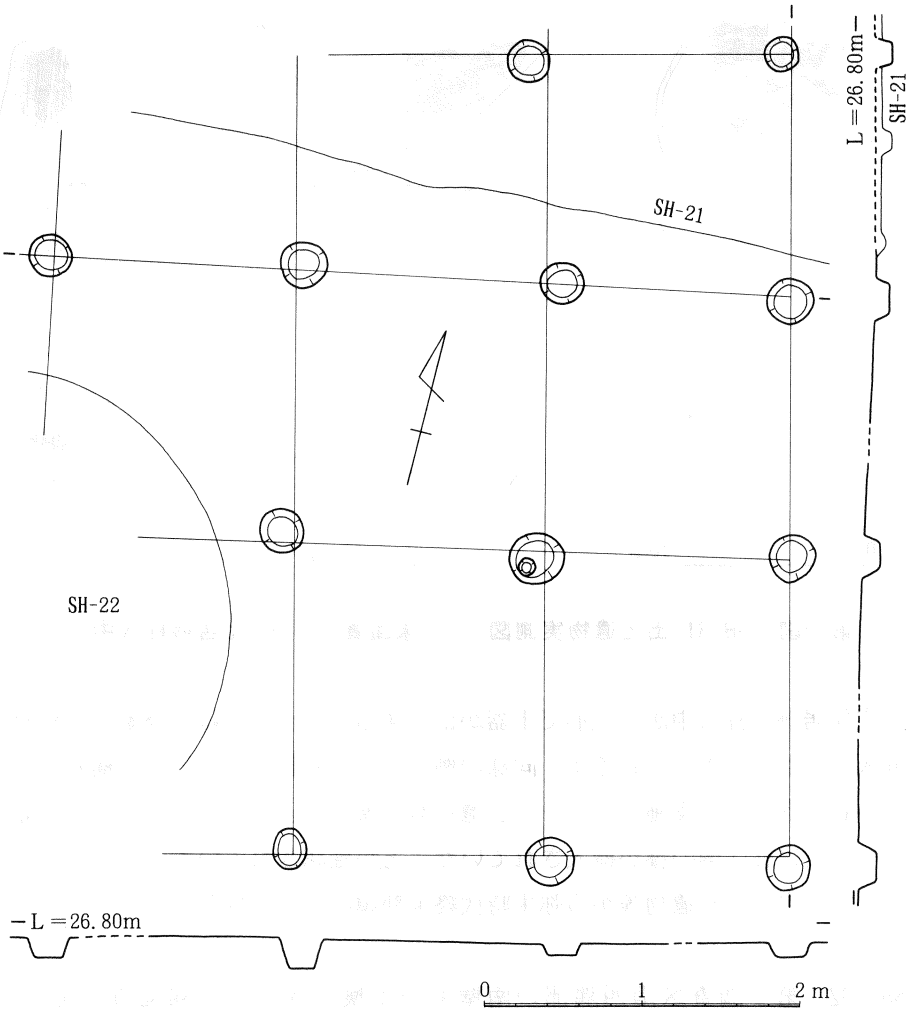
SH－31は出土した遺物等から弥生時代終末期頃の所産と推定される。

SH－32　第3調査区南西隅部の南壁沿いで検出された、隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。遺講はごく一部の検出であったため規模等は明確にできないが、主軸方向はN-約15°-Wであり、竈は検出されていない。

また、炭化物と小さな焼土塊を含む埋土中からは、6世紀頃の土師器と須恵器の小片が数点出土しただけで詳細は不明であるが、古墳時代後期後半頃の所産ではないかと推定される。



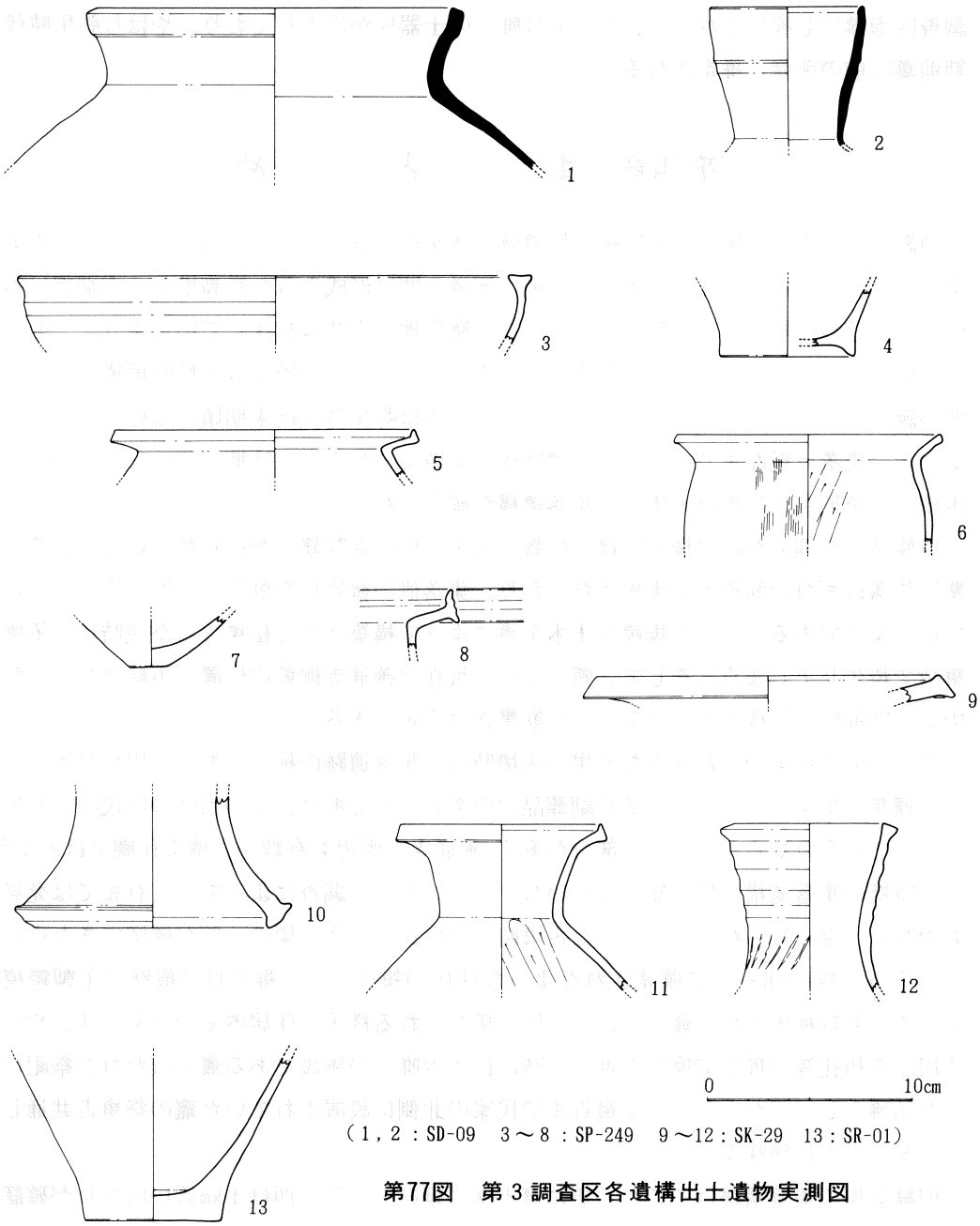
第75図　SH-32 実測図



第76図　SB-03 実測図

SB－03　第３調査区北端部には多数の柱穴群が遺存していたが、その埋土が他のものと比較して濃色であったことから、遺構面精査の段階でその並びが一瞥して把握できた掘立柱建物跡である。規模は東西に３間（4.7m）、南北に３間（約5.0m）以上、主軸方位をN－14°－Wに取る総柱で、時期については柱穴の直径が25～30cmと小さく遺物等は全く含まれていないが、その方位や埋土の状態から古墳時代後期頃の倉庫跡ではないかと推定される。

また、同じ方位の溝状遺構・SD－07がSB－03の西側に遺存しているが、これが同一時期のものであるとすれば、SD－07が古墳時代終末期頃の竪穴住居跡・SH－04に切られていることから、それ以前の所産ということになる。



（1，2：SD-09　3～8：SP-249　9～12：SK-29　13：SR-01）

第77図　第3調査区各遺構出土遺物実測図

第3調査区のその他の遺構　第3調査区では古墳時代後期頃の溝状遺構が3条検出されている。住居間に掘られた遺構と推定されるが、いずれも非常に浅く、他の調査区では同様の溝があったとしても既に削平されてしまっているであろう。

調査区北東部では弥生時代中期頃の竪穴住居跡群が検出されているが、その周辺部ではSP－249、SK－29を始めとして同時期の柱穴や土坑が多数確認されている。

また、第1調査区から第2調査区にかけて検出された自然河川・SR－01の延長は、第3

調査区南端でも検出されたが、ここでは唯一の土器片が出土しており、やはり弥生時代中期前葉以前の所産と推定される。

第四章　ま　　と　　め

当調査区の調査結果だけで旧練兵場遺跡全体を述べることはできないが、その大集落の東端部と考えられていたこの場所は河道と河道の間に形成された微高地で、南端部は緩やかに傾斜し砂礫層となり氾濫原に至る。この微高地は当時は起伏していたようで、その上には弥生時代中期頃から古代人の生活が営まれており、この頃には比較的規模の大きな集落が誕生していたようである。そして、この集落は弥生時代終末期頃には更に大きくなっている。集落は現在までのところ古墳時代前半頃に一時空白の時期が認められるものの、古墳時代後期頃には再び大規模な集落遺構が確認されている。

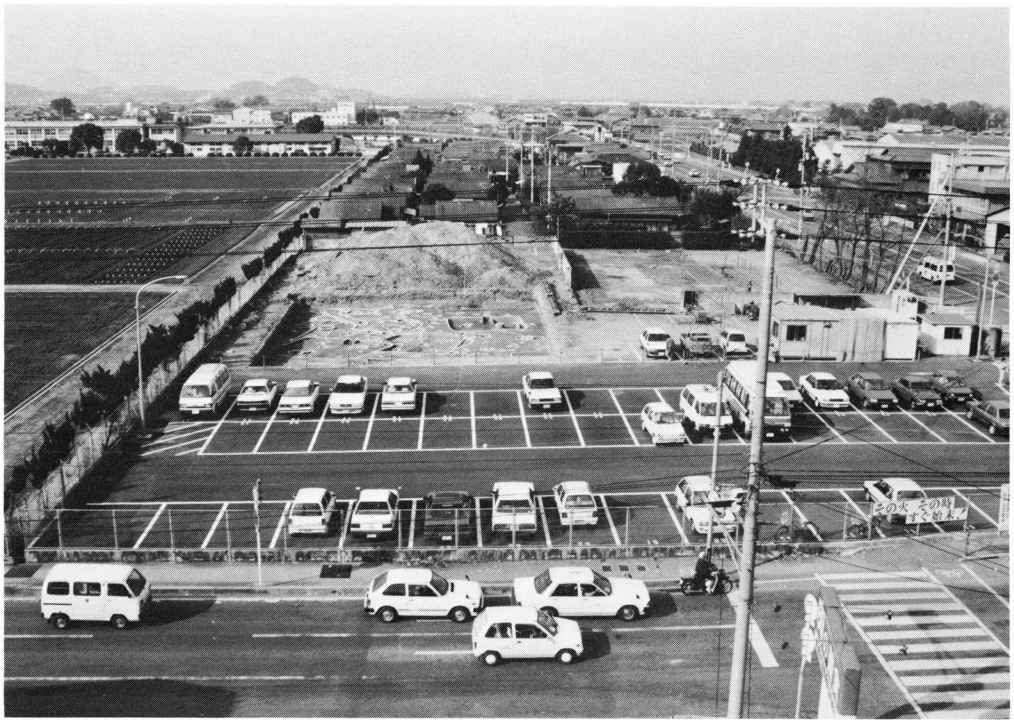
白鳳時代を迎えたこの場所では、仏教の伝来に伴い寺院建立が行われているが、その事業は集落はずれの河道上で実施されており、集落側の微高地を削りその埋め立てが行われているようである。この大規模な土木工事によって構築された伝導寺は奈良時代に不慮の事故で焼失してしまう。そして、暫らくして現在の善通寺伽藍の位置に再建された寺院を中心に門前町が形成されているという筋書きは設定できる。

今回の調査結果の一番大きな成果は古墳時代の集落遺跡の検出にあると思われる。つまり、通常古墳文化の研究は古墳や副葬品の研究が中心であり、その当時の庶民の日常生活については余り知られていない部分が多く、善通寺市周辺も有数の古墳文化圏ではあるが、この時期の集落遺構は殆ど知られていなかった。今回の調査によって、これまでは発見例も少なく、良く知られていなかった古墳時代の庶民の生活の場の一部が確認できた点にあるだろう。特にSH－16で確認されたような住居の築造に伴う掘り具の痕跡や土製鏡模造品、また多数検出された竈からは、住居が構築される様子、住居内での日常生活、やがて住居が老朽化等の理由で廃絶を迎えた時に住居内唯一の施設である竈で行われた祭祀の様子が彷彿として浮かぶが、ごく最近まで民家の北側に設置されていた竈の祭事と共通した点が多いことは興味深い。

旧練兵場の集落遺跡はここから更に東と南に延びており、西は1km近い広がりが確認されているが、遺跡の範囲が広いため、これまでの部分的な調査では未だ旧練兵場遺跡の詳細を知るには至っていない。ここを拠点とした集団の中心的存在である人々の生活の場もどこかに遺存しているのであろうが、ここから北方に広がる平野部にも同時期の集落は広く散在しており、この古代地方都市の全体構造が明確にされることを期待して止まない。

図　　版

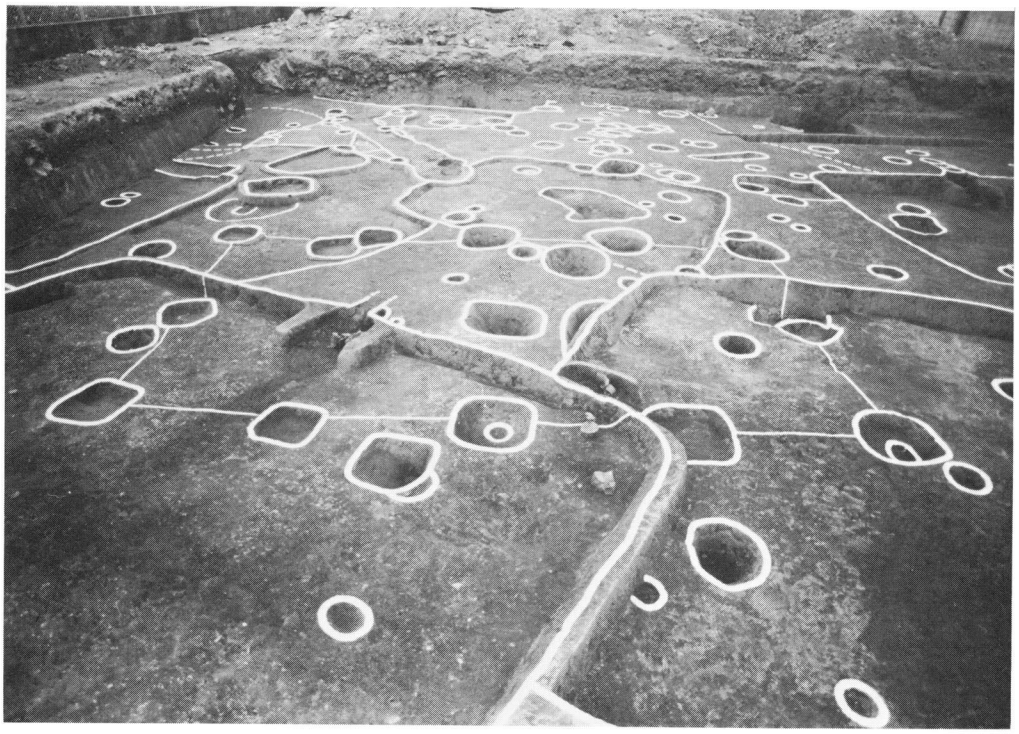
第78図　伝導寺墓地に残る礎石（墓石の台に転用されている）



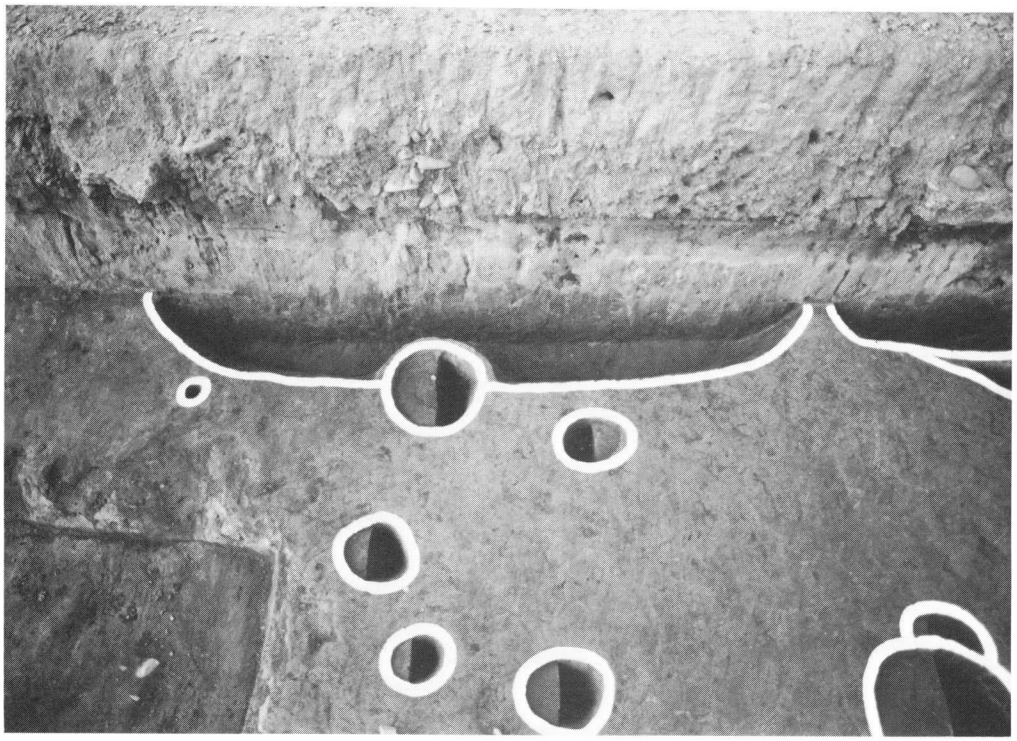
第79図　調査地全景（伝導寺墓地に隣接するビル屋上から北を望む）

第80図　SD-04・SD-05検出状況（第２調査区・北から望む）

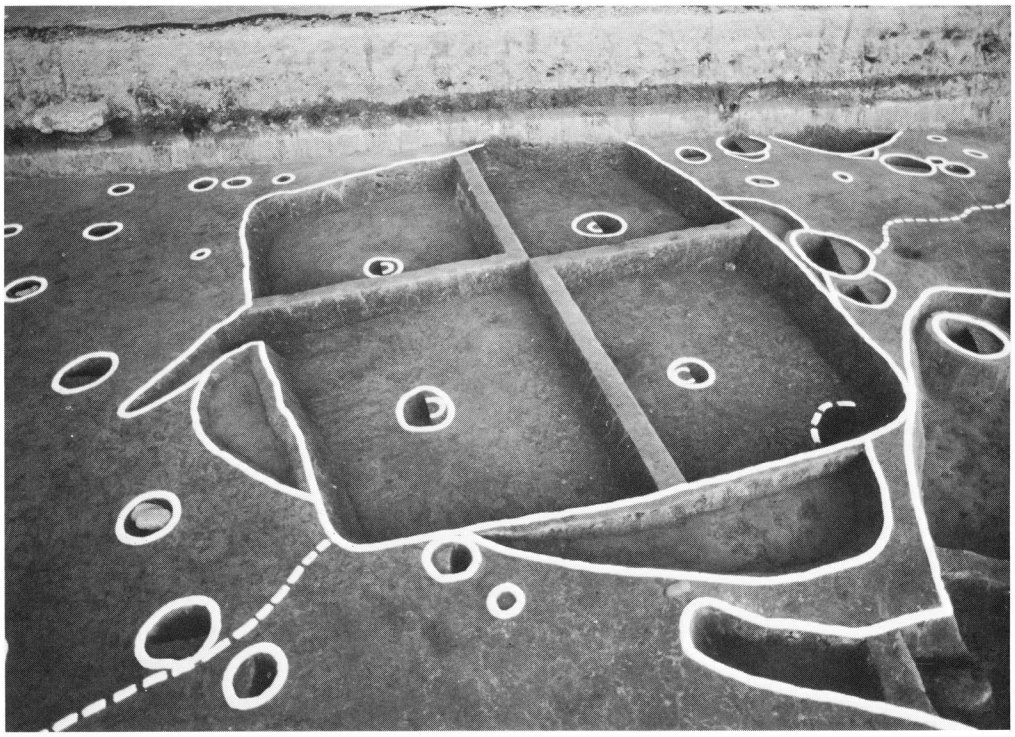
第81図　SD-04・SD-05土層堆積状況（第２調査区西壁土層南端）



第82図　SB-02検出状況（南から望む）



第83図　SH-01検出状況（南から望む）



第84図　SH-02・SH-03検出状況（西から望む）

第85図　SH-02竈検出状況（南から望む）

第86図　SH-04検出状況（東から望む）

第87図　SH-04竈検出状況（南から望む）